

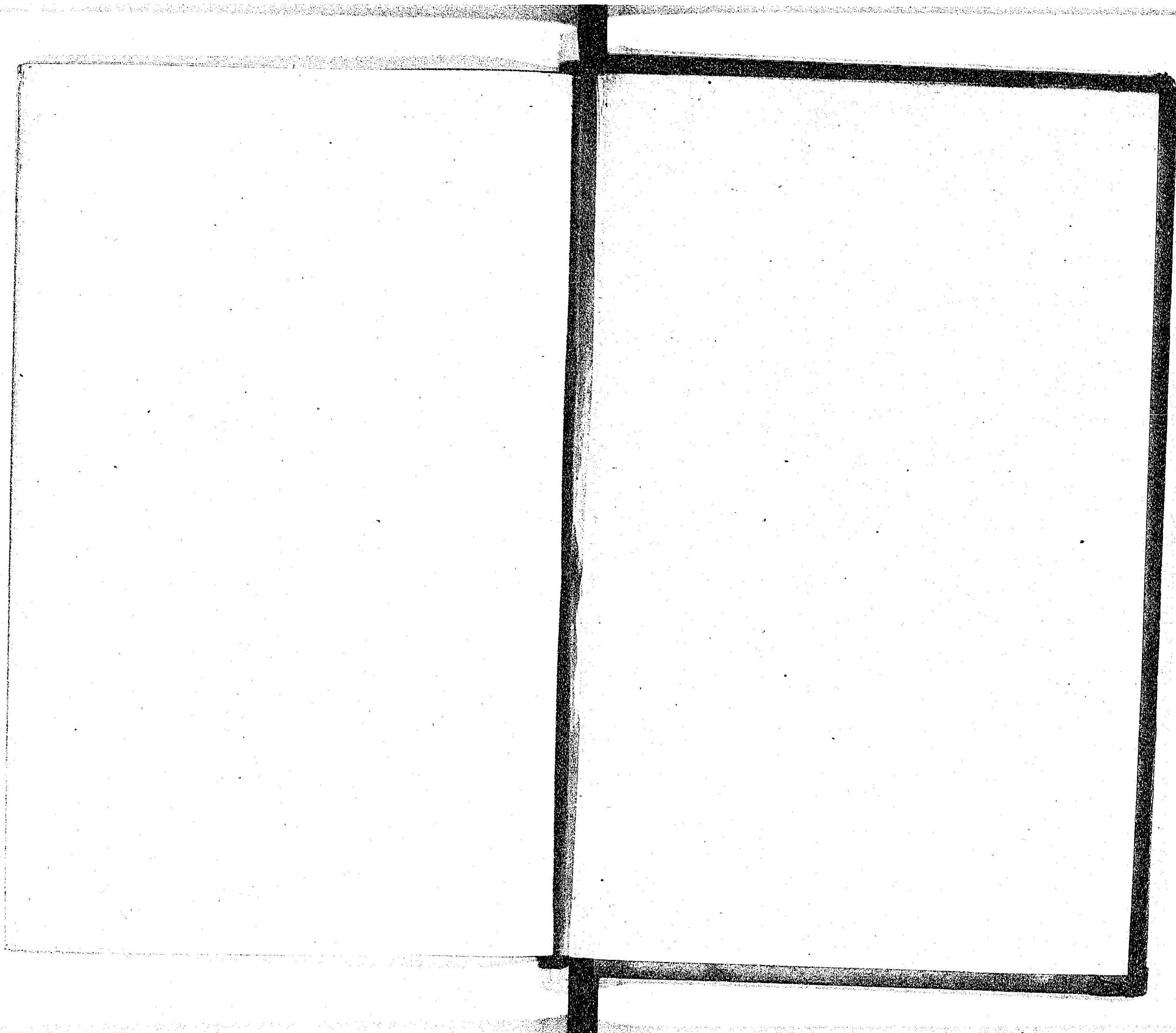
118
2
43

手塚義三郎編纂

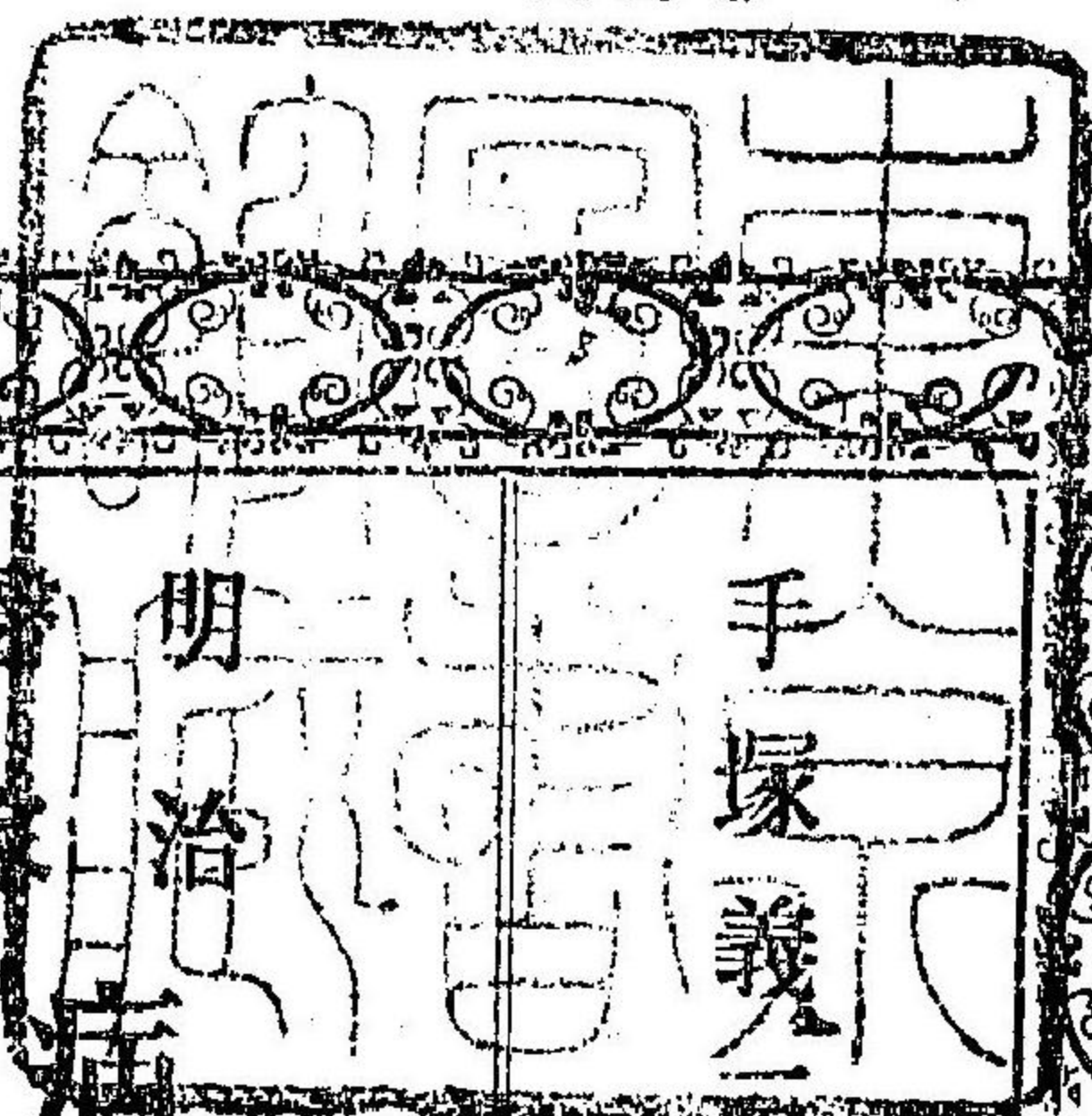
不賣品

明治
醫家
病床
實驗
集
完

明治十八年六月刊行
醫事研究社



特25
225



手塚義三郎編纂

明治
病
床
實
驗
集

不賣品

明治十八年六月刊行

醫事研



完

明治病床實驗集

緒言

一本書ハ目下有名ナル内外國醫諸家ノ實地施療セラレシ珍
病奇患、醫事新論、發明說等ヲ登錄シ及ヒ既ニ世上ノ諸雜誌
ニ廣告セシモノト雖其余輩ノ親シク實地經檢セシモノハ
新患、舊患ヲ撰ハス非說ヲ加ヘ理論ヲ省キ專ラ簡易明瞭シ
易ク以テ聊カ病床研究ノ用ニ供スルヲ主旨トスレハ文意
或ハ牴牾シ亦タ誤謬ナキヲ保シ難シ閱者幸ニ諒セヨ
一全編ヲ別テ內科部、婦人科及ヒ眼科部、外科部トス
一篇中病床實驗說、醫事新論等諸雜誌ヨリ拔華セシモノアリ
ト雖敢テ其書名ヲ記載セス
一編中處方ノ藥量ハ尽ク瓦蘭謨量(瓦蘭謨ハ約シテ黑點ヲ以

テス例之ハ一〇五トアルキハ一瓦蘭謨ナルヲ知ルヘ
シト蓄樂量トヲ比較シ記載セリ又々國名地名ハ文字ノ左
側ニ人名ハ右側ニ總テ黑線ヲ引キ以テ標的トス
一尺度ハ總テ約語ヲ用ユ例之ハ「メートル」ヲ「迷」トシ「センチ
メートル」ヲ「仙迷」トシ「ミリメートル」ヲ「密迷」トナスカ如
シ

明治十八年六月

編者 齋

明治病床實驗集

目次

内科部

白帶下論

脚氣療法實驗說

毛細氣管支炎ニ比魯加爾頻塞天法ノ

効驗

比刺利亞病實驗

水腫經驗ノ說

特異貧血病

河豚中毒經驗說

食糧ノ間歇熱ニ功ヲ奏スル說

沃頓ノ麻拉里亞熱ニ効アル記

一 八

二十三

三十八

四十五

五十

六十

七十一

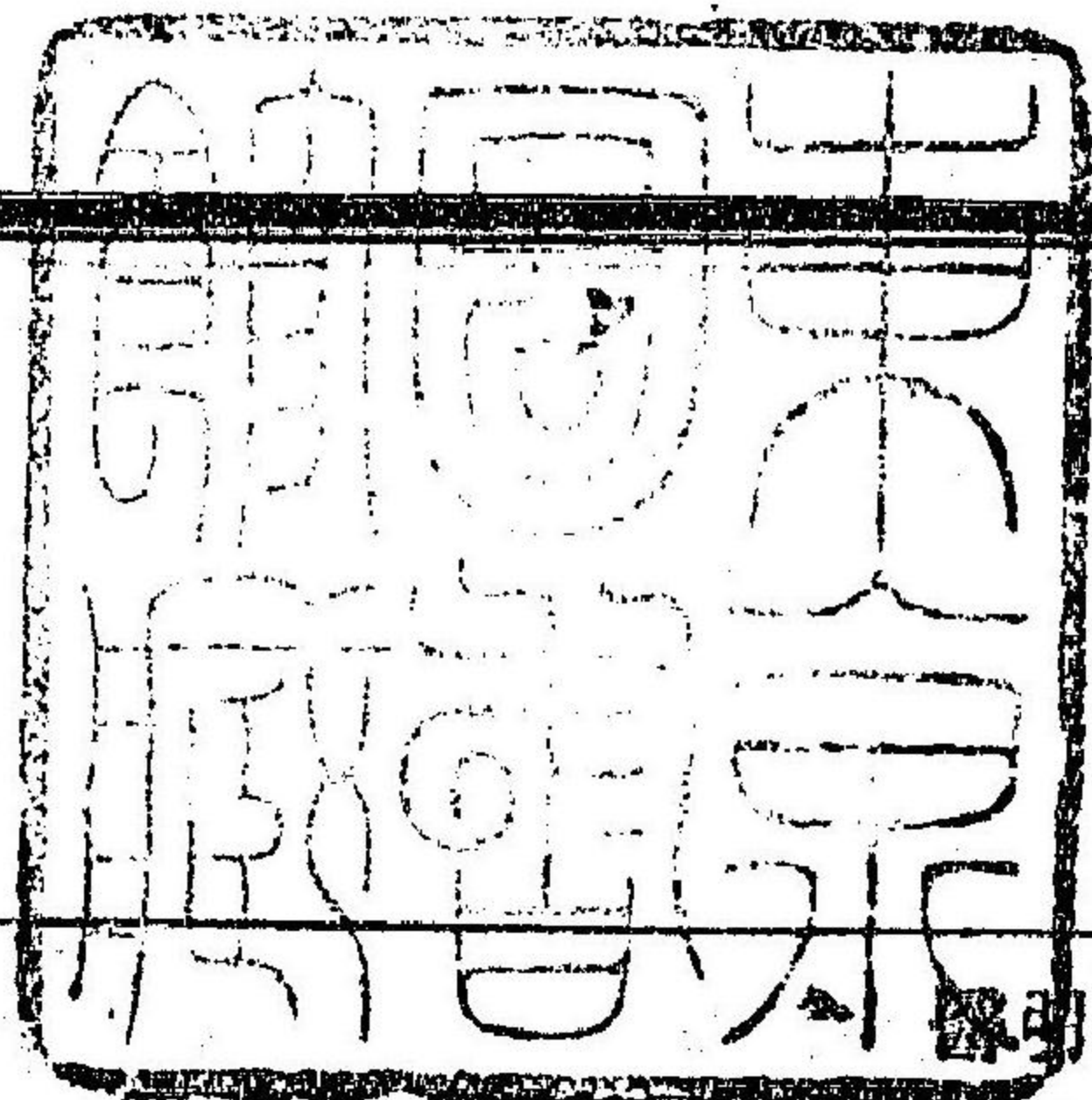
七十二

吃逆ノ簡易療法	七十五
頑固嘔吐治驗	七十六
妊娠中ニ發スル嘔吐ノ療法	七十七
硫酸規厄涅ノ効驗	七十九
川芎越幾斯ノ頭痛ニ効アルノ實驗	八十
滑蟲ヲ藥用ニ供スル論	八十一
痢病氷水灌腸治驗	八十四
實弗的里亞及格魯烏布治法	八十五
火傷治驗	八十九
劇性火傷治驗	九十
婦人科部	
卵巢囊腫施術治驗	九十七
子宮脫治驗	百七

ドクトルヘルツ氏子宮頸管加答兒ノ新療法	百十四
柴田恭齋氏胎兒回轉秘法	百十四
眼科部	
假瞳孔術	百十九
眼科的烙鐵ノ實驗	百二十八
水泡性結膜炎ノ治驗	百三十四
加答刺屈篤施術治驗	百三十七
外科部	
截斷術	百四十三
睪腺藥使用法、注意、并中毒療法	百七十七
上顎截除術	百九十五
顎關節眞性僵直症ニ假關節造爲術ヲ	

施シタル治驗	二百
創傷性破傷風治驗	二百四
畢丸水腫治驗	二百十四
陰囊象皮頭治驗	二百二十一
扁平「コンジロママ」ノ治驗	二百三十一
痔瘻治法	二百三十五
氣管截開術ノ治驗	二百三十七

明治病家
明治病床實驗集目次終



明治病家
病床實驗集

内科部

手塚義三郎
谷岡廣
合纂

○白帶下論

ドクトル プツケマ
ドクトル プレツハ
長谷川 泰

凡ソ婦人病中白帶下ノ如ク多キモノハ非ス蓋シ婦人畢生中
多少白帶下ヲ起スノ時アリ然レ而自ラ其病患ナルニ注意シ
醫治ヲ乞フハ唯其連綿トシテ多量ニ漏出シ刺戟性ヲ有スル
ニ至ルキノミ

(病理) 粘液若クハ粘液膿狀物ノ漏出物、尿道焮衝、氣管枝焮衝、鼻加苔兒ノ一症候タルカ如ク、腔焮衝、子宮內膜焮衝、及ヒ喇叭管內膜焮衝ニ於ルモ其一症トシテ粘膜炎若クハ粘液膿狀物ノ漏出ヲ起ス

(區別) 其原因ニ從ヒ二種ニ區別ス曰ク腔白帶下、曰ク子宮白帶下是ナリ時トシテ兩種相合併スルニアリ甲種ノモノハ腔部ニ限畫シテ荏苒シ或ハ子宮及喇叭管內ニ蔓延ス蓋シ漏出物ヲ起ス所ノ焮衝性作用單ニ子宮粘液ニ限畫スル時ハ腔ニ加答兒ヲ起スヲナキモノアリト雖ヒ子宮漏出物ヨリ起ル產物ヲ受容スル腔モ亦通常連累スルニアリ尙ホ小兒鼻加答兒ノ上皮ヲ侵シ之カ爲メニ乳嘴狀若クハ胞狀ノ疹近接セル面部ニ生スルカ如ク然リ
腔白帶下ハ一種白色乳清狀ニシテ膿狀ヲ呈ハス處ノ液ヨリ成

ル其成分ハ左ノ如シ

- 酸性血漿
- 磚狀上皮
- 膿球
- 血球
- 脂肪分
- 子宮頸ノ管ヨリ出ル處ノ漏出物ハ濃厚軟韌且ツ粘膠ナルト尙ホ鷄子白ノ如ク然リ而シテ其成分ハ左ノ如シ
- 亞兒加里性血漿
- 粘液球
- 變換セル圓柱狀上皮
- 膿球
- 血球

脂肪分

子宮体ヨリ來ル滲出物ハ子宮頸ヨリ來ル者ト粗ホ同一ナリト雖也唯其異ナル處ハ粘膠軟穢ナルヲ少ナク頗ル血液ヲ混スルニアリ

(原因) 原因ヲ二般ニ別ツ曰ク充血ヲ起スカ爲メニ白帶下ヲ發スル原因曰ク瘀衝ヲ起スカ爲メニ白帶下ヲ發スル原因是レナリ

(甲) 充血ニ由ル處ノ原因ハ左ノ如シ

- (一) シュエンプエンブアリニューシニ(分娩后子宮ノ故態ニ復セサルモノヲ云)
- (二) 月經閉止
- (三) 纖維腫、瘰肉若クハ海綿狀變成
- (四) 哺乳ノ經久ニ過ル

(五) 妊娠

(六) 交接過度

(七) 貧血

(八) 子宮轉位

(乙) 瘀衝ニ由ル處ノ原因ハ左ノ如シ

- (一) 子宮内膜瘀衝 子宮体ニ起ルモノ若クハ子宮頸ニ起ルモノ
- (二) 肉芽狀變成
- (三) 梅毒性潰瘍
- (四) 纖維腫若クハ瘰肉
- (五) 腔瘀衝

(豫后) 豫后ハ其原因ニ關ス故ニ其原因除去シ易キ者ニ於テハ其豫后佳ナレ也劇性ノ器質變化ト合併スルモノニ於テハ然ラス

(結果) 子宮白帶下ノ結果ハ左ノ如シ

- (一) 不妊
- (二) 腔焮衝
- (三) 陰唇搔痒
- (四) 陰唇焮衝
- (五) 喇叭管焮衝
- (六) 肉芽狀變成

(療法) 白帶下ノ患者ヲ治療スルニハ先ツ其原因ヲ發見スルヲ要ス若シ其原因子宮腔及ヒ喇叭管ノ焮衝若クハ充血ニ在ルヲ明カナル時ニハ之ニ適切セル治法ヲ行フ可シ

弛緩膨腫セル粘液膜血管ニ緊張力ヲ與へ且ツ過度ノ細胞發生及ヒ血漿ノ滲出ヲ抑制スル治法ハ殊ニ行ハサル可ラス先ツ全身強壯療法例之規尼涅、幾那皮、「ストリキニ」及ヒ鐵

劑ヲ投シ海水浴ヲ行ヒ轉地セシメ滋養單純ノ食料ヲ與へ衝動性ノモノハ之ヲ禁止スルヲ要ス

局處療法ニハ腔ヲ豫メ清潔スルノ後硝酸銀(一分ヲ八分乃至九分ノ水ニ溶解スル者ヲ以テ洗滌シ次テ「リスリン」中ニ蘸ス處ノ綿栓ニ糸ヲ付ケタルモノヲ二十四時間腔中ニ挿入スルノ后患者ヲシテ之ヲ抽出セシム可シ次テ收斂緩和ノ藥液ヲ朝夕一回ツ、多量ニ腔中ニ注入ス可シ收斂藥中尤モ良好ナル者ハ檳皮浸明礬、單寧、亞鉛劑及鉛劑ナリ其尤モ良好ナル方ハ左ノ如シ

單寧酸一二〇、〇 号 リスリン四八〇、〇 十六

右混和シ其一食ヒヲ微温湯一「クワルト」(六合餘)ニ投レ朝夕五分時間ツ、注射セシム

又 皓答六、〇 一 号

硫酸礬土六、〇 一 号

里斯林一八〇〇六号

右混和ス用方前方ニ同シ

○脚氣療法實驗說

東京警視第二病院

脚氣ナル者ハ一種ノ疾病ニシテ其慘毒ヲ逞フスル夏時ヲ以テ甚シトス

抑脚氣ノ我國ニ起ルヤ殆ント全州ニ遍キモノアリト雖モ就中東京惟レ多シトス東京ノ如キハ日本ノ首府天下名醫ノ聚ル所繕生救死ノ術固ヨリ其人ニ乏シカラス而シテ獨リ脚氣ノ治法ニ及ンテ漠然未タ定ル所アラフス東京ニシテ尙ホ且ツ此ノ如シ况ヤ州郡ヲヤ蓋脚氣治法ノ從來明驗ノ効ヲ奏セサル所以ハ畢竟尙ホ未タ其病原如何ヲ厥知スル能ハサルニ因ル故ヲ以テ世間此ノ病ヲ療スル者專ラ其症候ニヨリ治法ヲ冥々

ノ中ニ求メテ以テ之レカ治ヲ試ムルニ超サルナリ我輩ノ聞ク所ニ據レハ脚氣ノ治法ニ様アリ一ハ滋養強壯ヲ主トシ一ハ減損療法ヲ主トスルモノ是レナリ
強壯以テ氣力ヲ旺盛スルノ良藥ハ世人皆其鉄劑タルヲ知ルト雖モ脚氣患者ノ如キハ大約消化不良ヲ兼ルモノ多キヲ以テ終始能ク之ヲ服用スル者實ニ罕レナリ是レ其奏効全カラサル所以ナリ然リ而シテ客歲警視病院ニ於テ鉄ト蛋白トヲ調和シ以テ一種ノ鉄劑ヲ製シ目シテ鉄蛋水ト云フ爾來院内患者アレハ則隨テ用ヒ隨テ驗シ其効能從來稱用スル處ノ鉄劑ニ比スレハ遠ク其右ニ出ルアルヲ見ル鉄蛋水ハ慢性ノ脚氣ニシテ消化不良且ツ貧血ノ者ニ於テ殊効アリ今年ニ及ンテ鉄蛋水ノ皮下注入ヲ試ミ始テ大ニ効檢アルヲ發明セリ鉄蛋水ノ皮下注入ニ益アルハ唯リ体内消化吸収ヲ能クスルノミ

ナラス亦々能焮衝ヲ誘起スルナシ蓋シ亦良劑ト謂フ可シ鉄
蛋水ハ脚氣ノ浮腫麻痺ヲ去ル實ニ妙ナリトス全身不遂毫モ
知覺ナキ者ニシテ鉄蛋水ヲ用ル旬日ヲ出ス遍身感覺ニ復スル
ノ効アルハ吾輩ノ親ク實檢スル處ナリ因テ左ニ一二ノ例ヲ
舉ケ鉄蛋水ノ奇効ヲ脚氣ニ奏スルノ確証トシ又將ニ廣ク之
ヲ江湖ニ公ニシ普ク諸君子ノ試驗ヲ經テ以テ繕生救死ノ缺
ヲ補助スル所アラントス

第一例

兵庫縣播州姫路

岩田鍾太郎

二十年

平素健康曾テ患フル所アルコトナシ昨明治十年七月故郷姫路
ニ在テ始テ脚氣ニ罹レリ同年十二月東京ニ出テ本年三月巡

査ヲ奉命ス同五月四肢ノ尖端少ク知覺鈍麻ヲ覺ホヘ六月ニ
至テ病性増進シ下肢知覺鈍麻運動不遂及ヒ水腫ヲ發シ尿量
減少シ食機不良歩行困難トナリ同月二十九日入院治ヲ乞フ
療法左ノ如シ

二十九日「アコニット」及ヒ攪性下劑ヲ投ス此治法ヲ以テ七月

十二日ニ至ルモ病症少シモ快セス反テ益々増惡トナリ

七月十三日前方ヲ休止シ鉄蛋水ノ皮下注入ヲ施ス

同十四日注入依前尿量少シク増加シ患者少シク輕快ヲ覺フ

同十五日注入依前水腫麻痺大ニ減少ス是ヨリ十八日ニ至ル

迄テ更ニ異ナル所ナシ

同十九日注入依前諸症漸々佳境ニ赴キ消化機頗ル興奮セル

ヲ以テ注入ノ他尙ホ鉄蛋水ノ内服ヲ投ス

同二十日注入ヲ休止シ内服ノミヲ與フ

同廿一日ヨリ廿三日ニ至ル迄テ治方前ニ同シ
同廿四日復々皮下注入ヲ始メ同方ニテ八月一日ニ至ル爾后
ハ八月十四日ニ至ル迄只内服ヲ用ヘシノミニ愈々全癒ニ
達シ已ニ歩行スルヲ得テ院ヲ辭シ去ル

第二例

石川縣越前大野士族

中村齊母

三十七年

(既往症) 稟質虛弱ナリ明治十年ノ秋東京ニ來リ翌年六月
上旬四肢ニ鈍麻不遂ヲ覺ヘ微ニ浮腫ヲ發セリ爾後逐日麻痺
増進シ同月十三日ニ至リ終ニ全身ニ蔓延シ寸歩ヲナスヲ克
ハス板上ニ平臥シテ病院ニ來レリ

(現症) 面色慘憺四肢全ク運動屈伸スルヲ克ハス其狀恰モ

木人ノ如シ上肢ハ衣襟ヲ正シウスルヲ克ハス又々書筆食箸
ヲ探ルヲ克ハス下肢ハ膝蓋ヲ高クスルヲ克ハス又々寸傍ニ
移ツルヲ克ハス指爪ヲ以テ皮膚ヲ刺戟スルモ少シモ知覺ス
ルコトナク點然トシテ仰臥スルノミ聲音甚々低嘎シテ言語
澁難ナリ只一語々々ヲ斷發シテ其苦狀ヲ述フ心窩胸部大ニ
苦悶ヲ覺エ呼吸促迫小便不利大便秘結食機欠損セリ脈搏數
ニシテ細沈且ツ弱ナリ心動微弱ニシテ手掌ニ應セス亦々心
尖衝動モ同ク指頭ニ感セス打診スルニ胸骨下端部及ヒ左乳
線ニ於テ濁音ヲ發セス聽診スルニ心音甚々微ナリ因テ心動
ヲ興起シ食慾ヲ旺盛ナラシメンカ爲ニ下方ヲ處ス

「ホミカエキス」〇〇六
氏 甘汞 〇六
氏

右散三包トナシ一日三回分服

赤葡萄酒 六〇〇
号

右三回ニ分服ス

水製麥奴エキス 〇、二三 瓜 「グリスリン」 〇、四六

蒸餾水 四、〇一 弓

右皮下注入

其他常用瀉腸ヲ行フ

十三日夜十一時呼吸益促進、嘔吐頻發、精神恍惚、脈搏增數、
カタク生力沈衰シ大ニ危險、兆アリ依テ下方ヲ與フ

麝香 〇、四六 瓜

龍腦 〇、二三 瓜

甘草末 適宜

石爲散分六包毎二時一包ツ、

其他胸部ニ芥子泥ヲ貼ス

十四日前麝香散及ヒ赤葡萄酒ヲ與フ諸症同前利尿二回六〇
〇、〇大便一行ヲ利ス

十五日治方同前且ツ鉄蛋水皮下注入ヲ股間ニ施ス

十六日鉄蛋水注入ヲ背部兩側ニ行フ内服左方ニ轉ス

龍腦 二、〇半 弓

「エーテル」 一、二〇三 弓

回生油 六、〇半 弓

右毎二時二十滴宛水中ニ滴シ用ユ

十七日前方

十八日同

十九日諸症輕快ヲ告ク患者自ラ左手ニ烟管ヲ取ルヲ得ル
ノミナラス全身稍ヤ知覺ノ機能回復スルヲ覺エ尙ホ前方ヲ
持長スル三四日ヲ經テ兩手隨意ニ運動シ下肢モ亦々隨テ運
動回復シ食機漸ク善良ニ赴ケリ爾后追日快氣同月卅日欣然
トシテ院ヲ辭シ去ル尙ホ前方ヲ行フ二週間唯々兩足少シ
ク知覺鈍麻ヲ遺殘スルノミコシテ七月十四日歸縣ノ爲東京

ヲ發程セリ

第三例

越前國大野住

寺島岩吉

二十一年

(既往症) 曾テ脚氣症ヲ患ヘシトナシ昨十年始テ東京ニ來
 リ淺草片町ニ寓セリ本年五月ニ至リ下肢倦怠知覺鈍麻且ツ
 少シク水腫ヲ發シ治ヲ當院ニ乞フテ五六日ニシテ諸症甘快
 セリ爾后七月八日前症再發シ加フルニ大便秘結尿量減少心
 悸亢盛胞腹不發ナルヲ以テ同月二十五日入院セリ
 (現症) 全身著シク浮腫シテ下肢及ヒ上肢ニ知覺鈍麻運動
 不遂ヲ發シ脈搏大軟ニシテ數ナリ大小便共ニ僅少食慾常ノ
 如シ尿ヲ檢スルニ蛋白ノ痕跡ヲ見ス

二十五日硫酸麻痺涅失亞旃那ノ下劑ヲ投ス
 二十六日重炭酸曹達及ヒ硝酸蒼鉛ヲ與フ
 二十七日鉄蛋水八〇㊦_二ヲ取り皮下ニ注入スルテ一回此日尿
 量二七〇〇㊦_九
 二十八日實斐多利私浸ヲ内服セシム尿量六〇〇〇㊦_{二十}
 二十九日實斐多利私ノ内服及鉄蛋水ノ皮下注入ヲ行フテ前
 ニ同シ尿量四五〇〇㊦_{十四}
 三十日内服皮下注入共ニ同前尿量六六〇〇㊦_{二十}
 三十一日實斐多利私ノ内服ヲ休止シ皮下注入ニ鉄蛋水ヲ用
 エルノミナラス更ニ鉄蛋水一食匕ヲ取リテ内服セシムルテ
 一日三回尿量七五〇〇㊦_〇此日始テ顔面ノ浮腫少シク減退セリ
 八月一日内服藥及ヒ皮下注入前ニ同シ尿量七八〇〇㊦_{二十}
 二日依前尿量七二〇〇㊦_四

三日 依前尿量一〇〇〇〇 三
 四日 依前尿量八四〇〇 八
 五日 依前尿量一一七〇〇 八
 六日 依前尿量一九二〇〇 此日患者自ラ輕快ヲ告ク
 七日 依前尿量一八六〇〇 六
 八日 依前尿量二〇〇〇〇 六
 九日 依前尿量一九〇〇〇 水腫大ニ減少シ筋肉柔軟トナル
 十日 依前尿量一〇〇〇〇 三
 十一日 依前尿量一八三〇〇 六
 十二日 依前尿量九三〇〇 三
 十三日 依前尿量九六〇〇 三
 十四日 依前尿量一二八〇〇 四
 体力頗ル増加シ曾テ寸歩シ得サルモノ今ヤ已ニ他人ニ扶持

セラレ少ク運行セルニ至レリ此日復々尿ヲ檢スル蛋白及ヒ
 糖分少モ含マス異重ハ一〇二〇ナリ

第四例

岐阜縣

沼

某

十八年

明治十年長崎ニ於テ脚氣症ヲ患エタリ翌年四月東京ニ來リ
 日ナラヌシテ全身違和下肢ニ水腫及ヒ知覺運動麻痺ヲ發シ
 心下不穩食慾缺損屢々惡心嘔吐アリ大便秘結尿量減却ス
 八月五日始テ入院ス心忪亢進呼吸促進舌上白苔下肢水腫麻
 痺患者苦悶頭痛ヲ訴フ爰ニ於テ實斐多利私浸ニ醋酸加里溶
 液ヲ與フ

六日病症増惡全身水腫トナレリ海水水浴(食鹽半匕ヲ攝氏四十

度ノ熱湯中ニ投入スルモノヲ施シ浴後心悸亢盛スルヲ以テ
心部ニ氷嚢ヲ掩フ此時ニ當リテ患者多ク發汗シ内服セシム
ルニ「カル、ス」泉ヲ以スト雖直ニ吐出シ服用ニ堪サル故ニ
「アコニット」丁幾醋酸加里溶液ヲ内服セシム

七日患者輕快ヲ覺エト云然レモ尿量未タ多カラス前藥ヲ内
服セシム

八日前藥ヲ止メ初テ鉄蛋水皮下注入ヲ施ス是ヨリ尿量漸々
增多シ來ル

九日注入同前尿量六六〇、〇二十

十日同前尿量七五〇、〇二十

十一日同前尿量七八〇、〇二十

十二日同前尿量八四〇、〇二十

十三日同前尿量一〇二〇、〇三十四

十四日同前尿量同上

十五日同前尿量一二〇〇、〇患者食機愈々復起シ生力活潑ト
ナルヲ以テ皮下注入ヲ止メ鉄蛋水ノ内服ヲ投ス

十六日鉄蛋水ノ内服尿量一二〇〇、〇尙ホ快癒ノ機ヲ扶助セ
ンカ爲メニ「アユニット」醋酸剝篤亞斯ヲ與フ

十七日前法利尿一八〇〇、〇六十

十八日前法利尿二二二〇、〇七十二

十九日前法利尿一五〇〇、〇水腫及ヒ麻痺全ク退散シ心動常
ニ復シ食欲故ノ如ク本日稍ヤ歩行ヲ試ムルニ至レリ

右鐵蛋水ニ依リテ良効ヲ得ルモノ尠カラスト雖トモ悉ク皆
之レヲ記載セルヲ要セス今其四例ヲ取テ同藥品ノ脚氣症ニ
効アルヲ証知ス殊ニ前二例ナル病症ノ如キハ其勢危險猛惡
ナルモ治績速ニ顯ハレ奏効確實ナリ第三第四例ニ據テ之ヲ

見レハ鉄蛋水ハ脚氣ニ適スルノミナラス尙利尿增多ノ効モ其力ニ因ルコトヲ知ル初メ實斐多利私ヲ投スルモ利尿ノ効驗ナキヲ以テ之ヲ止メ鉄蛋水注入ヲ試ムル以來尿量大ニ増加シ時日ヲ經テ其量平常ニ倍加シ著シキ治効ヲ呈セシテ前例ヲ以テ明瞭也我警視病院ニ於テ此ノ如キ鉄劑ヲ與テ脚氣ノ本症ヲ平治シ傍ヲ合併ノ症狀アレハ應症其藥ヲ配與ス即チ心悸亢盛脈數ナルモノニハ實斐多利私雙鸞菊等ヲ投シ食欲減損スルモノニハ重炭酸曹達硝酸蒼鉛ニ茴香油等ヲ配伍シ食機震起スルニ於テハ鉄蛋水ヲ内服セシメ或ハ規尼涅ヲ伍用ス水腫減却筋力不遂ヲ殘遺スルノ症ニハ感得傳電氣ヲ施用ス

是レニ據テ之ヲ考フレハ脚氣ナルモノハ必ス身體滋養ノ妨碍ニ因スル者ナル可シ故ニ須ク滋養療法ヲ施スヲ以テ緊要トス聞ク日本醫流ニシテ脚氣ヲ療スルニ專ラ赤小豆ヲ喫セシムルト同豆ノ脚氣症ニ効アルハ其穀物中最モ滋養分ニ富メルヲ以テナリ己ニ我院ニ於テモ他ノ滋養他含ノ物品ヲ撰テ施用スルヲ以テ專務トス

○毛細氣管支炎ニ比魯加爾頻ト寒天法ノ効驗

原田 豐 述

夫レ嬰兒ハ身體ノ構造薄弱ニシテ氣候ノ變更ニ感觸シ易ク隨テ其被害モ亦酷シク爲ニ夭折スルモノ往々之レアリ故ニ苟モ刀圭ニ從事スル輩ハ汲々トシテ之ヲ救濟スルノ道ヲ講究セスンハアルヘカラス蓋シ嬰兒ノ常ニ患ヒ易ク且ツ死亡ヲ致ス者ハ各種ノ呼吸器病ニ若クハナシ就中氣管支炎ノ如キハ世間最モ夥多ニシテ其毛細氣管支ヲ侵スモノハ輒モスレハ危篤ニ陷ラシメ命ヲ殞スニ至ル然ルニ其ノ療法ハ今日ノ

如キ醫學進步ノ域ニ至ルモ仍ホ發汗祛痰吐劑及ヒ温浴等ノ舊法ヲ襲用スルニ過キス是レ輕症ニアリテハ往々病魔ヲ一掃スルノカアリト雖也劇症ニ於テハ曾テ寸効アルヲ見ス遂ニ眞ノ肺炎ニ陥リ夫ノ夭折ノ害ヲ被ムルモノ其例鮮少ナラサルナリ豈ニ痛歎ノ至リナラスヤ余頃日嬰兒ノ毛細氣管支炎最モ劇症ニ罹リシモノ二名我醫院ニ投シテ全治ヲ得シヲ親驗セリ則チ一ハ最モ急性ニシテ一ハ劇熱稽留シ將ニ結核ニ陥ラントセシモノナリ

甲症 病性最モ急劇ニシテ從來施用セル發汗祛痰吐劑及ヒ温浴等ノ如キ舊來ノ療法ヲ固守シテ之ヲ放置スルニ忍ヒス依テ先ツ温浴ニ兼テ比魯加爾頻ヲ試用セシカ發汗祛痰ノ効頗ル著シク且ツ大ニ經邊ヲ短縮セシメ治癒甚々速カナルカ如キヲ覺フ

乙症 劇熱連綿トシテ久ニ亘リ且ツ咳嗽劇甚ナルカ故ニ充全ノ藥汁ヲ内服セシムルヲ得ス規尼涅ノ灌腸法ヲ行フモ奏効著シカラス加之患兒啼泣嫌忌シテ其全量ヲ浣注スルヲ能ワス太々遺憾ナリ乃チ一法ヲ按シ全身寒經法小兒ヲ被包シ紋波ヲ取リ之ヲ某温度ノ冷水ニ浸シ絞リテ全身ヲ包纏シ且ツ毛巾ヲ以テ其上ヲ掩ヒ數十分時間ニシテ解熱セサレハ更ニ交換シ尙ホ解熱セサレハ試ムルニ其施用シ易キト實効アルトハ内服及ヒ灌腸ノ比ニアラス且ツ患兒モ亦能ク之ニ耐フルヲ以テ乙症ノ如キ症ニ於テ無二ノ良法タルヲ知レリ蓋シ寒經法ハ曾ニ解熱ノ効アルノミナラス既ニ衰憊セル諸機能ヲ興發振起スルノ偉績ヲ見ル是ヲ以テ我輩ノ適々此法ヲ實地ニ施用セントスル病者アルモ奈何セン患兒ノ父母親戚舊習ヲ脱セス却テ之ヲ畏怖シ此法ヲ施行スルヲ肯セス空シク拱手シテ死ヲ待タサルヲ得ス甚々シキハ治ヲ他醫ニ乞

フニ至ル故ニ今此ノ如キ症ニ逢ハ、寒經法ノ利得ヲ論シ奏
効確實ナル詢ニ救急ノ要策タルヲ明示シ病家ニ信ヲ得テ而
ノ后ニ此法ヲ施用シ益々該法ノ効用ヲ究明センコトヲ切望ス
茲ニ患兒二名ノ治驗ヲ掲ケ其要領ヲ報道スル左ノ如シ

第一例

近藤泰齡二歳血族健全生后七ヶ月ニシテ頭瘡ヲ發シ醫治凡
ソ半年ニシテ治癒ス昨年二月輕易ノ氣管炎ニ罹リ咳嗽發熱
之カ爲メ一時ハ哺乳ヲ欲セカリシカ此症二週間許ニシテ殆
ント快治シ爾來健康患フル處ナシ然ルニ本年二月二日感冒
ノ爲ニ頻リニ嘔噎ヲ發シ翌三日ニ至リ体温亢進シ時々咳嗽
ヲ發シ呼吸稍不利且喘鳴ヲ帶ヒ夜眠安カラズ口喝引飲ス此
夜一回ノ嘔吐アリ四日神思違和發熱益旺盛シ咳嗽增劇ス
五日發熱愈甚タシク咳嗽頻發呼吸促迫顔面蒼白色ヲ呈シ食

機缺損身体倦怠唯眠ヲ嗜ムノミ是ニ於テ同日我院ニ投ス于
時正午十二時ナリ之ヲ診スルニ身体ノ榮養發育共ニ良善ナ
ル一男兒ニシテ面色蒼鼻翅顫動口唇チヤノーセヲ呈シ舌白苔
ヲ被リ食機欠損煩喝引飲体温三十七度七分脈細數ニシテ百
六十搏呼吸頻ニシテ八十回吸氣ニ由リテ左右ノ季肋部陷沒
シ且ツ既ニ炭酸鬱積ヲ起シテ患兒頻リニ眠リヲ嗜ミ時々咳
嗽劇發シ將ニ窒息セントスルノ狀アリ打診上確着ノ變候ヲ
認メスト雖モ聽診上殊ニ左肺ノ前部ト右肺ノ上后部ニ於テ
著明ノ囉音ヲ聞ク是レ即チ劇甚ノ毛細氣管支炎ニシテ最モ
危險ノ症タルヤ疑ヲ容レス依テ直ニ攝氏三十八度ノ温湯ニ
浴セシメ兼テ大海綿ヲ以テ頭部ニ冷水ヲ灌漑シ且心臟ノ麻
痺ヲ防ンカ爲メニ綿布爾油ヲ以テ皮下注入ヲ施スト二回次
テ左方ヲ處ス

鹽酸比魯加爾類

〇〇二分

水

六〇〇二分

單舍利別

一五〇二分

每一時一茶匙ヲ與フ

蒲爾篤酒

六〇〇二分

單舍利別

一〇〇二分

右前劑服用后一茶匙宛

攝氏三十八度ノ温浴

朝夕一回宛行フ

第二日 昨日入院后夜ニ至ル迄温浴ヲ行フ三回ニ及ヘリ
然レモ諸症更ニ緩解スルノ狀ナク日夜安眠ヲ得ス且ツ下利
三行アリ今朝体温三十八度五分脈百三十搏呼吸六十回ニシ
テ仍ホ面色蒼白ヲ帶ヒ口唇「チヤノーセ」ヲ呈シ神思鬱々トシ

テ眠ヲ嗜ミ呼吸喘鳴咳嗽頻發聲音嘎嘶シ肺ノ囉音部益廣延
レ食欲欠乏煩喝引飲手足厥冷大ヒニ疲憊ヲ來セリ依テ復々
温浴ヲ行ヒ尙ホ前記ノ諸方ヲ與フ浴后体温三十八度ニ低下
シ脈搏亦百二十至ニ減少シ然レモ午後ニ至リ体温再ヒ上昇
シテ四十一度一分ニ達シ脈搏百六十至呼吸六十回ニ迄ハ諸
症愈増惡スルヲ以テ羯布爾ノ皮下注入ヲ施シ前方比魯加爾
類劑ヲ每一時一茶匙半ニ増量シテ尙ホ温浴ヲ行フ浴后發汗
淋漓滿身ヲ濕ホシ此夜初メテ母ノ乳ヲ哺フ稍ヤ安眠スルノ
狀アリ

第三日 昨夜發汗多ク嘔吐一回アリ夜半ヨリ眠就カス今朝
軟便快通スル三行朝來体温三十八度ニ下降シ脈百四十搏呼
吸六十八回ニシテ諸症大ニ輕快シ呼吸頗ル緩解シテ喘鳴ヲ
聽カス顔面及ヒ口唇ノ「チヤノーセ」全ク去リ稍ヤ紅色ヲ呈ス

診ヲ行フニ肺部ノ囉音少ク減却ス昨夜迄ハ精神恍惚トシテ
人事ヲ識別セス宛モ昏睡狀ヲ呈シ又絶テ啼泣セサリシカ朝
來神思明了トナリ從來服用セシ處ノ藥液ヲ厭忌シ且ツ能ク
啼泣スルニ至レリ日夕体温三十八度六分脈百四十八搏呼吸
六十回ナリ方藥前方ニ從ヒ且ツ朝夕二回ノ温浴ヲ行フ該夜
初メテ快寢ニ就ク

第四日 朝体温三十八度脈四十八搏呼吸六十回顔色常ノ如
ク稍ヤ紅ヲ潮シ精神益々明亮トナリ食機少ク振フ但シ咳嗽
頻發呼吸短促スルノ狀アリ方藥及ヒ浴法前ノ如シ夕体温三
十八度四分脈百十二搏呼吸六十回ナリ

第五日 朝体温三十七度八分脈百十二搏呼吸六十八回神氣
爽快頻リニ哺乳ヲ欲シ大便一行通ス今朝浴后充分發汗シ且
ツ少シク渴アリ

第六日 神氣愈々爽快トナリ稍々喜色ヲ顯ハシ少シク遊戯
スルノ狀アリ然レモ咳嗽未メ止マス聽診上尙ホ乾濕兩性ノ
囉音ヲ聽ク又胸腹上及ヒ頸部ニ數多ノ汗疹ヲ發ス朝体温三
十八度二分脈百二十八至呼吸五十回ナリ

第七日 諸症益々佳候ヲ呈シ神思爽快食機亢進頻リニ玩具
ヲ弄シ毫モ苦惱ノ狀ナシ然レモ咳嗽未ダ全ク治セサルヲ以
テ更ニ左法ヲ與フ但シ浴法前ノ如シ

遠志浸 (二〇半) 六〇〇号二

阿片丁幾 二滴

單舍利別 一〇〇号二半

右毎二時一茶匕

第八日 体温日一日ヨリ低下シ后二三日ニ全 脈搏呼吸俱
ニ緩徐トナリ胸腹皮上ノ汗疹亦漸ク消散シ肺ノ囉音遂ニ減

退ス尙ホ在院一周間許ニシテ全治退院ス

第二例

蘇久米之助齡一年遺傳病ナシ稟賦孱弱生後三閱月ニシテ感
 胃病ニ罹リ動モスレハ鼻竅梗塞シ且ツ頻リニ乾咳ヲ發シ加
 フルニ該月中旬ニ及ンテ滿身水痘ヲ生セリ此症三四日ヲ經
 テ幸ニ快癒スト雖モ幾モナク更ニ大熱ヲ發シ連綿三周日遂
 ニ亦復常セリ然ルニ解熱后僅カ一兩日ニシテ更ニ鵝口瘡
 ヲ發シ乾咳頻發啼泣間斷ナク夜間ハ殊ニ不安ナリ依テ醫療
 ヲ加フルニ數周日ニシテ幸ニ復全治セリ次后明治十三年五
 月中旬再ヒ全身ニ小疹ヲ發シ其漸ク增多スルヲ以テ漸ク化
 膿シ其攢簇スル部ハ稍ヤ糜爛スルニ至レリ此疹六月下旬ニ
 至リ大抵消滅スト雖モ后確着ノ因ナク身體漸次ニ羸瘦シ呼
 吸喘鳴咳嗽頻發シ毎日黎明ノ頃殊ニ劇シク時アリテハ之カ

爲ニ嘔吐ヲ催ストアリ乃チ九月七日ヲ以テ我院ニ投シテ治
 ヲ乞フ依テ之ヲ診スルニ身體羸瘦榮養不給ノ一嬰兒ニシテ血
 色甚々惡シク呼吸喘鳴シ時々咳嗽ヲ發シ体温三十八度脈搏
 百二十八至呼吸四十四回ナリ但シ胸背ノ打診上著シキ變狀
 ヲ認メスト雖モ殊ニ左右背部ニ於テ饒多ナル乾濕兩性ノ囉
 音ヲ聽ク體重ヲ量ルニ五キログラムアリ

處方

吐根浸(〇・二二三) 六〇〇

老利爾水 一五

單舍利別 一〇〇

每二時一茶匕

第四日 入院后三日間ハ較著ノ變候ヲ見サリシカ此日晚來
 体温上昇ノ三十九度三分ニ達シ脈百五十二搏呼吸五十四回

ニ及ヒ咳嗽頻發呼吸促迫ス依テ規尼〇二三ノ浣腸法ヲ施シ
内服藥ハ前方ニ從フ

第五日 朝來体温三十九度九分脈百五十八搏呼吸六十回ニ
シテ咳嗽益増劇ス因テ再ヒ規尼ノ浣腸法ヲ施スモ体温依然
トソ低下セス是ニ於テ攝氏二十度ノ寒纏法ヲ行フ一時間
後朝夕之ヲ施サントス蓋シ此方ヲ行フノ間ハ咳嗽鎮靜呼吸
緩解顔面ノ「チャノ」セ「減退シテ稍ヤ紅チ潮シ患兒能ク眠リ
ニ就クヲ得タリ日夕該法ヲ施スノ后体温三十九度六分ニ低
下シ脈搏百三十六至呼吸五十回ニ減シ諸症一時輕減スルノ
狀アリ但シ肺部ノ症狀依然タリ

第六日 諸症大抵前日ニ同昨夜安眠ヲ得サリシカトモ今朝
体温三十八度五分脈百〇八搏呼吸四十二回ニ減シ諸症亦少
シク減退セリ依テ寒纏法ヲ休歇ス然ルニ日暮体温三十九度
九分ニ昇リ脈百四十搏呼吸六十回ニ増シ啼泣間斷ナク咳嗽
劇發呼吸短促顔面冷汗ヲ流シ特ニ窒息セントスル下數回ナ
リ依テ直ニ寒纏法ヲ施ス此間氣息靜穩眠ニ就ク一尙ホ前回
ニ於ケル方如シ

第七日 昨夜少シク安眠ヲ得タリ然レモ体温仍ホ低降セス
身体羸瘦愈甚タシク体重二百瓦ヲ減ス脾臟ヲ打診スルニ増
大ノ徵ナク大便亦窒扶斯ノ兆ヲ見ス方藥纏法前ノ如シ

第八日 朝体温四十度脈百五十二搏呼吸六十二回ニレテ諸
症一層増劇ス而シテ夜間ハ殊ニ神思不安ニシテ啼泣止マス患
兒ノ母其苦惱ヲ見ルニ忍ヒス私ニ數回ノ寒纏法ヲ行ヘリ蓋
シ此法ヲ施シキハ患兒毎ニ靜息安眠スルヲ得レハナリ

第十日 朝体温三十九度五分脈百四十四搏呼吸六十八回爾
他ノ諸症ハ仍ホ前日ニ異ナラス依テ寒纏法ノ温度ヲ減ノ十

五度トナス此法ヲ行フノ后体温三十八度七分ニ低下シ脉百二十搏呼吸四十回ニ減シ咳嗽亦輕減ス

第十五日 六日前寒瘧法ノ温度ヲ減セシ以來体温次第ニ低下シ肺ノ病候及ヒ爾他ノ諸症亦以テ輕快ニ赴クノ狀アリシカ今朝体温更ニ昇騰シ四十度四分ニ達シ脉百六十搏呼吸頻數、鼻翅顫動、顔面「チヤノーセ」ヲ呈シ咳嗽劇發咯痰困難爲ニ嘔氣ヲ催シ加之輾轉反側シ滿身冷汗ヲ流シテ苦惱ヲ極メ將ニ窒息セントスルモノ數回ニ及ヘリ而シテ咳嗽ノ休間ニハ啼泣間斷ナク復タ哺乳ヲ欲セス強テ哺セシムレバ忽チ咳嗽ヲ起シテ之ヲ吐逆ス朝八時更ニ寒纏法ノ温度ヲ減シ十度トナシ之ヲ施ス一時間爾后前記ノ劇症頓ニ鎮靜シ安眠ニ就キ呼吸亦緩徐トナリ〔三十二回〕体温殆ント一度ヲ低下ス而シテ時々咳嗽ヲ發スルモ大ニ濕性ヲ帶ヒ咯痰亦容易トナル然ルニ午

後ヨリ体温再ヒ昇リ夜ニ入りテ愈々増加シ四十度七分ニ達ス依テ尙ホ二回ノ纏法ヲ施ス后意外ニ穩眠ヲ得タリ

第十六日 朝体温三十九度九分ナリ未タ低下セサルヲ以テ再ヒ同温度ノ寒纏法ヲ施ス此夜呼吸器ノ症候劇甚ナラス体温亦甚タシキ上昇ナキヲ以テ該法ヲ休止ス然レモ衰弱益加ハリ羸瘦骨立体重復タ二百瓦ヲ減ス

第二十日 第十七十八及ヒ十九ノ三日間ハ体温復々上昇セルヲ以テ尙ホ朝夕二回宛ノ寒纏法ヲ持長セシニ爾來諸症輕快シ已ニ本日ニ至リテハ体温三十八度二分呼吸四十回脉百二十至ニシテ咯痰容易ク咳嗽囉音共ニ著シク減少シ食機モ漸ク振ヒ哺乳シ易ク屢々安眠ニ就キ頗ル靜穩トナル依テ寒纏法ヲ止歇ス而シテ前日來疲勞ノ甚タシキヲ以テ更ニ機那煎ヲ與フ

第二十三日 此日肺ノ症狀殆ント退キ頻リニ哺乳ヲ嗜ミ時々嬉笑シ血色モ稍ヤ佳良トナリ少シク肥胖ノ狀貌ヲ呈シ体重二百瓦ヲ増量ス但シ時々輕微ノ乾咳ヲ發シ体温未々常度ニ至ラス

第二十六日 体温漸ク平常ニ復シ頻リニ匍匐セントス第三十日ニ至リテ咳嗽全ク止ミ諸症盡ク去リ体重亦増加スル三百瓦全量五萬一百瓦入院時ニ比スレハ一百瓦ヲ増加ス尙ホ在院十有餘日十全ノ快復ヲ得テ院ヲ辭ス

○比刺利亞病實驗

醫學ノ針路隨テ密ヲ加フレハ從テ發見多ク從來希有トナセシモノモ忽チ多數ヲ加ルニ至ルハ全ク日ヲ追テ我道ノ精キヲ致ス結果ナラン頃日有志共立東京病院ニ比刺利亞病患者入院セリ此病從來本邦ニ於テ二三ヲ經驗

セシ者アリト雖モ未々如斯著明ナルモノアルヲ聞カス依テ其大略ヲ記シテ以テ同臭諸君ニ頒ント欲ス

千葉吾一

學生

有志共立東京病院患者

岩崎昌雄

二十年一ヶ月

(宗族履歷) 父ハ齡五十一ノ秋腦溢血ニ罹リテ没シ母ハ子宮病ニ因リ終ニ四十八歳ヲ以テ死ス同胞五人アレモ皆ナ健全ナリ

(既往症) 天資強壯ニシテ曾テ著シキ疾患ニ罹リシコトナシ只齡十四ノ春熱性病ヲ患ヒ就幕二閱月ニシテ全ク癒遂ニ健康ニ復スルヲ故ノ如シ又々平素性酒ヲ嗜ムト云フ

(現症) 明治十四年四月某日長途ニ歩シ大ニ疲勞シテ歸ル

然ルニ夜ニ入り卒然發熱シ遂ニ連日退カス二三日ヲ經テ右
 睪丸腫起シテ殆ント常ニ倍シ下腹即チ膀胱部ヨリ延テ外上
 部ニ緊痛ヲ發シ尿利僅少ニシテ甚々濃厚且ツ多量ノ血液ヲ
 混ス然レモ三四日ノ后諸症大ニ輕減シ遂ニ月餘ニシテ治マ
 取テ變化ヲ貽サマリシカ明治十六年八月上旬著シキ原因ナ
 クシテ身体倦怠頭痛口渴及ヒ輕度ノ惡寒ヲ發シ次テ發熱ス
 加フルニ膀胱部ノ緊痛右睪丸ノ腫大尿利減少シテ血色ヲ爲
 ス等悉ク明治十四年四月ニ發シタル病症ヲ再發セルモノ、
 如シ某醫ノ藥汁ヲ服シ一週日ヲ閱シテ諸症大ニ快癒ス時ニ
 一夕酒席ニ列シ醉后頻ニ尿意ヲ催シ尿ヲ利スル時膀胱及ヒ
 尿道ニ疼痛ヲ來シ夫レヨリ睪丸ノ腫大体温ノ上昇血尿等復
 タ大ニ加ハリ醫治ヲ尽セシモ奏効ナク荏苒一月ヲ經依テ同
 年九月十日ヲ以テ遂ニ有志共立東京病院ニ入院ス當日之ヲ

診スルニ癰幹尋常ナルモ著シク貧血羸瘦シテ貌顔慘憺タリ
 今其診候ヲ略述センニ先ツ消化器系統ニハ舌面乳嘴充血シ
 テ粒狀ヲナシ食味稍ヤ變常ナルモ食慾變セズ口唇乾燥シテ
 渴アリ胃腑及腸肝脾等ノ諸器異常ナシ但シ大便ハ秘結シテ
 大約五六日ヲ隔テ硬屎一行ヲ排スト云フ呼吸血行ノ二系統
 ニハ病徵ヲ存セス只脈搏稍々微弱ナルノミ神經系統ニハ神
 思不穩ニシテ動々モスレハ眩暈ヲ發ス筋肉及皮膚系ニハ筋
 肉柔軟ニシテ甚々シク羸瘦シ皮膚ハ帶青土色枯燥シテ皺襞
 多シ次テ生活泌尿ノ兩系統ヲ檢スルニ右副睪丸同精系累々
 腫起ノ平素ノ二倍ニ過キ按察スレハ疼痛ス腎臟部ヲ按スル
 位置形狀及ヒ容積等ニ異常ヲ認メサレモ右腎ハ按壓ニヨリ
 微痛ヲ訴フ膀胱部ハ絶ヘス疼痛シテ尿意頻數シ尿利或ハ半
 ニ断ヘ或ハ復々續キ或ハ淋瀝シテ常ニ快通セス且ツ毎回排

尿ニ先ツテ必ス多少血液ヲ排出シ「カテーテル」ヲ把リ尿道ヲ
 檢スルニ攝護腺部ニ至リテ稍々狹隘ナルヲ知ルノ他異常ナ
 ヲ直腸ヨリ指ヲ以テ之ヲ探クルニ攝護腺部著シキ腫起シ壓
 スレハ疼痛ヲ訴フ復タ尿ヲ檢スルニ其量(一晝夜)大約二十五
 ㊦其色赤酒ノ如クニシ曇濁甚シク且ツ血塊ヲ沈澱ス反應ハ
 亞兒加里ニシ異重千〇二十少量ノ蛋白ヲ含ム其日体温三十
 八度二分

(醫說) 數說紛々一定セス或ハ腎炎トナシ或ハ膀胱ノ疾病
 ト云ヒ或ハ尿道ノ疾病ト稱ヘ各自理論ニ推シ實地ニ照シ喋
 ヲ説明シタリシモ未タ尽セリトセス然レ該患者ノ血液ノ源
 ハ必ス尿道攝護部ニアルヤ疑フ可ラス何トナレハ尿利ニ先
 ツ排血スト檢査上攝護腺腫大著明ナレハ也但腎臟及膀胱モ
 固ヨリ無恙ナルニハ非ザルナリ又副睪丸精系ノ腫大ト攝護

腺部腫張ノ摸樣トヲ熟察スルハ該部ニ局發スル結核ト大ニ
 其狀態ヲ同フス然レ遂ニ定説ヲ附セス暫ク收斂強壯ノ藥劑
 滋養ノ食餌ヲ與テ對症療法ヲナシ他日院長ノ明断ヲ俟テリ
 智有所不明神有所不通ト凡ソ非常ノ醫事ニ遇フハ識者ト
 雖モ容易ニ之ヲ辨スルヲ能ハサルモノ歟高木院長診スルモ
 未タ果シテ何病ナル證認セスノ對症療法ヲ施シ以テ數日ヲ
 經過セリ然ルニ三週日ノ后前諸症ニ兼ヌルニ兩鼠蹊部ニ雞
 卵大ノ一腫瘤ヲ發シ壓スルモ疼痛ナク著シク波動ヲ呈シ起
 立セシムレハ殊ニ著シク仰臥セシメ壓迫ヲ加フレハ忽チ去
 テ痕ヲ見ス又尿ヲ檢スルニ尿數一日七八行毎回大凡二㊦ニ
 過キス且ツ凝塊物アリテ尿道ヲ阻塞シ爲メニ尿快通セズ而
 ノ凝塊物ハ尿全量八分ノ一ヲ占ムルヲ檢スルニ赤色ニシテ
 軟肉片ノ看ヲ爲シ洗淨スレハ赤色脫シテ帶黃白色トナリテ

内ニ粘液ノ凝固セルカ如キモノト粘膜ノ剝離片トヲ混シ此
 凝塊物ヲ去リ殘餘ノ尿液ヲ檢スルニ臭氣ナク異量千〇二十
 反應中性ニシテ之ヲ放置スレハ上下二層ニ分レ其上層ハ全量
 十分ノ二ヲ占メ白色濃厚混濁ニシテ恰モ乳汁ノ如シ下層ハ十
 分ノ八ニシテ多量ノ血液ヲ含ム其色紅桃花色ナリ而シテ其上層
 乳汁様ノ部ヲ取り硝酸ヲ滴加シ檢スルニ多量ノ蛋白質アリ
 テ忽チ凝固シ其凝固セサル部ハ乳糜狀ノモノ粒々トシテ混濁
 物中ニ存ス數時ヲ經過スレハ上下層自然混合シ全ク一様ノ
 乳汁狀トナリ少ク汚灰褐色ヲ帶ヒ器底ニ少許ノ血球沈澱ス
 古人言ヘルアリ事ハ專ニ成リテ雜ニ敗ル神ヲ一ニ專ニシテ
 精ヲ加フルトハ則チ眞理凝マルト宜哉高木院長再三意ヲ注
 テ之ヲ細診シ且ツ説テ曰ク全身ノ衰弱血尿尿丸ノ腫大尿ノ
 異狀等數多シ症候ヲ有スレハ逐一之レヲ參考スルニ腎臟膀

胱尿道尿丸等ノ疾病ニ相當ルノ確徵ナシ又鼠蹊部ノ貯液ハ
 大ニ腰椎骨瘍ニ來ル筋間膿腫ニ類スレハ曾テ腰痛等ナク現
 ニ腰椎ニ異常アルヲ認メサレハ亦以テ然ラサルヲ知ル恐ラ
 クハ此モノ「ヒヤリヤ」病ナルヘシト然レハ聞ク人未タ疑團ヲ
 免レサリシニ一夜之ヲ成醫會ニ齎シ來テ指端ヲ刺シ一滴ノ
 血液ヲ洩シ顯微鏡下ニ檢スルニ果シテ數多ノ「ヒトリヤ」虫ヲ發
 見セリ所謂盤根錯節ニ入テ始テ利器ノ利器タルヲナセルハ
 即チ此ノ診斷ノ云哉

○水腫經驗ノ説

高木 正純

夫レ水腫ハ原發ノ病ニアラス必ス他ノ疾患ノ繼發症ト爲テ
 來ル者ニシテ其原ハ心臟、肺、肝、腎ノ諸病門脈ノ閉塞、腹膜及ヒ
 腸間膜ノ諸病其他血液稀薄等ヨリ發スル固ヨリ余カ贅言ヲ

要セサル所ナリ故ニ其治法モ亦々各其原因ニ從テ一様ナラ
 サルハ自ラ論ヲ候々サルナリ然レモ其原因療法ヲ施シテ奏
 効ナキ者或ハ其原因ノ驅除スヘカラサル者ニ至テハ之レニ
 利尿劑ヲ用ヒサルヲ得ス其原因ノ心腎所患ニ係ル者ニ就テ
 妄リニ利尿劑ヲ投スルハ古人ノ曾テ戒ム所ナリ又利尿劑ハ
 一時其効ヲ奏スルモ決シテ其病ヲ根治スルニ至ラス加之ナ
 ラス腹水ノ如キハ常ニ以テ利尿劑ノ効ヲ達スルヲ鮮ナキ所
 ナリ余是ニ於テ焦心構意スルヲ久シク以テ一方ヲ創造セリ
 其方ハ即チ酒石英ト舍利鹽ノ合劑之レナリ此法ハ既ニ五年
 來我大阪病院ニ於テ經驗セル所ニ之ヲ諸多ノ水腫患者ニ
 試用スルニ多ク其効ヲ收メ殊ニ腹水ニ於テハ十中ノ七八ハ
 必ス其効ヲ収メ假令十全ノ治癒ニ至ラサルモ一時ノ輕快ヲ
 得サル者幾ント希レナリ曾テ教師「エルメレスン」氏ノ再ヒ我

院ニ聘セラル、ノ時余之ヲ語ルニ氏モ亦々大ニ之ヲ贊賞シ
 テ措カス凡ソ水腫患者ノ來院スル毎ニ之ヲ試用セサルヲナ
 ク亦々我院ニ勤務セル醫員モ一般ニ之ヲ親驗シ益其効績ノ
 較著ナルヲ識ル此ニ於テ方今我院ニ於テハ頗フル水腫ノ特
 効方ト爲スニ至レリ蓋シ此方ノ奏効最モ著シキハ腹水ニシ
 テ就中肝臟ノ所患及ヒ門脈ノ閉塞ニ起因スル者ニ於テ然リ
 トス次テ急性靨麗篤病ニ與ヘテ効アリ但シ慢性症ニ在テハ
 未々其能ク全効ヲ収ムル者ヲ驗セス其他心臟ノ所患ニ起因
 セル全身水腫ニ腹水ヲ兼テサルモノニハ其効前症ニ於ケル
 カ如ク彰著ナルヲ得スト雖モ一時ノ輕快ヲ得セシムルヲ亦
 タ屢之レアリ又胸膜炎ノ水様滲出物胸水、心嚢水腫ニモ間、効
 ヲ奏セリ但シ卵巢水腫、肝胞蟲ノ如キ嚢狀水腫ニハ其効著シ
 カラサルヲ驗セリ

余カ尋常用ニル所ノ法ハ最初酒石英八〇^二ヲ取リ熱湯二〇〇^六ヲ注キ暫時間文火ニ上セテ溶解セシメ更ニ瀉利搥一五〇^半ヲ加ヘ濾過シテ一日三四回ニ分服セシメ氷瀉三四行ヲ得ルヲ度ト爲ス其効若シ十分ナラサルハ次目前量ノ二倍ヲ取テ前法ノ如ク用ヒ或ハ間三倍乃至四倍ヲ要スル^一アリ即チ酒石英三〇〇^一ヲ瀉利搥六〇〇^二ニ至ル但シ之ヲ約スルニ酒石英一五〇^半ヲ瀉利搥^一ニシテ數日或ハ數週間持長スルハ最モ適好ナルニ似タリ而シテ余カ實驗ヲ以テスレハ此方ヲ試用スル^一大抵三四日ニシテ其當否ヲトスルニ足ル既ニ即チ其効アル者ハ投劑後毎日多量ノ水樣液ヲ瀉瀉スル^一三行乃至五六行ニシテ兼テ小便ノ通利隨テ増加シ患者上固毎ニ輕快ヲ覺ヘ殊ニ腹中寬裕シテ呼吸緩縱シ腹滿漸ク減少シテ終ニ全ク消散シ四肢ノ浮腫モ隨テ速ニ去リ食機漸ク奮ヒ患

者衰弱ヲ覺ユル^一ナク如斯キノモノハ爾後上固ノ度ニ從テ其量ヲ斟酌シ毎日或ハ隔日ニ連用シテ全快ヲ得ルニ至ル然レ^一他之ヲ用ユル^一既ニ三四日ニ數回ノ便通ヲ促スモ水瀉多量ナル^一ナク裡急後重ヲ發シ滑便少許ヲ利シ患者輕快ヲ覺ヘス反テ虛憊ヲ訴フルカ如キハ余ハ以テ其后服ヲ止ムルノ微トシ強テ連用スル^一ヲ好マス蓋シ此方ハ西醫ノ藤黃巴豆油格魯董篤等ニ禁戒ヲ説クカ如ク恐ルヘキ者ニアラサルカ如シ

此藥ノ効用ニ至テハ余輩ノ淺學ヲ以テ臆定スル所ニアラスト雖モ恐クハ瀉利搥ノ本能ヲ以テ小腸ノ粘膜ヲ刺衝スルニ由テ頻リニ腸液ノ分泌ヲ促シ隨テ血管系ノ流利ヲ進メ吸收排泄ノ機能自ラ増盛セル^一猶ホ虎列刺病ニ於テ全身ノ水液盡ク腸内ニ溢流セルカ如キ一般ナル乎又其利尿ノ増盛セル

ハ一ハ酒石英ノ泌尿器ヲ刺衝セルニ係リ一ハ腹内滯留液ノ排泄ニ由テ腎ニ循レル血管ノ壓迫輕減シテ泌尿ノ機復良セルト尙ホ穿腹術ヲ行フノ後暫時利尿ノ増加セル者ト同一理ニ出ツル乎余ハ之ヲ詳カニスルヲ得サル所ナリ

○特異貧血病

ドクトル「ベルツ」氏ノ發見說

附 獨逸醫事新誌記事

北里 柴三郎

ドクトル「ベルツ」氏云日本ニ於テハ十二指腸虫屢々劇性貧血病ノ原因トナルヲアリ此ヲ以テ劇性貧血症ニアリテ他ニ其因ノ徵スヘキナキハ該虫常ニ其病原タルヲ思フヘシ夫レ十二指腸虫雄虫ハ一センチメートル雌虫ハ一八センチメートル長徑ノ圓虫ニシテ常ニ十二指腸内ニ寄生スルモノナ

ルヲ以テ此名アリ

之ヲ診斷スルニ患者ノ糞尿ヲ取り顯微鏡上ニテ虫卵ノ有無ヲ檢スヘシ虫卵アルキハ其卵ハ無色ニシテ至薄ノ殼ヲ被ムリ内ニ二個乃至五個ノ全ク分界シタル成形質ヲ含有ス其卵ヲ濕地ニ埋ムルキハ數日ヲ經ルノ后胎生シ殼ヲ破リテ活潑ニ匍匐ス試ニ其糞ヲ犬ニ投與シ數日ノ後之ヲ剖檢スルキハ腸内ニ該虫ノ許多寄生スルヲ見ルヘシ(然レモ犬ノ腸内ニモ固ト該虫寄生スルモノナレハ其虫ハ糞ヲ喰フタル爲ニ發生シタルヤ將タ固有ノ虫ナルヤハ明言スルニ由ナシ)該虫ハ口ニ強齒ヲ備ヘテ十二指腸ノ粘膜ヲ穿テ以テ其血液ヲ吸収シテ生活スルモノナリ此ヲ以テ該虫腸内ニ數多寄生スルキハ其周圍ハ甚シク充血シテ患者貧血ニ陥リ其甚シキモノハ終ニ死ニ至ルヲアリ

治方 該虫卵ハ固ト汚水蔬菜等ニ在ルモノヲ飲食ノ際知ラ
ス識ラス攝取スルヨリ人体ニ襲入スルモノナルトハ疑ナキ
ヲ以テ飲水食蔬ノ際極メテ注意スヘシ該症已ニ發シタルモ
ノニハ驅虫藥トシ綿馬ヲ用ユヘシ其方左ノ如シ

綿馬越幾斯二五半_分トサントニ一_テ〇二三_氏

右作四九朝夕一粒宛

傍ヲ其血液及ヒ糞尿ヲ顯微鏡ニテ檢シ赤血球ノ増加及糞尿
中卵數ノ減少ニ注意シテ其効績ヲ奏スルマテハ該藥ヲ連續
投與スヘシ

獨逸醫事新誌ニ云「ゴツタルド」ノ隧道人夫ニ一種ノ貧血病流
行セリ今其症狀ヲ舉ケレハ左ノ如シ

數多ノ人夫此隧道開鑿ノ業ニ就クノ始メニハ皆ナ強健ナリ
シモ其後業ヲ取ルニ隨テ漸々衰弱ノ蒼白色トナレリ然レ患

者ハ勿論其主治醫スヲ最初ニハ別ニ外因ヲ知ルニ由ナカリ
シニ患者ハ日ヲ追テ消化不良、嘔吐、下痢及ヒ甚シク食慾ヲ減
シ加フルニ貧血症ヲ來タシタルヲ以テ始メテ其原因ヲ探索
スルノ端緒ヲ得タリ即チ其血液ノ眞ニ減少シタルノ証ハ赤
血球ヲ通算スルニ其數著シク減少シ心臓ヲ聽檢スルニ其收
縮時ニ特異ノ雜音アリ心臓ハ肥大シ身体各部ニ多少ノ水腫
ヲ來タセリ最初ハ其眞原因ヲ探リ得サリシカ爲ニ隨テ適實
ノ治方ヲ施シ能ハサリシヲ以テ死亡シタルノ數ハ尠少ナラ
サリシ

其主治醫ハ大ニ刻苦研究ノ途ニ其眞因ノ在ル所ヲ發見スル
ニ至レリ則チ其因ト隧道内ノ空氣不潔、酸素缺亡、不良ノ瓦私
等ニ在ラスノ一種ノ寄生虫アリテ人体ニ襲入シ傳染スルモ
ノナリ而シテ其虫ハ所謂ル十二指腸虫ニシテ口ニ強齒ヲ備ヘ薄

腸ノ上部及ヒ十二指腸内ニ寄生シテ其血液ヲ含蓄スルヲ見ル其死亡シタル患者ヲ剖檢スルニ該虫ハ腸ノ粘膜内ニ深く穿入シテ寄生シ而シテ其部ニハ數多ノ潰瘍ヲ繼發セルヲ見タリ又々患者ノ糞尿ヲ檢スルニ無數ノ該虫卵アリ之レ腸内ニテ產生シタルモノナリ而シテ其卵ハ蟻虫ノ卵ニ類似スレモ蟻虫卵ハ稍々不同ニシテ十二指腸虫卵ハ正ク橢圓形ナリ且ツ蟻虫卵ニハ醋酸ヲ注ケハ其外皮層ハ胞狀ニ腫起スレモ十二指腸虫卵ニ在テハ否ヲ又蟻虫卵ハ已ニ發生スヘキ虫ノ成熟胎虫ヲ有スレモ十二指腸虫卵ハ先ツ發育スル前ニ妊娠期ヲ有スルモノナリ

如此其原因ヲ發見シタルヲ以テ隨テ適應ノ治法ヲ施スヲ得タリ即チ此貧血症ヲ療スルニハ鉄劑等ヲ用ヒスノ多量ノ綿馬越幾斯數日間連用服用セシメテ効ヲ奏セリ而シテ糞尿中

虫卵ヲ見サルニ至ルノ后モ數日間ハ該藥ヲ止メス投與スヘシ

該症ニ最初鉄劑ヲ用ヒタルハ寸功ヲ見サリシニ綿馬越幾斯ヲ服用セシメタル后ニハ著シキ効ヲ奏セリ即チ外觀上善良ニ趣キタルト強壯トナリタルノミナラス血液ヲ檢スルニ日ヲ追テ赤血球ノ増加スルヲ見ルニ至レリ蓋シ該虫ノ人体ニ襲入傳染ノ流行シタル所以ハ飲料水其媒介ヲ爲シタルナラントノ説眞ニ近カシ何トナレハ患者ノ嘔吐下利ヲ發シタル頃ハ尙ホ隧道内ニアリテ業ヲ取リシ時ナルヲ以テ隧道内ニ其糞便ヲ排泄シタルカ故ニ其寄生虫卵ハ地中ニ竄入シ人夫ノ常ニ飲料ニ供スル處ノ透明冷涼ニシテ美味ナル水中ニ混入シタルモノヲ知ラズノ飲料ニ供シタルヨリ人体ニ襲入シタルモノアリ且ツ隧道内ハ氣候温和ニシテ地ハ濕氣ヲ帶ヒ多

クノ有機物アルカ故ニ十二指腸虫ノ發育スルニハ至極適應ノ所タルヲ以テナリ

ドクトル「メンゲ」氏ハ獨乙國苗府ニ於テ瓦工貧血症ハ十二指腸虫ニ因スルヲ發見ノ云夫レ十二指腸虫ハ伊多利亞埃及蕪羅滋里等ノ諸國ニハ多ク發生スレト獨乙國ニ於テハ未タ曾テ見サル處ナリ然ルニ余「メンゲ」氏ハ瓦工貧血症患者ノ糞便中ニ該虫卵ノ存在スルヲ發見セリ(蓋シ同氏之ヲ發見セサル前ニハ人皆ナ只瓦工貧血トノヨ稱ヘテ其原因ノ何邊ニアルヤヲ知ラサリシト)而シテ該患者ハ所謂ル瓦工貧血病ノ証候ヲ呈シ皮膚ハ甚々蒼白色トナリ輕微ノ熱ヲ發シ血液ニ赤血球ヲ減シ倦怠心悸亢盛上腹部ニ壓攣性ノ疼痛アリ下痢シテ劇シキ飢餓ヲ訴フ因テ同氏ハ多量ノ綿馬越幾斯ヲ投與シテ該虫ヲ全ク驅除シ然後顯微鏡ニテ其血液ヲ檢スルコ赤血球

ハ日チ進テ其數ヲ増加シ隨テ貧血症恢復スルニ至レリ此ヲ以テ彼ノ瓦工貧血病ナルモノハ十二指腸虫ノ爲ニ發スルヲ確証スルニ至レリ(此瓦工貧血病ト風土萎黃病ト「ゴツタル」ト「隧道貧血病」トハ其症候善ク似タリ)同氏ノ此發見アリテヨリ以來瓦工貧血病ハ寄生虫病ノ系統内ニ屬スルヲ詳明ナリシヲ以テ隨テ該病ノ豫防法及ヒ治療法モ明瞭ニ之ヲ施スノ便ヲ得タリ

ドクトル「ペンナト」云一男子アリ齡三十四年隧道開鑿ニ從事スル人夫ニシテ七ヶ月間其業ニ就キタル后大ニ倦怠セシヲ以テ業ヲ止メテ歸宅セシニ續テ下利ヲ初メタルカ故ニ入院治療ヲ請ヘリ其現症ハ甚々疲勞ノ起居スルヲ能ハス診察ノ際屢々窒息セントシ心悸劇シク皮膚ハ帶黃色ニシテ體質ハ甚シキ惡液性ナリ理學的檢査上胸膜内ニ滲出物アリテ肝臟肥

大シ心臟モ亦肥大ノ加ルニ貧血性雜音アリ白血球ハ其數ヲ增加シ大小不同ニシ其大ナル血球中ニハ黑色ノ粒狀物アリ尙爾他血液中心ニ粒狀物ノ集合ヲ見ル大便ハ下痢ノ日ニ大凡一リ一テル余ヲ排泄シ其色ハ帶黃茶褐ニシ黑斑物ヲ混セリ之ヲ顯微鏡ニテ檢スルニ許多ノ「バクテリア」ト無數ノ十二指腸虫卵アリ尿ハ多量ニ排泄シ蛋白質ノ痕痕ヲ見ル体温ハ攝氏三十八度八分乃至三十九度五分ニ昇進セリ之ヲ療スルニ初メ二三日間ハ興奮劑ヲ與ヘ然ル后綿馬越幾斯ヲ服用セシメテ百六十三條ノ十二指腸虫ヲ驅除セリ(該虫多クハ雌虫ナリシ)然レ患者ハ益々危篤ニ陥リ血球素ハ漸々減少シ人事不省トナルノ度増加セリ依テ滋養瀉腸及ヒ纖維素ヲ除脱シタル血液ヲ直腸ニ注入スレト寸功ナシ此ヲ以テ纖維素ヲ除脱シタル人血一八〇〇六号ヲ温メテ腸膜腔内ニ注入セシニ其

手術ハ善良ニ完結セリ爾後嘔吐ヲ續發シ且ツ輕症ノ腹膨脹ヲ來セリ而シテ糞中ニハ血液ヲ混セサレトモ十二指腸虫卵ハ尙ホ依然トシ存セリ手術後第五日ニ至ルマテ血液ニハ變化ヲ來サ、レト体温ハ稍降下セリ然レト全體感覺ハ断ヘテ善良ニ趣カサルヲ以テ小羊ノ頸動脈ヨリ患者ノ臍中靜脈ニ直接輸血法ヲ施セリ

諸々ノ治術其効ナクシ患者終ニ死亡セシヲ以テ之ヲ剖檢スルニ血管栓塞又ハ手術ノ爲メニ發シタル等ノ死因ヲ見ズ腹膜腔内ニハ茶褐色ノ血樣液ヲ大凡三〇〇一号含有セリト雖腹膜ノ内外兩板ニ痙攣ノ徵ナク又腸内ニハ別ニ潰瘍充血等ノ症狀ハナケレト尙ホ四百四十五條ノ十二指腸虫寄生シテ多クハ血液ヲ充含シ總テ薄腸ノ上部ニ遊離セリ而シテ若干ノ虫ハ粘膜炎下層内ニマテ穿入セシヲ見タリ

同氏又云一患者アリ齡十七才ニシテ二ケ年以來日ヲ逐テ漸々衰弱シ殆ント起居シ能ハサルニ至リ足部ニ水腫ヲ發シ屢腹痛アリテ下痢シ不定ノ熱往來ノ血液ハ著シキ貧血ノ症ヲ呈セリ同氏之ニ諸々ノ藥劑ヲ服用セシメシニ總テ無効ニ屬セシヲ以テ其糞尿ヲ檢セシニ无數ノ十二指腸虫卵ヲ發見セリ因テ綿馬越幾斯ヲ投與セシニ三百四條ノ十二指腸虫(該虫多クハ血液ヲ充含セリ)ヲ排泄驅除シテ速カニ快復ヲ來タセリト

○河豚中毒經驗說

明石退藏草

余幼少ヨリ河豚ヲ食セス故ニ未タ其味ヲ知ラス亦其毒性ヲ辨スルヲ能ハス唯經驗ニ由テ其毒ノ奇ナルト恐ルベキトヲ知ル依テ今其說ヲ下條ニ記載ス

(河豚毒ノ奇) 凡ソ毒物ハ其分量リ多寡ニ由テ發性ニ輕重アルヲ常トス河豚ニ於テハ多量ヲ食ノ少シモ中毒症ヲ發セス少量ニ依テモ亦々中毒症ヲ發ノ斃ル、トアリ又々十數人一鍋内ノ河豚ヲ同食スルニ其一人ハ中毒ノ重症ヲ以テ死ニ至ルモ其他ハ少シノ不快ヲモ覺ヘサルヲ常トス奇ト謂フヘシ然レモ之ヲ禽獸ニ試ムレハ必ス死ス(雞猫犬ノ類ハ與フルモ食セス之ヲ食フ者アレハ必ス死スルハ屢々目撃スル所ナリ)此毒他ノ動物ニハ必ス毒シ人ニ在テハ食スルノ多寡ニ關セス時トノ毒スルトアリ(蓋シ萬人中ノ一人ニ過キス是レ河豚ヲ嗜ム者ノ禁スル能ハサルノ一因ナリ)亦奇毒ナラヤ

河豚中毒ノ其種類調理ニ由ルトスル說皆非

河豚毒ノ種類ニ由テ異ナリトスル說ハ余カ識ル所ニ由レハ中國ニ於テハ眞河豚ヲ最毒トシ四國ニ於テハ小河豚ナモヤラフヲ毒ア

リトス然レモ經驗ニ由ルニ何ノ種類ヲ論セス皆毒アリ又々
 河豚毒ハ其肝腸中ニ在テ白肉中ニハ存セストスル者アリ寄
 生虫(俗間蝶ト唱フル河豚ノ肝腸及ヒ白肉中ニ存スル寄生虫)
 ニ由ルトナス者アリ煮法ノ未熟ニ由ルトスル者アリ又河豚
 ハ腐敗シ易キヲ以テ其中毒ハ腐敗河豚ニ由ルトスル者アリ
 又々有毒河豚ハ之ヲ日ニ乾スモ腐敗シテ乾燥スルヲナシ故
 ニ乾河豚ハ無毒ナリトスルモノアリ又々產地ニ由テ無毒ナ
 リトスル者アリ(舊雲州藩ニ於テ其地ノ乾河豚ヲ嘗テ年々幕
 府ニ獻セリ吾友藤山正豊ハ雲州ノ人ナリシカ余ニ雲州産ノ
 乾河豚ヲ贈リシヲアリ是皆其無毒ナルヲ信スルニ由ルナリ)
 以上ノ說皆非ナリ今之ヲ左ニ証明セン
 福島正則嘗テ河豚ヲ嗜ム侍臣之ヲ諫メテ止マス正則謂ラク
 河豚ヲ食テ中毒スル者ハ皆調理精ナラス肝腸皮膚ヲ併セ食

ヒ或ハ煮法ノ未熟ニ由ルノミ罪囚ニ試ミテ以テ其証ヲ取ラ
 ントス當時正則性忌酷罪囚甚々多クノ百余人ニ出ツ悉ク之
 ヲ庭前ニ出シ河豚ヲ食セシム囚徒等固ヨリ之ヲ嗜ムヲ以テ
 好テ食食ス侍臣ハ其中毒ヲ以テ主君ヲ諫ムルノ証ヲ取ラン
 ト肝腸皮膚殘ストナク且ツ務メテ半煮熟ノモノヲ食セシメ
 タリ然ルニ此罪囚中一人ノ毒ニ中ル者ナシ侍臣深ク患トナ
 ス其翌日正則侍臣ニ謂テ曰余曾テ以爲ク河豚ノ毒ハ肝腸皮
 膚ニ在リ或ハ煮法宜シカラサルニ在ル者トセリ然ルニ昨日
 囚徒ノ食セシ河豚ハ肝腸皮膚ニ論ナク頭尾ニ至ル迄テ殘ス
 所ナク且ツ半煮ニノ多量ヲ食ス而今一人ノ中毒セシ者ナシ
 實ニ河豚ノ毒ハ不明ト謂フヘシ然レハ則チ其肉ヲ精撰シ熟
 煮スル者ト雖モ中毒無ヲ保シ難シ余復々河豚ヲ食セスト(武
 將感狀記節略)是レ半煮ノ河豚及ヒ其肝腸皮膚ヲ食シ必シモ

中毒セサルノ一証ナリ

備前和氣郡ニ紅屋某ナル者アリ烹法ニ長シ且ツ河豚ノ調理ニ精ク某ガ調理セル河豚ハ中毒セサルヲ以テ近隣ニ聞ユ一日某使ヲ馳セテ余カ診ヲ乞フ抵リ診スルニ其母ハ劇症ノ中毒症ヲ發シ其妻モ亦中等ノ中毒症ヲ發ス余主人ニ問テ曰ク汝カ調理セシ河豚ハ中毒スルヲナシト聞ク今此ノ如キハ如何主人答テ曰ク小可器家河豚ヲ好ミ尤モ肝腸ヲ嗜ム而シテ老幼ニ論ナク之ヲ常食スルニ嘗テ中毒セシヲナシ本日八月朔ニ當ルヲ以テ他魚ニ代ントス然ルニ高價ニテ止ムヲ得ス小河豚數尾ヲ求メ其肝腸皮ヲ去リ其調理法一々客ニ進ムルモノ、如ク注意シテ舉家七人之ヲ環食セリ然ルニ今二人此中毒症ヲ發ス今日ニシテ始テ調理法ノ其ノ毒ニ關セサルヲ知レリト云フ是レ調理法ニ注意シ單ニ其肉ヲ食フモ

亦タ能ク中毒スルノ一証ナリ

播州赤穂郡一農雲州ヨリ一女ヲ妻リ一夕雲州産乾河豚ヲ炙リ下物トナシ夫妻對酌寢ニ就ク共ニ中毒症ヲ發シ假死ス其翌朝ニ至リ近隣戸ヲ開カザルヲ恠ミ戸ヲ敲ケテ答ヘス遂ニ戸ヲ破リテ之ヲ見レハ夫妻幕中ニ假死ス遽ニ醫ヲ招キ治ヲ施ス而シテ其妻ハ幸ニ蘇生スルヲ得タレト其夫ハ遂ニ死ス(此患者ハ吾友前川順祐ノ治療ニ係ル)是レ雲州産河豚及乾河豚モ共ニ中毒スルヲアルノ一証ナリ

備前日生村ノ一漁夫一日漁舟ヲ泛テ釣ヲ垂ル一河豚ヲ得タリ直ニ之ヲ宰シテ三人環食ス就中一人中毒症ニ由テ斃ル是レ新鮮河豚ト雖モ亦タ毒アルノ一証ナリ

(河豚中毒ノ特異症候) 河豚ヲ食スルノ後直ニ腹痛吐瀉等ヲ發スルハ決シテ中毒症ニ非ス急性胃加答兒症ナリ醫或ハ其

河豚ヲ食セシヲ以テ中毒症トナシ更ニ吐下藥ヲ投スルヲアリ
 リ妄ト謂ツヘシ(多量ヲ食スル者初メテ河豚ヲ食フ者殊ニ食
 フテ疑懼ノ念アルモノ最モ胃加答兒ニ罹リ易シ)眞ノ中毒症
 ハ必ス一種特異ノ症候アリ即チ河豚食後二三時ヲ經テ舌尖
 辛辣輕麻ヲ覺エ次テ唇頰ニ蔓延シ言語ニ妨害アルカ如シ此
 時手ニ物ヲ執ントレ或ハ起立セントスレハ四肢無力ヲ覺フ
 (凡テ河豚毒ニ中ル者ハ少シモ意識ニ異常ヲ覺ヘサルヲ以テ
 食后眠ニ就ケハ其醒覺スルニ方リ始テ運動不遂言語難澁ヲ
 覺ヘ其中毒ナルヲ識ルヲ常トス其重症ハ睡眠中遂ニ死ス
 ルコトアリ)其後運動神経系全ク麻痺シ身体少シモ動搖スル
 ヲ能ハス眼睛運轉スルヲナク口噤シテ少シモ發聲スルヲ能
 ハス脈搏呼吸共ニ漸次遲徐幽微トナリ温度減却シ遂ニ假死
 症ニ陥リ或ハ眞死スルヲアリ此ノ如キ劇症ニ於テモ患者ノ

神識ニハ少シモ患害アルヲナク假死セル者ノ治后ニ至テ其
 病中ノ事ヲ問ヘハ詳知辨明シテ漏ストナシ故ニ河豚中毒ノ
 屍体ハ腐敗ノ徵ヲ見サレハ之ヲ埋葬スヘガラス是レ假死眞
 死ノ甚タ辨シ難キヲ以テナリ今其例ヲ左ニ掲載スヘシ
 三十四年前備前岡山中島町ニ於テ十數人ノ博徒河豚ヲ暴食
 シ其三人ハ中毒症ヲ發シ遂ニ二人ノ死者アリ而シテ其一人ハ
 土人ナルヲ以テ直ニ埋葬シ他ノ一人ハ遠隔セル幕府領ノ民
 ナルヲ以テ之ヲ土藏ニ移シ番人ヲ附シ幕吏ノ來テ檢屍スル
 ヲ待チシニ七八日ノ後其死者蘇生シ遂ニ全治ス其後假死中
 ノ事ヲ問フニ細大遺ス所ナク一人埋葬セラル、ヲ聞シキハ
 己モ亦タ生ナカラ埋没セラルヘシト覺悟シタリト語ル
 防州山口ノ人嘗テ大坂ニ在テ河豚毒ニ中リ假死ス人皆以テ
 眞死トナシ之ヲ千日(地名)ノ火葬場ニ送り其屍ヲ出セハ其人

始テ蘇生運動スルヲ得タリ遂ニ歩シテ家ニ歸ル其假死中ノ事ヲ記憶スルヲ上文ノ者ノ如シ今現ニ生存シテ山口ニ在リ吾友長尾定明ノ親シク識ル所ノ者ナリ

(河豚毒ノ醫治効用) 河豚ハ多少醫治効用アルヘシト雖モ人ヲ殺スヘキ毒物ナルヲ以テ之ヲ試用スル者少シ其中毒ニ由テ之ヲ觀レハ單ニ運動神經ノミヲ麻痺スルヲ「ウヲ」ニ類似ス然レモ時トシ其効力ヲ顯ハス者ナレハ藥用ニ供シ難シ余カ友人河豚ヲ嗜ム者アリ其說ニ曰ク居常胃弱ニ由テ胃痛ヲ苦シム一回河豚ヲ食スレハ數周間脱然之ヲ患フルヲナク又一賈人貧血瘦削ノ常ニ痲痛ヲ患フ鎮痛ノ爲メニ河豚ヲ食ヘハ其効他藥ニ優ルト謂フ又一醫ハ乾河豚ヲ以テ子宮痙攣ノ妙劑トセリ又俗間說ニ河豚ハ腹中ヲ温補シ女子ヲノ懷孕シ安カラシムト余カ識ル所ノ染匠ノ婦四十才ニ至ル迄曾テ

受孕スルヲナシ以テ此俗間說ニ惑ヒ河豚ヲ食シ遂ニ其中毒症ニ由テ死ス又々河豚ノ癩病ヲ治スルハ世人往々之ヲ唱フル者アリ已ニ紀人讚人ノ兩人ハ其實驗說ヲ東京醫事新誌ニ掲ケタリ余モ亦々此類二人ヲ識ル即チ備前岡山ノ士族某癩病ニ罹リ其醜態ヲ耻チ河豚ヲ食シテ死ニ就カント試ミシニ夥シク吐血シ爾后漸次治ニ就ク又讚岐丸龜ノ貧民癩ニ由テ力食スル能ハス近隣之ヲ憐テ食ヲ與フ其後醜容増進人復々近カス饑餓ノ餘リ匍匐シ魚市ニ出テ河豚ノ道ニ棄タルヲ食シ亦々吐血症ヲ發シテ後治ニ就キ今尙生存スト云フ蓋シ健康人ハ河豚ヲ食シテ吐血スルモノアルヲ聞カス獨リ癩病患者ノミ之ヲ食ヘハ必ス吐血シ治ニ就クハ怪シムヘキノ至リナラスヤ實ニ奇毒能ク奇効ヲ奏スト云フヘシ

(河豚中毒救療法) 河豚ヲ食シテ中毒症ヲ發スルハ食后二三

時間ヲ經過スルノ後始テ之ヲ發スル者ナルヲ以テ吐下法或ハ胃唧筒ヲ用ユル等ノ說ハ皆理學上ヨリ出タル者ニシテ實驗說ニ非ス且ツ民間藥ニモ草葉ノ新絞汁、糞汁等ヲ以テ吐セシムル方多ケレド皆信スルニ足ラス漢醫書ニ大青、小青、青黛、山查子等ノ魚毒ヲ解スル說アルヲ以テ之ヲ用ユルモノ多シ民間藥ニ染工ノ用ユル藍汁ヲ用ユルモ蓋シ之ニ由ル者ナラン余モ屬々此類ヲ用ヒタレド未タ其功否ヲ決スルヲ能ハス其他各種ノ藥品ヲ稱揚スレド皆信ヲ措キ難シ何トナレハ此患者ノ七八ハ時間ヲ經過スレハ藥セシメテ治スル者ナレハナリ獨リ刺絡ニ由テ多量ノ血ヲ寫スルヲ特功アル者トス重症ニ之ヲ試ルニ施術中已ニ少シノ運動ヲ得ルアリ或ハ言語スルニ至ルアリ是余カ實驗檢ニ徵シ稱揚スル所以ナリ

余カ先師難波抱節翁常ニ人ニ語テ曰ク天下營業多シ然

ルヲ之ニ依ラスノ有罪ノ盜ヲナシ天下女子多シ然ルヲ之ヲ擇ハズノ不義ノ奸夫トナリ天下食物多シ然ルヲ之ヲ置テ有毒ノ河豚ヲ嗜ム是ヲ至愚ノ三對ト謂フ余今經驗說ノ終ニ錄シ河豚ヲ嗜ム者ヲ警ム

○食鹽ノ間歇熱ニ功ヲ奏スル說

高田 熙 譯

ドクトル「ブローグ」氏間歇熱ヲ療スルニ極メテ單簡ナル一法ヲ稱用シ亞米利加及ヒ般瓦利乙羈旅ニ於テ數多ノ功驗ヲ收メタリ其法タル善良ノ食鹽一掬ヲ採リ清淨ナル皿中ニ盛り文火ニ上セテ褐色トナシ恰モ燒咖啡ノ如キヲ度トス之ヲ用ルニ患者若シ強實ナレハ該鹽一食匙ヲ温湯一盞ニ溶解シ一頓ニ全量ヲ服セシム斯ノ如ク三日ヲ過ルノ後熱症再ヒ發現セハ間日ニ於テ早朝空心ノ時ヲ候ヒ復々前劑ヲ投スルニ宜

シ若シ此時ニ際シ煩渴ヲ訴レハ微量ノ水ヲ與フタルモ可ナ
リトス但シ服后四十八時間ハ牛肉汁若クハ雞羹汁ノ外諸他
ノ食物ヲ給與スヘカラス蓋シ此期ニ在テ食規ヲ嚴守シ胃寒
ヲ預防スルハ至重ノ事件タリ同氏此法ヲ用ユル丁巳二十八
年其中功ヲ得サル者ナカリシトゾ

○沃頓ノ麻拉里亞熱ニ効アル記

アンデルリン 米國人

本年十月學士ケムベル氏ハ沃頓ノ間歇熱ニ効アル説ヲ新誌
上ニ記載シ且自家及諸家ノ實驗説ヲ記シテ其効驗規尼涅ニ
劣ラサル丁ヲ保証セリ又同氏ハ懇々諸家ノ普ク之ヲ試用シ
テ其成果ヲ報告セン丁ヲ希望セリ
抑モ沃頓ヲ麻拉里亞熱ニ用フルハ一般醫人ノ知ラサル者ノ
如シ因テ聊カ愛ニ予カ實驗ヲ略述セントス今ヲ去ル丁四年

前ヨリ凡ソ治ヲ予ニ乞フ所ノ麻拉里亞性患者ハ其年齡男女
貴賤貧富ノ別ナク悉皆本品ヲ試用シタリ但シ多クハ施療患
者ニノ南部「ブルークリン」ニ屬スル「ゴウニユス」郡ノ住人ナ
リ蓋シ此地ニ在テハ劇性麻拉里亞甚々多キニアラスト雖モ
本品ヲ試用シ以テ其成果ノ如何ヲ察スルニ足ルヘキ者ナリ
又學士「ホルタイス、グリンナル」氏ハ本品ヲ百四十七症ニ試ミ
シニ其奏効規尼涅ト同一ナル丁ヲ報告セリ
尋常ノ服量ハ沃頓丁幾〇三五乃至一〇十五ヲ水一酒盞ニ和
シ一日三次毎食後ニ與フルナリ予ハ通常小兒ニハ沃頓丁幾
〇三五ヲ適宜ノ單舍利別或ハ虞里斯林ニ和シ與ヘ大人ニハ
清水ニ和シ與ヘ一〇十五ヨリ多量ヲ用ヒシトナシ但シ沃頓
丁幾ハ水ト相混和シ難キヲ以之ニ少許ノ沃頓剝篤亞斯ヲ加
入ス可シ又複方沃頓丁幾ニ含メル沃頓ハ單沃頓丁幾ニ含メ

ル沃頓ノ半量ナルヲ記臆スレハ之ヲ沃頓丁幾ニ代用スル
 モ亦可ナリ施療患者等ノ如キ更ニ藥價ノ廉ナルヲ要スル時
 ハ寧ロ複方沃頓丁幾ヲ與フルヲ可ナリトス但シ複方沃頓丁
 幾ハ頗ル服シ易ク且食後ニ與フルモ會テ規尼溶液ノ如ク胃
 ヲ刺衝スルヲナシ然レモ小兒ハ毎々用藥ノ際之ヲ吐出ノ衣
 服ヲ汚染スルヲアリ故ニ豫メ之ヲ看病人等ニ告知ス可シ予
 此療法ヲ施ス已ニ二百餘症ニテ皆其効績遙ニ想像ノ外
 ニ出タリ蓋シ施療患者ニ在テハ彼ノ病院ニ於ケルカ如ク一
 ヲ其治療ノ成績ヲ録スルヲ能ハヌト雖モ諸家ノ報告ト予ガ
 閱歷トヲ參觀スレハ又以テ本品ノ効驗果シテ空カラサルヲ
 信スルニ足ラン麻拉里亞熱ノ劇症ト雖モ本品ヲ服用スレハ
 必ス全治スル者ナリ然レモ稀レニハ毫モ効ヲ奏セザルヲア
 リ蓋シ破格ノ一症トス又一時用藥ヲ廢セシ者ニ再ヒ之ヲ與

フレハ其全治期シテ疾ツ可キナリ
 沃頓ハ規尼涅硝酸ヨリカリプチユス、グロピユルスノ如キ本
 病ニ有効ナル試藥中防腐ノ効ヲ具フルト最モ多シ是レ則本
 品ノ奏効ノ屬スル所ナラン
 沃頓ヲ本病ニ採用スルハ必シモ新奇ノ事ニアラス十數年前
 吾米國及歐羅巴ニ於テ曾テ試用セシ所ナレモ惜哉復之ヲ賞
 用スル者ナキニ至リシカ如シ
 以上所説ヲ約言セハ沃頓ハ之ヲ間歇熱ニ用フレハ其奏効規
 尼涅ト相敵スルノミナラス服後惡徵ヲ呈セス淡味殊ニ小兒
 ニ與ヘ易キノ便アリ且其價規尼涅ニ比スレハ廉ナルヲ幾干
 ツヤ是レ予カ大ニ贊稱シ止マサル處ナリ

○吃逆之簡易療法

(醫事新誌)

其法捻紙尖ヲ以テ鼻粘膜ヲ輕々刺戟シテ噴嚏ヲ促スニアリ
 而シテ二三回ノ噴嚏ヲ發スレハ直ニ鎮靜スルヲ得ルモノナ
 リ
 又醫學士「エム、エヌ、レスリー」氏ノ法ニ食用ノ食鹽二十五氏ヲ
 口内ニ投シ一嚥ノ水ヲ以テ嚥下スルニアリ同氏ハ吃逆ノ最
 良法トシテ此法ヲ稱譽セシニ毎回良効ヲ収ムルト云フ又大
 學醫學部教授櫻村清徳氏ハ數年前ヨリ此食鹽療法ヲ試用セ
 ラレシニ常ニ即効ヲ得ルト聞ク

○頑固嘔吐治驗

處方

半夏末 八〇 燒竈土 二〇 水 一五〇〇

右混和シテ大約半時間煎出シテ濾過シ其液ヲ取り二十

分毎ニ一五〇宛内服セシメ嘔吐ノ止ムヲ度トス妊婦ニ於テ
 見ル處ノ頑固ナル交感性嘔吐即チ惡阻ニシテ百般ノ鎮嘔療
 法モ効ナキモノニ於テ實ニ著効アリ其他諸般ノ嘔吐ニ之ヲ
 用ユルニ皆ナ効アリ此ノ半夏ナルモノハ元來アルカリ性ノ
 モノナレハ酸敗性嘔吐ノ如キニモ又著効アリ
 ○又或人ハ惡阻即チ妊娠中ノ嘔吐ニハホーレル砒石水ヲ最
 モ効アリトス

○妊娠中ニ發スル嘔吐ノ療法

「ヴェンソール」ノ醫學士「リニベルスキ」氏ハ越的兒撒瀧法ヲ以
 舞踏病ノ速ニ治ニ就キシトテ數年前ニ報告セシカ爾后他ノ
 醫家モ亦其法ニ倣テ同一ノ治續ヲ收メタリキ同氏ハ方今ニ
 至リテ更ニ妊娠中ニ發スル頑固ノ嘔吐ニモ亦越的兒撒瀧法

ヲ稱用セリ其法上腹部及ヒ脊柱ノ上腹ニ對向スル部ニ之レ
 ナ施スト三密扭篤乃至五密扭篤間若シ能ク耐ヘ得ル患者ナ
 ラハ猶久シキニ及ヒ此ノ如クシテ毎三時ニ反覆シ施ス者ト
 ス最モ頑固ナル症ニ於テ嘔囉叻ト越的兒トヲ交換シ施ス
 有リ而シテ同氏ハ嘔吐ヲ發セシ時ノミナラス稍々惡心ヲ催シ
 嘔吐ノ兆アルヲ見レハ直ニ此法ヲ施スト云ヘリ且ツ「シエシ
 ヤー」ン、ヘウメツツ」モ亦近來妊娠第二個月ニ頑固ナル嘔吐
 ナ發セシ症ニ此療法ヲ施シテ功アリシトヲ報告セリ
 曰ク其患者ハ何等ノ食物ヲ與ヘルモ食スレハ乍チ吐出シテ
 毫モ胃内ニ留ルト無ク諸藥寸驗アララスシテ最後ニ越的兒撒
 澀法ニ及ヘリ即チ「リチヤードソン」氏ノ裝置ヲ用テ每食前五
 密扭篤ニ背部ノ中央及ヒ胃ノ中部ニ撒澀法ヲ施ヒシニ嘔吐
 頓ニ歇ミ此法ヲ止マルノ後既ニ八日ヲ經ルト雖モ再發セサ

リシト

○硫酸規尼涅ノ効驗

宮田盛一譯

ドクトル「モンテペルシ」氏硫酸規尼涅ニ一種奇異ノ性アル
 ナ發明ス夫レ硫酸規尼涅ニ全身強壯ノ効ヲ有スルハ世人ノ
 確知スル處ナリ加之子宮ニ直達ノ感作ヲナシ以テ之ヲ收縮
 セシメ胎兒及ヒ娩隨ヲ外出セシムルノ力ヲ具フ蓋シ此件ニ
 於テ硫酸規尼涅ノ効大ニ麥奴ニ優レルカ如何トナレハ硫
 酸規尼涅ハ麥奴ノ如ク胎兒ヲ害セサレハナリ加之該藥ハ骨
 盤狹窄症子宮口開張セサルモノ及ヒ羊液未ダ漏出セサルモ
 ノニ於テ之ヲ用ルト得其他妊婦ノ子宮出血性子宮弛緩ニ
 基ク處ノ月經閉止及ヒ發熱等ニ卓効アリト

○川肯越幾斯ノ頭痛ニ効アルノ實驗

安藝 東洋

凡ソ頭痛ニハ百種ノ原因アリ乃チ寒冷暴觸ノ爲ニ頭蓋纖維膜ノ疼痛スルヲアリ或ハ痲麻質斯毒ノ頭皮ニ轉移スルニ由リ之ヲ發スルヲアリ或ハ癩毒性骨膜炎ノ爲ニ之ヲ發スルヲアリ或ハ喜私的兒ニ繼發スルヲアリ或ハ齲齒ニ由テ之ヲ將來スルヲアリ其他尙種々ノ原因アレトモ茲ニ贅言スルヲ要セス抑、余從來頭痛ノ患者ニ遭遇スレハ常ニ臭素加里、大麻越幾斯(之レ最モ功績アレトモ亦屢々眩暈ノ患アリ)等ヲ内服セシメ而シテ尙且塗擦劑トシテ格魯羅兒、敝度刺篤、羯布羅丁、幾亞的兒等ヲ用ヒ偏頭痛ニハ咖啡涅ヲ投用スレトモ毎回必シモ功驗ヲ見ス故ニ遺感ノ余リ曾テ川肯ヲ越幾ストナシ偶、之ヲ頭痛

患者ニ試用セシニ梅毒性頭痛ヲ除クノ外多少悉ク功驗ヲ目撃セリ且加ルニ毫モ眩暈ノ虞ナシ吁世上刀圭ニ從事スル者幸ニ之ヲ經驗シテ何的ノ頭痛ニ功績アルヤヲ詳ニ評セントヲ希望スルナリ蓋シ該藥ノ諸頭痛ニ其功ヲ奏スルノ理ハ腦神經ヲシテ麻酔セシムル者ナル乎將々局所ヲ鎮痛スル者ナル乎未タ其藥物作用ノ蘊奧ヲ知ラスト雖モ余ハ之ヲ偶然ノ實驗ニ徵スル所ナリ但シ此(川肯越幾斯)ノ分量ハ四瓦乃至六瓦ヲ四個トナシ午后ヨリ臨臥迄ニ服盡セシム輕症ナレハ一日重症ト雖モ二三日連服スレハ妙功ヲ得ルヲ期シテ待ツ可シ亦奇ナラスヤ

○滑蟲ヲ藥用ニ供スル論

東京大學醫學部附屬病院記聞

「アラツタ、アルエンタリス」ハ皇國ニ所謂ル滑生又蜚蠊負蟻蒼
 螂飛蠟ノ名アリ俗ニ之ヲ「アラツタムシ」ト云フ夏秋ノ間竈ノ邊
 厨篋中ニ甚々多シ長サ一寸余徑六七分翼アリ夜飛全身褐色
 微黒油色ノ如ク兼テ油臭アリ口ニ利齒アリテ器物ヲ嚙損シ
 食物ヲ敗リ大ニ害ヲナス
 露國「ボコロモ」氏始メテ之ヲ俗間ニ用ヒ水腫ヲ治スル良藥
 トナセリ獨乙國「キコ・レル」氏ノ試験ニヨレハ(第一)尿量ヲ
 増加シ(第二)尿中ノ蛋白ヲ減シ(第三)水腫(例ハ腹水)ヲ減シ
 (第四)體量ヲ減シ(第五)汗ノ分泌ヲ増進ス其他稍ヤ大便ヲ利
 スルノ効アリト云フ
 其之ヲ用ユルニハ依的兒若クハ格魯兒保兒母ヲ取リテ此蟲
 ニ注キ乾枯セシメテ之ヲ粉末トナス一種麥奴ニ類セル臭氣
 ヲ帶ブ「キユルレル」氏及ヒ諸哲ノ經驗ニヨルニ水腫病殊ニ心

臟瓣膜病肺氣腫ニ起因スルモノニ偉功アリト云フ又貧血武
 雷篤病等ヨリ水血ヲ致シ次テ發起スル處ノ水腫ニ用ユルモ
 長ナリ就中良績ヲ得シモノハ心囊水腫ナリトス肋膜炎及ヒ
 腹膜炎滲出物アルトキニ之ヲ用ヒテ大ニ効ヲ奏セリ
 此蟲ノ能タル之ヲ他ノ利尿藥ニ比スレハ腎及ヒ消化機能ヲ
 害スルトナシト而シテ其用量ハ通例六センチグラム乃至二デ
 チグラム又ハ四デチグラムトシテ一回ノ量トス然レニ「グラム」
 ノ大量ヲ用ユルモ害ヲ生スルトナシ而シテ粉末煎劑浸劑丸藥
 トナシ用ユルニ宜シ其之ヲ用ヒテ發汗泌別ノ増進スルヤ十
 五分時乃至半時間持長スル者ナリ爾他尿毒症ニ用テ効アリ
 二患者アリ甲ハ麻疹ヨリ腎臟炎ヲ繼發シ乙ハ猩紅熱ヨリ腎
 臟炎ヲ來ス此二症共ニ此藥ヲ用ヒシニ體量尿中ノ蛋白水腫
 自ヲ減シ尿量大ニ增多セリ而シテ九デチグラムヲ用ヒタレハ

一モ害ナカリキ

一婦人アリ齡二十七年分泌后腎炎ヲ患ヘ手足腹脛共ニ水腫ヲ致シ此患者ノ尿ヲ煮沸スルニ蛋白ノ凝塊ヲ生セリ又々之ヲ顯微鏡下ニ照檢セシニ脂化セシ上皮紅白兩血球ヲ混セルヲ見タリ分身后三ヶ月「キューレル」氏六「センチグラム」ヲ一日三回用ヒシニ二ヶ月ニ前諸症皆減退シ只少シキ病后ノ衰弱ヲ貽セルノミ更ニ健康無病ノ人ト異ナルヲナキニ至レリ又右肋膜滲出液ノ症ニ同法ヲ試ミシニ汗尿分泌増進殆ド三週ニシテ全治セリ

千八百七十五年第一月刊行米國醫學日報抄譯

○痢病氷水灌腸治驗

杉田 玄端

醫官「ウエンセル」氏曾テ許多ノ痢病患者ヲ治療セシニ其最良

藥ハ氷水ヲ直腸ヨリ注射スルニ在ルヲ發明セリ其始メテ此療法ヲ施セシハ劇甚ノ痢病ニシテ其症劇熱、大腹痛、劇裏急及ヒ大出血ヲ兼ヌ因リテ其出血ヲ鎮止センカ爲メ二時毎ニ氷水灌腸法ヲ行ヒシニ管ニ其出血ノ止ムノミナラス裏急腹痛發熱モ亦全ク消除シ且ツ爾後モ其苦痛起ラント思フキハ患者切ニ其療法ヲ乞フニ至レリ以テ其効驗アルヲ証スルニ足ルト云此ニ由テ「ウエンセル」氏ハ此法慢症ニ在テハ只一時ノ輕快ヲ與フルノミナレト急症ニ在リテハ他藥ノ之ニ及フモノナシト考定セリ

○實弗的里亞及格魯烏布治法

(醫學雜誌)

博士「クラル」氏ハ嘗テ諸般ノ加答兒其他輕度格魯烏布及實弗底里亞ヲ療スルニ必ス上好ノ無水虞里斯林ヲ取り之ヲ患者ノ

咽喉ニ塗擦シ常ニ良効ヲ得シカ近頃又實弗底里亞及格魯布ノ劇症ヲ療スルニ一半格魯兒鉄丁幾ヲ虞里斯林ニ配伍シ之ヲ内用シテ大ニ妙効ヲ得レリト云フ同氏ノ療法ハ固ヨリ症ニ從テ小異アレモ大率最初ニ滿那若クハ甘汞下劑ヲ投セリ蓋シ甘汞ハ之ヲ適宜ニ用フレハ頗ル消炎ノ効力アル一藥ナリ又布片ヲ冷水若クハ氷水ニ蘸シテ患者ノ頸部及ヒ頭部ヲ冷罨シ且其温度ノ増減ニ意ヲ用ヒテ時々之ヲ交換シ傍ラ此氷水ヲ以テ患者ノ飲料ニ供セントテ要ス此際ニ於テ六〇〇_二無水虞里斯林ニ二十滴ノ一半格魯兒鉄丁幾ヲ加ヘ之ヲ半時毎ニ三十滴宛日夜内服セシム可シ而シテ患者輕快ヲ得ルニ至ラハ直ニ其服量ヲ減シ三時毎ニ一茶ヒヲ取シメ其間ニ於テ虞里斯林六〇〇_二ニ蓬砂一三二_二十ヲ溶和シ之ヲ一茶ヒ宛内用シ以テ咽喉粘膜ノ漏出物ヲ溶解セントテ務ムヘシ蓋

シ前ノ鉄劑ヲ用フルモ速ニ本病ノ緩解ヲ得サルキハ連日之ヲ保續シ與ヘントテ要ス
又博士「クラル」氏ハ夫ノ義膜性格魯烏布ノ患者數名ニ於テ此療法ヲ經驗セシカ其効頗ル多ク殊ニ此蓬砂虞里斯林ハ義膜ヲ溶解スルノ効力著明ナルカ故ニ實弗底里亞炎症漸ク延蔓シテ咽喉粘膜ヨリ後鼻道ノ粘膜ニ波及シ遂ニ亦義膜ヲコトニ發生スルキハ速ニ蓬砂虞里斯林ヲ取リ之ヲ前鼻道ヨリ深ク其内ニ注入スルヲ良トス但シ此藥ハ音夫ノ義膜ヲ溶解スルノ力アルノミナラス兼テ又病的粘膜ヲ整復スルノ効アリ故ニ尋常世醫ノ用フルカ如キ煩雜ナル諸藥劑ヨリモ却テ卓功ヲ立ル者トス蓋シ或ル病理家ノ說ニ據テ實弗底里亞ハ原ト局處ノ病患ニシテ其遂ニ汎發ノ諸症ヲ發スル所以ハ病毒漸ク局處ヨリ血中ニ吸接セラレ而シテ后始メテ之ヲ發スル所

トセハ此蓬砂虞里斯林ハ殊ニ本病ニ於テ偉効アル者ト看做
 サル可ラス何トナレハ此藥ハ原ト消毒防腐ノ効アルヲ以
 テ本病ノ初期ニ於テ之ヲ採用スルニ怠ラサルハ速ニ局處
 ノ組織中ニ竄入セル病毒撲滅シ因テ爾餘ノ病症ヲ抑制シ遂
 ニ全身ノ血毒症ヲ預防スルヲ得ヘケレハナリ
 以上述ルカ如ク格魯兒鉄丁幾蓬砂及虞里斯林ノ三藥ハ之ヲ
 用フルニ甚タ簡便ニシテ且病ノ初期ニ於テ直ニ之ヲ與フル
 事ハ必ス其効ヲ奏スルモノトス又局處ノ病毒ノ初期既ニ血
 中ニ浸入シ遂ニ汎發諸症ヲ發スルニ至ルモ亦此等ノ諸藥ヲ
 採用シテ害ヲ招クナシサレモ病勢既ニ甚ニ至レハ醫家多
 クハ症ニ隨テ少量或ハ大量ノ硫酸規尼涅ヲ内用スルヲ以テ
 常トス又博士「クラル」氏ノ療セシ患者ニハ一モ衝動興奮劑ヲ
 要スル者ナカリシカモ症ニ由テハ患者大ニ衰弱ノ甚危險ナ

ルニアリ是等ノ症ニ於テ素ヨリ適宜ノ衝動興奮ヲ投セサル
 可カラス

○火傷治驗

桑田 衡平

予一日友人ニ伴ハレテ火傷ノ治療ヲ見シテ即チ其患者
 揮發油ヲ扱フ時火ヲ誤テ廣ク手足ヲ燒爛シ偶、友人之ニ際會
 シテ直ニ其燒爛セル部分ニ硝酸銀蒸餾水各等分ノ溶液ヲ塗
 擦セシカ疼痛忽チ去テ薄キ黑痂ヲ結ヒ一二日ヲ經テ其深ク
 燒徹セル部分ニ稍々膿液ヲ生スルニ至リ其部ニ次硝酸毘斯
 密篤ヲ撒布シテ膿液ヲ吸收セシメ隨テ流出スレハ亦隨テ撒
 布シ其餘ハ唯、時々石炭酸水ヲ以テ洗ハシムルノミ斯ノ如ク
 ノ其燒爛スルノ淺キ部分ハ最初ノ消酸銀水ノ爲メニ滿面薄
 キ黑痂ヲ生シテ忽チ乾癒シ其下ニ新皮ヲ結フニ隨ヒ黑痂自

ヲ剝落シ又其膿潰セル部分ハ堅硬ナル厚キ痂ヲ生シテ乾癒
シ其治癒ノ峻速ニシテ且患者ノ爲ニ痛楚ノ少キコト阿列襪
油等ヲ以テ療スルノ比ニ非ス亦毫モ藥物吸入ノ害アルコト
ナシ

○劇性火傷治驗 静岡縣西遠 森 鶴 松

夫レ疥癩ハ癒ヘ難ク瘧疫ノ瘥ヘ易キハ天理ノ然ラシム
ル所更ニ肯テ予輩ノ喃々ヲ談タサルヘシ雖然瘧疫以テ
忽諸ニ附スヘカラス疥癩以テ束手シテ可ナラン耶旃レ
江湖ノ刀圭家競フテ常ニ疥癩ノ治療ヲ學々トシ之ヲ漏
レテ汲々トシテ是求ムル所以ナリ而シテ茲ニ新報新誌ア
ツテ珍聞奇説アル毎ニ掲載シ鼎味交換ノ媒始ヲ爲シテ
我々醫學會會ノ改良進步ヲ謀ルニ臻レリ豈ニ嘉ニスヘ

キ秋ナヲスヤ予輩晨夕這ニ碎心シテ措カスト雖近頃
病客ニ碍妨セラレ江湖諸君ト筆鋒ヲ相交ユルノ幸榮ヲ
ナスニ違アラサリキ今尠シク閑ヲ得タルヲ以テ冀臆寡
聞遼豚ノ譏ヲ不顧勿卒綴ツテ左ニ一治驗ヲ報道セント
欲ス之レ急癒按外ニ出テタルニ據レハナリ

(已往症) 遠州周智郡小川村平民農鈴木某倅齡十有四年天賦
壯健ニソ曾テ病痾ノ何タルヲ知ヲサルモノ、如シ時ニ本年
四月上浣晚餐ヲ喫スルノ砌リ謬テ鉄瓶ヲ頓仆シ足袋ヲ穿チ
シ儘熱湯ヲ足蹴足踏ニ灌漑セリ依テ速ニ足袋ヲ脱セント欲
スルニ狼狽意ノ如クナラス躊躇スル中忽チ罹傷部ハ紅腫熱
痛ノ諸症ヲ來シ煩悶耐エヘカラス直ニ治ヲ近隣ノ醫某ニ乞
ヒ三日ヲ經過セリ然レモ寸効ナキノミナラス病症漸次増進
惡徵ヲ呈シ親族心苦滿跚ノ餘リ俗間療法ヲ行フテ更ニ三日

爲ニ諸徴愈々猖獗ヲ究メ如何トモスヘカラサルヲ以テ予ニ
來テ治ヲ乞フ依テ直チニ入宿セシム

(現症及経過) 顔面憔悴蒼白色ヲ呈シ脈搏八十八至体温三十
九度(攝氏)大便秘結シ小便ハ却テ失禁ス而シテ時々眩暈ヲ起シ
不眠譫語ヲ發シ痛楚ニ耐ヘサルノ况狀アリ患部ヲ驗スルニ
眞表兩皮剝奪(第二度火傷)全面ヨリ厭忌スヘキ惡臭汗ヲ洩ラ
シ殆ト「ウルセラチオン」トヲ呈ス(按スルニ炎ノ消退期不善
ニシテ細胞原過多ナリ終ニ變性ノ壞潰荒蕪スルニ基ツクモ
ノナラン)就中短諸趾屈筋ノ部ニ於テ然リトス且ツ被傷部汚
穢赤藍色ヲ帶ヒ頗ル醜態ヲ呈ス據テ濯水器ニ依リ八拾倍石
炭酸溶液ヲ以テ纏綿ス之レ外氣ノ抵觸竄入ヲ怖テナリ内服
ニハ酒石酸里母奈埜ヲ與ヘ傍ヲ下泄丸ヲ投シ便通ヲ促セリ
又夜間不眠ノ症アルカ故ニ臨臥ニ「コロラールヒドレート」〇、

ハチ給シ患部ノ所置ハ一日ニ回洗滌前方ノ合劑ヲ塗布被包
シ治療スルヲ約五日間爰ニ於テ全身症ハ大ニ緩解スルカ如
シト雖モ傷面ノ局處症尙々依然タリ偶々腦裏ニ一按ノ浮泛
スルヲ以テ處方ヲ轉シテ左ノ處置ヲナス即チ臭素剝篤亞斯
二、〇稀磷酸二五單舍一五、〇水一〇〇、〇チ一日ノ量トシ六回
ニ分服セシメ傷部ハ百倍ノ石炭酸水ヲ以テ朝夕二回洗滌シ
后駝毛ヲ以テ傷面ニ沃度坊ヲ撒布シ其外部ヲ稀薄重炭酸那
篤倫水ニセル布巾ヲ覆ヒ更ニ綁帶ニテ纏絡ス然ルニ纒カ四
回ニ蘸ノ洩膿頓ニ減少シ從テ傷面佳候ヲ呈シ全良ノ肉芽ヲ
萌生シ痛楚拭フカ如ク傷部日一日ヨリ癒ヘ約六日間ニシテ
傷面悉ク瘢痕組織ニ變シ患者蘇生ノ憶ヲナシ欣喜手ノ舞足
ノ踏ム所ヲ知ラスシテ販桑セリ矣

(愚按) 呵々恐ルヘシ戒ム可シ一朝謬テ火傷ヲ被ムリ爲ニ數

日ノ苦悶ヲ生ス否ナ苦悶ノミナラス終ニハ組織荒蕪セラレ
 脱疽ニ陥リ爲メニ手足ヲ截斷シ或ハ部位ニ依リ泉下ニ皈ス
 ルモノ往々實見スル所ナリ該患者ノ如キモ尙ホ數日俗贅瘻
 法ニ惑溺シナハ果シテ鋸斷術ヲ施サ、ルヘカヲサル場合ニ
 臻ルモ亦々測リ知ルヘカラス
 夫レ然リ然リト雖モ其中主効ヲ奏シタルハ彼ノ沃度叻ノ實
 跡タル予ハ信シテ疑ヲ容レサルナリ何トナレハ前方ヲ五
 日間持長スルモ傷症依然タルニ該藥ヲ塗布スル以來頓ニ佳
 候ヲ呈シ加之元來沃度叻ハ數多ノ潰瘍若クハ癰腫等ニ外用
 藥トシテ實用シ大ニ効驗アレハナリ而シテ某藥ノ醫治作用
 ニ至テハ未々詳説アルトナシト雖モ蓋シ劑中ノ沃陳母皮下
 脂肪ノ爲ニ漸次離分シ局處麻醉ノ作用ヲ起シ毫毛刺戟スル
 トナク奏効スルモノナラン是レ疼痛アル部ニ塗布スレハ條

チ緩解スルヲ以テ徵スヘシ然リト雖モ予ヤ天資蠢蠢知識管
 見ノ域ヲ脱セサルモノナレハ只管額官諸君ノ鴻說ヲ窺ハン
 ト欲スルノミ額官諸君ヨ幸ニ夫レ旃レヲ諒セヨ焉

明治
醫家 病床實驗集

婦人科部

○卵巢囊腫施術治驗

野村 虎長 筆記

(既往症) 木匠伊藤龜三郎妻マキ年紀三十六東京ノ産ニソ本
府深川區御船藏前町廿番地ニ居住ス稟賦強實生來飲酒ヲ嗜
マス幼ニソ痘瘡及麻疹ニ罹ルモ亦嘗テ梅毒ヲ患ヒシコナク
其他顯著ノ疾病ナシ十七歳月事始テ潮シ正順ニソ更ニ其期
ヲ過ラス二十一歳ニソ婚嫁セシカ事故アリ一年ヲ出スノ離
別シ廿七歳再嫁シ翌年一兒子ヲ舉ク兒ハ僅々四十日ニソ長
逝セシカ幸ニソ産後ノ病患ナシ三十歳第二兒ヲ舉ク此兒亦
百餘日ニソ斃ル翌年第三兒ヲ舉ク當時産褥熱ヲ發シ經過大

約二旬餘ニ幸ニ全治セリ其後ハ輕微ナル頭痛ヲ發スルヲ常習ナリシト云フ

本症ハ距今四年前偶々一小塊物ヲ左腸骨涅ニ生シ最初ハ楕圓形ニシテ其大サ鰐卵ノ如ク自痛ナク又壓痛ナシ手ヲ以テ之ニ觸ルレハ硬固ニシテ抗抵強實ナルモ月經其常ヲ失セヌ又全身異常ナキヲ以テ患婦自ラ妊孕ニ非ラサルヲ知レリ然リ而シテ漸ク月日ヲ經ルニ從ヒ該塊益發育シ肚腹膨滿甚ク身體苦悶ヲ覺ヘ動作自在ヲ得ス因テ橋本綱常君ヲ始トシ其他諸家ニ就テ診ヲ請フ皆曰是レ卵巢囊腫ナリト昨十六年十月一醫之ニ穿腹術ヲ施シ蓄液ヲ排除スルヲ殆ト六百六十六浮ナリシカ爾後僅々一個月ニシテ肚腹膨滿故ニ復シ身體ノ疲憊ヲ覺フルト愈々切ナリ時ニ同年七月或ル新聞紙ノ報スル處ニ由リ始テ卵巢囊腫ヲ治療スルノ醫術アルヲ知り患婦以爲

ラク今也將ニ身ヲ病鬼ノ犠牲ニ供セントセシカーノ國手アリ以テ我膏盲ノ二豎ヲ攘ハントス何ノ幸カ之ニ過キント遂ニ路程ノ遠キヲ忘レ辛シテ身ヲ起シ來テ診テ我師高木先生ニ請フニ至レリ實ニ明治十七年九月十九日ノ事ナリ

(現徵) 体格中等ナルモ全身榮養大ニ衰頽シ面貌慘憺トシ高度ノ貧血ヲ呈シ結膜及口唇ノ紅色殆ト消褪シ羸瘦骨立ノ皮膚枯燥セリ胸廓ヲ望ムニ造構異常ナク只脫肉ノ肋間著明ナルノミ脈搏一百八至心尖常位ヲ占ルモ心悸稍々亢進シ呼吸短促ノ時々乾咳アレト聽診ニ於テ肺ニ理學的ノ變常ナシ腹部ヲ望ムニ膨滿其度ヲ極メ腹壁緊張ノ靜脈ヲ皮下ニ透見シ指ヲ以テ壓スレハ一大凝塊ヲ白線ノ右上側ニ觸知ス之ヲ按壓スルモ疼痛ナク只彈力ヲ有シ抗抵スルノミ而シテ臍ハ仰臥ノ位置ニ於テ最高位ヲ占ム之ヲ測ルニ腹圍百十仙迷臍部ヨ

リ劔狀軟骨ニ至ル廿八仙迷臍部ヨリ耻骨縫際ニ至ルモ亦廿八仙迷腸骨前上棘狀突起ヨリ臍部ニ至ル左右各廿九仙迷然
 其下肢ニ浮腫ナク消化器ニ於テハ舌面平候口味食欲及兩便
 共ニ其常ヲ變セハ經血ハ客年春ヨリ不正トナリ且始終血液
 滴涓ノ過ムトナシ又尿ハ常色ナルモ強酸性反應ヲ呈シ大約
 十分八ノ蛋白ト多量ノ尿酸鹽ヲ含有セリ此日午前第十一時
 我師以上ノ病歴ヲ一讀シ患婦ヲ一室ニ誘引シ仔細ニ内外診
 法ヲ行ヒ而シテ後患婦ニ告テ曰ク是卵巢囊腫ノ一症ナリ今也
 病機既ニ成熟セリ速ニ之ヲ切除セサレハ必ス非命ノ死ヲ免
 レス縱ヒ手術ノ危險ナルモ座ノ死ヲ埃ハ豈愚ナラヌヤ汝宜
 ク熟慮セヨト患婦答曰死生命アリ妾不幸ニシテ一生ヲ倖僥
 セサルモ何ソ國手ヲ怨ンヤト切ニ施術ヲ企望シ措サリキ
 明治十七年十月廿一日ヲトシ我師將ニ手術ヲ施サントス此

日秋晴爽快寒暖中和ノ佳候ナリシカ午前十時該術ヲ始メ
 同第十一時廿分ノ了セリ今其切除セル囊腫ハ秤量六十巧
 半囊壁ノ厚サ大約一仙迷囊ノ周圍八十一仙迷共直徑三十四
 仙迷横徑廿五仙迷ナリ以テ其偉大ナルヲ察スヘシ
 外面ハ蒼白色ニシテ彼此色素ヲ沈着セリ

前面ニハ癒着帶斷裂ノ痕跡著ク且其上部灰白圓形トナレリ
 直徑十但シ癒着帶斷裂ノ痕跡ナク只其上后部ニ僅々之アル
 ヲ見ルノミ

後面ニハ癒着痕跡ナク其下端ニ於テ長サ十四仙迷許ノ創面
 アリ(即チ基礎ノ切斷痕ナリ)内面ハ前壁ニ於テ粗大ナル顆粒狀物ヲ存
 シ且彼此部ニ腐蝕狀ヲ呈セリ又其上端ニ於テ圓形腐蝕面ア
 リ是レ外面ノ上部ニ存スル灰色ノ圓形面ト相對スル處ナリ
 但シ該部ハ囊壁過半吸収セラレ頗ル變薄セルヲ見ル其上後

部ニ於テ同前ノ部アリ 長九仙迷 幅四仙迷 側壁ノ下部ニ周圍二十仙迷ノ凝塊 (數箇ノ細囊集) アリ傑例乙様物之ヲ被フ而シテ該塊五分ノ三ハ被膜剝離シ數箇ノ小囊開口セリ側壁ノ左下部ニ一大塊結アリ (周圍四十三仙迷幅十) 切テ内部ヲ窺フニ悉ク小囊腫ヨリ集成セルヲ見ル又該大塊ノ左右ニ凝塊アリ其左ハ雞卵大其右ハ胡桃大ナリ

囊壁ヲ視ルニ癒着部最厚ク非癒着部最薄シ而シテ試ニ水ヲ囊内ニ充盈シ後之ヲ測ルニ六百六十汚ナリ

(術後ノ處置)

術後ハ患婦ニ一看護婦ヲ付シ其他當直醫一名ヲ除クノ外他人ノ室内ニ入ルヲ嚴禁セリ

患婦ハ術後一時半ヲ經テ漸ク醒覺セシカ嘔氣ナク又腹痛ナシ休温三十七度二分一脈百至呼吸甘回ナリ

「方」 阿芙蓉末 甘草末 適宜

右二丸トナシ頓服セシム

當日午後二時脈搏体温同前尿意アリ導尿管ヲ以テ尿五汚ヲ得タリ口渴アリ舌苔ナシ頻々氷片ヲ喫セシム爾後一醒一睡諸症穩靜ナリ○后四時脈温同前僅微ノ經血ヲ漏ス直チニ拭消セシム○后七時脈温同前排尿三汚○后十二時脈温同前腹痛ナク又便意ナシ尿意アリ排尿三汚

術后第二日前七時昨夜能ク眠リ毫モ腹痛ナシ脈百八至体温三十七度五分呼吸甘回舌面苔ナク食思アリ始テ牛乳少量ヲ與フ○前九時脈百八至体温三十七度五分呼吸甘回牛乳ヲ與フ便意ヲ催ス而シテ呼吸喘鳴アリ左方ヲ投ス

「方」 阿芙蓉末 甘草末 適宜

右二丸トナシ頓服セシム

爾後稍々疲勞ノ面相ヲ呈ス左方ヲ與フ

「方」麥重湯 武蘭埴 各二十滴

右一回量毎三時服用セシム

○前十二時前劑ヲ服ノ後喘鳴止ム脈百拾二至体温三拾七度五分呼吸廿回舌面乾燥シ腹鳴アリ○后六時脈搏体温同前排尿三汚○后十二時異變ナシ但シ卅日會布三汚ヲ取レリ又便意ヲ催ス因テ阿芙蓉一匁ヲ與フ

術後第三日前七時今曉三時頃ヨリ惡心ヲ催シ切ニ酒精劑ノ内服ヲ忌ム因テ本方ヲ止ム脈搏体温及呼吸共ニ昨日ト異ナラス排尿四汚○前十二時會布牛乳各三汚ヲ服ス舌面乾燥シ口渴アリ脈搏体温變換ナシ○後六時晝頃ヨリ會布三汚ヲ服ス時々腹痛アリ因テ鹽莫十分匁一ヲ皮下ニ注入シ能ク安眠セリ排尿六汚

「方」稀鹽酸五滴百布失涅 五斯篤列規尼涅 三清水 匁

右每四時服用セシム

○后十二時僅カニ創面ノ刺痛ヲ想フ鹽莫十分匁一ヲ用フ脈搏体温異常ナシ

術後第四月卅日創處ヲ開キ檢スルニ創面ハ既ニ第一癒合ヲ以テ癒着シ一涸瀉ノ化膿ナキヲ認ム脈搏体温異常ナシ

術後第五日体温稍ヤ高ク三十八度六分ニ達セリ脈搏呼吸尙前日ノ如シ其他異狀ナシ因テ左方ヲ處ス

「方」硫規 二 卍 適宜

右一回量三九トナシ毎四時服用セシム

爾後肌熱減シ食機振ヒ精神亦爽快トナリ患婦ハ恰モ蘇生セラルカ如ク感スト云ヘリ

術後第六日創處ヲ開テ淺縫絲ヲ去ル他ニ異狀ナシ

術後第七日精神倍々快活、口味食思佳、脈搏体温前日ノ如シ、此日悉ク深縫糸ヲ去ル

術後第八日諸症日ヲ逐テ佳候ヲ呈スル者ノ如シ、次日始テ牛乳會布ノ外鶏卵ヲ與ヘタリ

術後第九日精神爽快他ニ記スヘキ者ナシ、偶々便意ヲ催ストアレハ阿芙蓉劑ヲ投メ之ヲ抑制シ、総テ症ニ應シ療法ヲ施セリ

術後第十日始メテ横臥セシム

術後第十一日大量ノ太便ヲ通シ精神頗ル爽快タリ、爾來日々佳候ヲ呈シ來リ、因テ座位ヲ許シ又導尿管ノ挿入ヲ止メ、患婦自ラ便器ニ由テ排尿スルヲ得タリ、卅日又室内ノ行歩ヲ許セリ

斯ノ如キ手術ノ良結果ヲ得タリト雖猶患婦靜息ヲ護ラシメ

前方ヲ持長ノ專ラ滋養強壯ノ攝生法ヲ行ヒシカ、今也患婦ハ已ニ回春ノ面相ヲ呈シ恰モ枯草ノ花ヲ開クカ如ク又肉ヲ死骨ニ附スルニ似タリ、爾後僅カニ三旬ヲ經テ全治ヲ僥倖シ欣然病瘳ヲ辭シ去レリ、時ニ明治十七年十一月十三日ナリ

○子宮脱治驗

内藤有香稿

患者 二十四年婦人

(既往病) 生來健康嘗テ大患ニ罹リシナシ、十八歳ノ春天癸初テ到ル爾來每期月經アリト雖其量屢々不正ナリ、然レ疔瘡痛等ヲ記ストナシ、十八歳ニシテ初メテ嫁シ、十九才ニシテ妊娠シ全經過ヲ終ヘ一男子ヲ擧ク、出產ハ平易ニシテ産後モ亦異狀ナク離孀シ、其兒モ健全ニシテ生存スト云フ、十四年二月ニ至リ更ニ妊娠セシカ、六ヶ月ヲ經著因ナクノ流産セリ、然レ疔其後尋

常ノ産褥ヲ終ヘ月經モ再到セリ尤モ該妊娠初期ヨリ起坐ノ際既ニ子宮ノ下墜スルヲ覺フト雖モ敢テ醫治ヲ請ハス只管歩行業事ヲ營メリ然ルニ流産ノ後ハ該病一層増進シテ漸次下墜シ遂ニ外陰部ニ脱出シ手舉大ニ至リ十六年四月頃ヨリ更ニ該脱出部ノ前面ニ潰瘍ヲ生セリ而シテ之ヲ復納スレハ輒ク復位スルト雖モ僅微ノ操作ニ由リ直ニ脱生シ歩行シ或ハ利尿スルト能ハス然レモ之ヲ復位スルハ歩行利尿共ニ妨ケナシ是ヲ以テ平居揮ヲ以テ之ヲ固定シ其脱出ヲ防クト云フ又平素便秘ノ癖アリ而シテ吾清水師ニ治療ヲ請ヒシハ實ニ客年六月ナリキ

(現在症) 體質中等ニシテ軀幹稍短矮脈膊七十次腹部ヲ檢スルニ腹壁弛緩シテ分娩後ノ痕跡ヲ遺シ白線暗色ヲ帶ヒ全腹ヲ壓スルモ更ニ疼痛ヲ訴ヘス陰部ヲ檢スルニ陰口哆開シ腔壁

下部ノ稱ヤ突出スルヲ認ム之ヲ怒貫ヒシムレハ子宮腔部腔壁ト共ニ下墜シ陰門外ニ露ワレ其大サ手舉大ニ過キ之ヲ測ルニ前面十「センチメートル」後面八「センチメートル」アリ内診スルニ腔壁灰赤色ニシテ皺襞ヲ失ヒ平滑ニシテ肥厚セリ子宮腔部ハ前唇著シク肥大ノ前面ニ上皮剝脱部アリ一側ニ裂痕ヲ現ハス之カ爲メニ子宮口モ哆開セリ剝落面ハ腔ノ前壁ニ波及シ橢圓形ニシテ天保錢大ヲナシ尿道口ヨリ消息子ヲ送入スレハ其尖端脱出部ニ向ヒ子宮外口ヨリ之ヲ送入スレハ其深サ十五「センチメートル」ニ達シ其尖端後方ニ向ヘリ肛門ヨリ指ヲ挿入スレハ其深サ十五「センチメートル」ニ達シ其尖端後方ニ向ヘリ肛門ヨリ指ヲ挿入スレハ腸腔壁僅カニ下墜スルヲ認ム後聯合ハ大ニ弛緩シテ僅カニ分娩時ノ痕跡ヲ存ス又々復位ノ雙診ヲ行フハ子宮頸部ノ穹窿上部ハ大ニ延長

シ体部ハ後轉ノ薦骨窩ニ箱入ス
該患婦入院後ハ強壯劑ヲ與ヘテ身体ヲ健康ニシ且ツ入浴ヲ
命シ患部ヲ清潔ニシ且ツ褲ヲ以テ之ヲ固定セリ

(手術式) 該患者ヲ手術臺ニ仰カセシメ臂部ヲ臺縁ニ固定シ
介者ヲノ兩側ヨリ兩脚ヲ維持セシメ五十倍ノ石炭酸水ヲ以
テ患部ヲ洗滌ス(洗滌法ハ大ナル「イルリカト」ヲ高處ニ置
キ護謨管ヲ以テ手術間不斷患部ニ流注セシ
メタ)

術者ハ正面ニ在リ椅子ニ憑リ「カテーテル」ヲ以テ尿ヲ漏ラシ
拔球鉗子ヲ以テ子宮外口下縁ヲ牽引脱出セシメ兩側ヨリ更
ニ拔球鉗子ヲ以テ腔ノ前壁ヲ左右ニ排開セシメ而シテ脱出部
ノ前面ニ楕圓形ノ粘膜炎ヲ剝離スルカ爲ニ豫メ刀尖ニテ其境
界ヲ畫キ后同部ヲ剝離(上端ハ尿道口下ヨリ始マリ子宮口ニ
至リ九「セ」チメ「テル」ノ長サニ達
ス)シテ粘膜炎下ノ結締織ニ至ル(尤モ潰瘍面ハ其)而シテ出血ハ皆

ナ「クルンメル」ニテ止メ后チ創面ノ粘膜炎殘片ヲ掃除シ持針器
ヲ以テ曲計ヲ創面上部ノ右縁ニ貫穿シ再ヒ其針ヲ左縁ノ内
部ヨリ外面ニ貫穿シ逐次上部ヨリ下部ニ向テ縫合ス其縫合
スルヤ一回ハ深ク一回ハ淺クスル「十六回ニ至リテ止ム故
ニ其縫合痕ハ僅カニ直徑ノ一縫線ヲナス但シ縫合糸ハ絹糸
ヲ千倍ノ昇汞水ニ入レ煮タルモノヲ用ヒタリ縫合終リテ后
其脱出部ヲ復位シ「タンボン」ニ沃土保兒母ヲ散布セシモノヲ
挿入ノ安靜ヲ命ス施行時間ハ一時ニシテ此際迷朦藥ヲ用ヒサ
リシ
術后サリチール綿ヲ以テ陰部ヲ被ヒ且ツ兩脚ノ膝部ヲ緊縛
シテ動搖ヲ制シ一日三回カテーテルニテ尿ヲ漏ラシ石炭酸
水ヲ以テ腔内ヲ洗滌ス爾來出血發熱等ノ續發症ナクシ治癒
ニ趣ケリ縫合糸ハ術后二週間ヲ經テ漸次ニ除去シタリ

以上ノ手術ニ依テ子宮上昇ノ前腔壁止位ヲ取ルニ至ルト雖
 后腔壁ハ尙下墜セリ是ヲ以テ更ニ后壁縫合術ヲ施セリ
 手術ノ所置前ニ同シ唯后面ニ於テ三角形ノ粘膜炎ヲ剝離シ其
 尖角ハ子宮腔部ニ始マリ基底ハ后聯合ニ至リ小陰唇ノ一部
 モ亦切除シテ前述ノ如ク上方ヨリ下方ニ向テ縫合スルテ二
 十五回ニ至リテ止ム綿タンホン等ヲ挿入スルテ前ノ如シ
 術後ノ經過前ニ異ナルヲナシ創面癒合ノ後縫糸ヲ去リ怒責
 セシムルモ更ニ下墜スルヲナキテ以テ八月四日欣然院ヲ辭
 シ去レリ是ノ前月即チ七月廿八日ニ月經ヲ來タシ八月三日
 ニ終ル爾來全ク經閉シテ下腹漸々膨滿シ方今ニ至リ下腹ノ
 左側ニ於テ稍々轉動スルノ感アルヲ以テ自ヲ受胎スルヲ
 知レリ十二月十三日之ヲ診スルニ身體ノ營養益々善長ニシ
 更ニ訴フル處ナシ腹部ヲ注視スルニ下部少シク膨滿シ同部

ヲ按壓スレハ柔軟ニシテ下腹部ノ中央ニ方リ僅カニ抗抵アル
 ヲ覺ユレモ胎兒諸部ハ毫モ抵觸スルヲ能ハス同部ヲ打診ス
 レハ全ク濁音ヲ呈シ其境界下部ハ耻骨縫際ニ始マリ上部ハ
 臍窩ニ指横徑下ニ達ス聽診スルニ臍下ト右脇前上棘トノ中
 間ニ於テ微々タル雜音ヲ聽ケモ其他何部ニ於テモ心音ヲ聞
 クヲナシ内診スルニ外陰部濕潤ノ白帶下アリ腔壁ノ下部ハ
 弛緩充血ノ僅カニ陰門外ニ膨出ス双診スルニ子宮腔部ハ依
 然トシ本位ニアリ体部ハ膨大ノ兒頭大ニ至リ且ツ前轉シ底
 部ハ臍窩ニ指指横徑下ニ在リ且ツ子宮口内ニ胎兒ノ部分ヲ
 抵觸セリ腔部ハ軟弱ニシテ僅カニ肥大ス子宮鏡ヲ以テ檢スル
 ニ腔部及ヒ腔壁粘膜炎ハ蒼赤色ヲ呈シ子宮口ハ破裂シテ粘液
 ノ凝着スルヲ見タリ此ニ由リテ之ヲ觀レハ手術后受胎ノ現
 今四ヶ月半ノ妊娠タルヤ明カナリ

○ドクトルベルツ氏子宮頸管加答兒ノ新療法

子宮頸管加答兒ヲ治スルニハ二十倍ノ硝酸銀溶液或ハ三十倍ノ皓礬水ヲ外用スルヲ常トス頃日大學醫學部内科教師ドクトルベルツ氏ハ石炭酸ノ濃溶液即チ十倍ノ者ヲ稱用セリ其用法ハ「ブラウン」氏ノ子宮内唧筒ヲ用ユルカ或ハ子宮消息子ノ先端ニ綿絮ヲ纏ヒ之ヲ石炭酸水ニ蘸シテ子宮頸ニ挿入塗布スルナリ如是スルヲ毎日或ハ隔日反覆ノ數週ニ至ルルハ如何ナル頑固ノ症ト雖モ能ク其功ヲ奏スル者ナリト云フ

○柴田敬齋氏胎兒回轉秘法

林 洞 海

余一日遠州見附驛ニ遊フ驛内ニ一醫アリ柴田敬齋ト云中

年眼ヲ病テ青盲トナル然レモ性敏穎ニシテ記憶ニ強シ内科及ヒ産科ヲ專業トナス其說ニ云子逆姪ヲ變ノ順娠トナスヲ得是レ師傳ニシテ敢テ予カ發明ニアラスト雖モ予多年此術ヲ行フニ十中八九ハ其効得サルナシト夫レ胎兒ノ位置逆ナレハ其出生ニ及ンテ必ス下肢ヨリス之ヲ逆産又倒産或ハ足産ト云偶々醫手ヲ假ラスノ安産スルモノアリト雖モ兒體ハ骨盤ニ掛リ産出之カ爲ニ遲延ノ兒命ヲ誤ルモノ毎ニ多シ故ニ醫ハ必ス其期ヲ失セスノ手術ヲ施シ以テ逆胎ヲ變ノ順胎トナスニアリ抑々胎兒ノ順逆ハ姪娠五六ヶ月ヨリシテ漸ク之ヲ分ツベシ蓋シ兒頭ハ尤モ堅クシテ其狀尖小ナリ下身ハ略柔軟ニシテ其狀圓大ナリ第七ヶ月ニ至レハ四肢ノ狀最モ分明ニシテ鑒別シ易シ是ニ於テ其逆胎ナルヲ知ルベシ

其法先ツ妊婦ヲ仰臥シテ兩脚ヲ伸サシメ醫ハ其左傍ニツキ
 右手ノ指頭ヲ以テ兒頭ノ上腹ニアルモノヲ探リ得テ徐々ニ
 之ヲ右腹ニ輸ル之ヲ左腹ニ輸ルハ必ス禁ス故ニ兒頭或ハ左
 脇下ニアルモ勉メテ右方ニ送ルヘシ醫ノ左手ハ之ヲ妊婦ノ
 臍下ニ接レ輕ク之ヲ抵承シ右手ヲ以テ送ル處ノ兒頭漸ク進
 テ右腸骨ノ邊ニ至レハ其進行甚ダ難シ是ニ至リテハ醫ハ先
 ツ臍下ノ左手ヲ放チ右手ノ指頭ニ力ヲ加ヘテ小腹ニ向テ揉
 ミ入ルノ狀ヲナシ兒頭ヲ微モ上ニ反ラサテ令レハ其位置
 變ノ兒頭ハ忽チ耻骨ノ上際ニ至リテ復々反ラヌ是則チ逆胎
 回轉シテ順胎トナルナリ此術ヲ施スノ期ハ七八月ノ間ニア
 リ己ニ九月ニ至レハ胎兒生長ノ腹内ニ充チ術ヲ行フモ容易
 ニ回轉セス故ニ八月ヲ以テ施術ノ好期トス將ニ此術ヲ施サ
 ントスルモノハ平臥セ令ル前ニ先ツ鎖帶^{ハラオビヒニモシヒモ}輝紐等ノ如キ腹部

ヲ締フ處ノ者ヲ放解放シ以テ術ヲ施スヘシ施術後ハ腹ヲ急ニ
 緊縛スルナク只輕々薄帶ヲ以テ胎兒ヲ保存スルニアルノ
 ミ若シ常ニ緊シク鎖帶スルモノハ放帶ノ后安臥セ令ルナ
 時間許ニシテ而シテ后術ヲ施ス可シ
 此術ヲ發明セシ后之ヲ施ス丁年アリ而シテ之ガ爲ニ一モ損害
 ナク皆能ク順産トナリ婉後母子皆恙ナシ故ニ之ヲ一家ニ秘
 セス世ニ公ニシテ以テ濟世ノ一助トナサントス

洞海云凡ソ事物ノ發明ハ之ヲ偶然ニ得テ而シテ後之ニ就
 テ其理ヲ考ヘ其以テ然ル所ノ者ヲ知ルヲ得テ而シテ后其
 理ヲ擴充シテ其妙處ニ至ルヲ得ル者概チ皆然リ柴田
 氏ノ此術ニ於ケルモ亦然リ而シテ其良法タルハ敬齋自ラ
 信メ疑ハスト雖^ト之ヲ一家ニ秘セスシテ以テ世ニ公ニ
 スル所ノ者ハ蓋シ益其理ヲ擴充シテ以テ其妙處ニ至ラ

ント欲スルニアリ柴田氏ノ見識公廣ナリト謂フヘキ哉

明治病床實驗集

眼科部

○假瞳孔術

須田哲造

「コレモルホーシス」即チ假瞳孔術トハ人工ヲ以テ更ニ瞳孔ヲ造ルノ術ニシテ其効用并ニ施術ノ種類及順序ニ數様アリ即チ左ノ如シ

第一 効用

- (一) 光線ヲノ眼球内ニ射入セシメンガ爲メニ之ヲ施スコトアリ即チ角膜曇翳、瞳孔閉鎖、及ヒ停止性局部内障翳等是レナリ
- (二) 眼球ノ緊張ヲ減却センガ爲メニスルコトアリ即チ緑内障、角膜局部葡萄腫及ヒ虹彩脈絡膜炎等ニ於テス

(三) 焮衝ヲ防カンカ爲メニ虹彩毛様突起炎及ヒ虹彩癒着症等ニ施ス蓋シ甲ニ在テハ交感性眼炎ヲ防キ乙ニ在テハ緑内障及ヒ虹彩炎ノ頻回發動スルヲ禦ク爲ナリ

(四) 虹彩ヨリ異物及ヒ腫瘍ヲ除去センカ爲メニス即チ異物置入、含虫囊腫及血管腫等はレナリ

(五) 水晶体ヲ除去シ易カラシムカ爲メニ内障翳ニ之ヲ施ス已上ノ目的ニ從テ假瞳孔ヲ造ル可キノ部位ト其大小トニ各異ナキ能ハス

第二 施術

(一) 視力ヲ善良ナラシメンカ爲メニ此術ヲ施サント欲セハ可及的角膜或ハ水晶体ノ透明ニシ且ツ中央ニ近キ部ヲ撰ムハ論ヲ俟タズ而シテ若シ角膜ノ中点ニ翳アリテ其四周ノ透明ナルカ或ハ層障翳及ヒ中心性内障翳等ニシテ角膜ノ透明ナ

ルキニハ内下方ニ偏メ之ヲ造ルヲ定則トス是レ視軸ハ角膜ノ中央ヨリ稍ヤ内下方ニ位スル所以ナリ然レ若シ内側ニ翳アルキハ下方ニ於テシ内側下方共ニ翳アルキハ外側ニ於テシ尙ホ外側ニ翳アルキハ上方ニ施スヘシ但シ上側ハ上眼瞼ニ掩ハレ易キヲ以テ最モ適當ナラストス

若シ虹彩ノ角膜或ハ水晶体ニ癒着セル者ハ角膜透明ニシテ虹彩ノ癒着ナキ部分ヲ選テ施術スルヲ法則トス即チ瞳孔縁ノ遊離セル者ハ角膜ノ創孔ヨリ虹彩ヲ攝出スルヲ容易ニシ且ツ術後ニ炎ヲ發スルヲ少キカ故ナリ

視力ヲ善良ニスルノ目的ニ於テハ假瞳孔ノ狭小ナルヲ佳トス蓋シ瞳孔ノ狭小ニ應シテ視野モ又狹隘ナルニ非ス

(二) 眼球ノ緊張ヲ減却スルト焮衝ヲ防ントノ目的ニ在リテハ角膜ノ上部ニ於テ施スヲ良トス是レ上眼瞼ニテ假瞳孔

ヲ掩ヒ眩朦ヲ防キ又外貌ノ醜ナカラシメンカ爲メナリ此ノ目的ニ在リテハ可及的假瞳孔ノ廣大ナルヲ良トス

〔三〕 虹彩ヨリ異物及ヒ腫瘍ヲ除去セントセハ是レト尤モ近接スル部ヲ選テ角膜ニ創口ヲ造クルヲ法トス然レモ可及的角膜ノ瞳孔領ヲ避クルヲ良トス

〔四〕 水晶体ヲ出スニハ内障翳手術部ノ式ニ隨テ異ナルアルモ上方ニ於テ施スヲ良トス

假瞳孔術ニ數種アリト雖モ其中最モ稱用スル所ノ一法ヲ左ニ論述ス

〔虹彩切除法〕イリデック 此法ハ虹彩ノ一部ヲ切除スルノ法ニシテ一千七百八十年ニ於テ「ウエンチル」氏ノ發明セル所ナリ而シテ屢々改良ヲ加エテ以テ較近ノ式ニ至レリ

此術ヲ行フニ當テ要スル所ノ器械ハ即チ眼瞼開張器、固定鑷

子、鑷狀刀、虹彩鑷子、虹彩鉗以上三器ハ各々曲直ノ二種ヲ要ス
鈍頭刀、及ヒ「ダピール」氏ノ匙是レナリ

〔手術式〕

〔一〕 術者ノ位置、是レ施術ノ部位ニ從テ一樣ナラス即チ右眼ノ外側若クハ左眼ノ内側ニ施スハ患者ノ頭後ニ居リ兩眼上方、左眼外側及ヒ右眼内側ニ施スハ患者ノ左側ニ居リ兩眼下方ニ施スハ患者ノ右側ニ居ルヲ法則トナス但シ術者ノ慣習及ヒ光線ノ方向ニ應ニ便宜之ヲ活用スルハ敢テ妨ケナシ

〔二〕 患者ヲメ術臺上ニ仰臥セシメ而シテ眼球ヲ轉動ス可ヲサルヲ要ス若シ能ク手術ニ堪サル者及ヒ小兒ニハ「コロ、ホルム」ヲ用テ膜障セシム然レモ大人ニハ可及的之ヲ用ヒサルヲ良トス何トナレハ此術小ナリト雖モ大手術ノ時ノ如ク十

分ニ麻醉セシメザレハ却テ眼瞼中ニ不隨意ノ眼球運動ヲナシ間々手術ヲ失マルコトアレハナリ

(三) 眼瞼開張器或ハ指ヲ以テ眼瞼ヲ開張ス

(四) 固定鑷子ヲ以テ眼球ヲ固定ス即チ假瞳孔ヲ造ルヘキ部位ノ對側ニノ角膜縁ヲ距ルコト殆ントニ密迷ノ處ニ於テ結膜ヲ(廣サ三四密迷許)箱撮シ之ヲ以テ術者ノ左手ニ持チ而シテ眼球ヲ少ク施術側ニ廻轉シ以テ固定ス此ノ如ク對側ニ於テ固定スルキハ視神經ト鑷子ト刀ト互ニ鼎足狀ヲ爲スカ故ニ眼球ノ運轉益々難クシテ便ナリ

(五) 術者右手ニ鎗狀刀ヲ採リ角膜縁ニ刺ス即チ假瞳孔ヲ造ラント欲スル部位ニ於テ初メハ稍々斜メニ刺シ刀尖前房ニ達セハ直ニ刀柄ヲ水平ニシ刀尖ヲ瞳孔ノ中心ニ向ケ虹彩ト並行ニ刺入ス初メヨリ水平ニ刺スキハ角膜中ニ長キ而シテ並行ニ刺入ス創管ヲ造リ虹彩ヲ撮出スルニ不便ナリ

創口ノ大サ已ニ望ム處ニ達セハ少ク刀柄ヲ下ケ刀尖ヲ角膜後面ニ向ハシメ而シテ徐々ニ抜キ去ルヘシ此際前房水漏出シ從テ虹彩及ヒ水晶体ハ前方ニ突出ス故ニ宜ク注意シ之ヲ傷クル勿レ設令僅少ナルモ水晶囊ヲ傷クルキハ忽チ前房水ヲ吸收シテ内障翳ヲ起ス者ナリ或ル術者ハ水晶囊ニ傷クルヲ恐レテ速カニ刀ヲ拔除スルアルモ是レ却テ不佳ナリ何トナレハ前房水一頓ニ流出ノ内壓俄ニ減シ爲メニ眼球内ノ出血ヲ發コストアレハナリ

尙ホ創口ヲ廣クセント欲セハ刀ヲ拔去ルノ際其刀ヲ以テ創口ノ一端ヲ切開シ或ハ更ニ鈍頭刀若クハ鉗ヲ以テ切開ス可シ

(五八) 固定鑷子ヲ介者ニ讓リ術者ハ左手ニ虹彩鑷子右手ニ虹彩鉗ヲ採リ以テ虹彩ヲ掣出シ而シテ其一小部ヲ切除ス即チ

先ツ鑷子ヲ閉チテ角膜口ヨリ送入ス其際鑷子ノ尖端ニテ創口ノ後縁ヲ輕ク壓スルキハ創口哆開シテ送入ニ便ナリ此時若シ前房水全ク流出シテ鑷子ヲ送入シ難キキハ小時間眼ヲ瞑カシム(前房水ハ忽チ再ヒ貯留スルモノナリ)而メ鑷子ノ尖端己ニ瞳孔縁ニ至レハ是レヲ開キテ其瞳縁ヲ嵌撮シ徐々ニ創口ヨリ牽出スヘシ若シ虹彩癒着アルキハ一層注意シ更ニ牽出ノ徐々ナルヲ良トス否ヲサレハ間々虹彩ヲ裂キ或ハ水晶囊ヲ破ルノ害アリ既ニ牽出セル虹彩片ハ右手ノ鉗ヲ以テ切除スヘシ(尤モ創口ニ近接スルヲ佳トス)虹彩ノ全ク癒着ナキ者ハ切除僅カナル如キモ創口擴大ス是レ瞳孔括約筋ノ收縮ニ由ルナリ

能ク熟練シタル介者ナレハ術者自ラ左手ニ固定鑷子ヲ持チ右手ニ虹彩鑷子ヲ探リ其ノ牽出シタル虹彩片ヲ介者ヲ剪

ヲシムルモ亦タ可ナリ剪除ノ後虹彩ノ切縁角膜ノ創間ニ挿塞セルキハ「ダヒエル」氏匙ヲ以テ之ヲ開放スヘシ

若シ出血多ク前房中ニ貯留スルキハ「ダヒエル」氏ノ匙ヲ以テ創口ノ後縁ヲ壓シ之ヲ開テ血液ヲ流出セシムヘシ

(手術後ノ處置) 海綿或ハ濕タル布片ヲ以テ眼ノ内外眦及

ヒ眼上ヲ拭淨シ而ツ眼上ニ布片ヲ貼シ其上ニ綿撒糸ヲ置キ壓定綳帶ヲ施シ後チ暖室ニ靜臥セシムヘシ否ヲサレハ光線健眼ヲ刺戟スルカ故ニ術後ノ瞳孔モ亦タ縮張シテ炎ヲ起スモノナリ疼痛ハ術後二三時ヲ經テ全ク去ルヲ常トス然レモ若シ劇痛ヲ殘シテ安眠ヲ妨クルキハ「モルヒ子」ヲ與フヘシ綳帶ハ日々一回更換ス而シテ術後第二日ヨリ更換ニ際シ「プロセント」ノ亞篤呂比涅水ヲ点眼スヘシ而シテ術後ノ經過善良ナレバ三四日ノ後チ綳帶ヲ去リ藍色ノ眼鏡ヲ用フルヲ以テ

足レリトス然レモ尙數日間視力ヲ勞スル勿ラントヲ要ス
若シ術後角膜或ハ虹彩ニ炎症ヲ發セハ一日四五回「アトロピ
チ」水ヲ点眼シ兼テ冷罌法ヲ施シ或ハ顛顛部ニ水蛭ヲ貼シ又
下劑ヲ與ヘテ暗室内ニ靜臥セシムヘシ

○眼科的烙鉄ノ實驗

在東京 相良精一

烙鉄ノ効用タルヤ單ニ之ヲ云フキハ血管ノ切端及ヒ血液ヲ
燒燬炭化メ燒痂ヲ結フノ目的ナリト雖モ眼科的ニ於テハ多
ク角膜ニ輸入スル血管ヲ燒燬シ或ハ角膜潰瘍ノ治癒意タル
ト等ニ稱用ス然リト雖モ此ノ細手術ヲ施スキハ他ニ百方効
ナキトニ於テ健康部ニ抵觸セサル様細心注意ヲ要スルハ勿
論且ツ能ク其ノ術ニ習熟セサルヘカラス

手術式 先ツ二三十分前四「プロセント」ノ鹽酸コカイン
溶液ヲ二三回点眼シ全ク眼球表面ノ知覺ヲ脱却シテ然ル後
患者ヲ倚子ニ坐セシメ或ハ手術榻ニ仰臥セシメ介者ハ患者
ノ頭部ヲ固定シ術者ハ左手ノ拇指ト示指トヲ以テ眼瞼ヲ開
闢固定シ(若シ介者ナキトハ術者同時ニ輕壓ノ眼球ヲ固定ス
ルモ可ナリ)次ニ右手ニ執持セル白烙金或ハ熱セル尿管ア
シヲ用ユヘシ余ハ直徑二「ミルリメートル」大ノ剛鉄線ノ
尖端ヲ滑澤ニシ火酒ヲテ燒燬シ患部ニ輕々底觸スルヲ例ト
ス

(第一) 角膜局處葡萄腫適應症

該症ハ始メ角膜ニ潰瘍ヲ生シ漸々深層ヲ侵シ「エセメット」
氏膜ニ達ス然ルキハ眼球ハ内壓力ノ爲潰瘍底ノ膨突ヲ來シ
以テ角膜膨脹症ヲ發ス元來「シデメット」氏膜ハ頗ル彈力性ナ

ルヲ以テ該膜ハ外方ニ押出セラレ角膜面ニ隆起スル一囊ヲ生シ内ニ半透明ノ水様液ヲ含ム斯ノ如クノ間々經久持續シ次テ「デシメット」氏膜及ヒ遺殘セル角膜組織肥厚シ以テ漸々癍痕ヲ結フ此癍痕ハ屢々葡萄膜狀ニ膨突スレト時トノハ平坦トナル「ア」リ然レト角膜膨脹症ヲ發スルノ后爰ニ角膜ノ破開スルヲ通例トス但シ其破開スルヤ頻回ニ之ヲ起ス且ツ此ニ續發スル角膜癍管ハ久時存スル者ナリ

局處療法トノ毎日「ヒロカールヒン」若クハ「エセリン」ノ溶液ヲ點眼シ又角膜穿孔術ヲ行ヒ或ハ假瞳孔ヲ作り壓定綑帶ヲ施スモ一モ効アル者ナシ

抑々「デセメット」氏膜ハ内壓増進ノ爲ニ或ハ破裂スルナシトハ保セサレト二三ノ腐蝕藥即チ硝酸銀等ヲ以テ摩擦スルモ決シ腐蝕スル「ナ」キ所ノ極テ強固ノ膜ナリ因テ余ハ「ア」ト

「ヒン」ヲ點眼シ充分瞳孔ヲ散大セシメ「フオングレ」フエ「氏」ノ内障眼刀ヲ直角ニ角膜ニ刺入シ后小彎剪ヲ以テ該部ヲ全ク除去シ壓定綑帶ヲ施セハ大概二三週ニノ癍痕ヲ結ヒ治癒スト雖ト彼ノ烙鉄ノ尖端ヲ毎三日毎ニ膨突部ニ觸ルレハ大約二週間ニノ癍痕ヲ結ヒ膨突平坦トナリ其結果ヲ得ル者トス

(第二) 適應症血管性角膜プアヌス

角膜周圍ノ前後結膜血管連續部ヨリ更ニ細血管ヲ生シ「ボ」マン「氏」層中ニ滲入シ漸々深層ヲ侵シ角膜非常ニ曇暗ナルトハ通常黃降瀕軟膏又ハ甘汞ノ按摩法ヲ可トス甲ハ該軟膏「一」プロセント「一」米粒大ヲ下眼瞼結膜ニ塗布シ之ヲ閉シ上ヨリ拇指ニテ強ク按摩ス是レ細血管ヲ消退スルノ効アリ乙ハ毛筆ニテ眼内ニ散布シ上ヨリ按摩スル「一」前ノ如クス又誘導法トノ頸部ヘ打膿法ヲ施シ下劑ヲ與フ極メテ頑固ナル者ニハ

淋疾ノ膿ヲ種接シ或ハ「エクイリヂン」ヲ用ユ其法「エクイリヂン」實ニ「プロセント」ヲ水適量ニ浸出シ其液ニテ眼ヲ洗滌シ以テ人工ニ「プレノレー」炎ヲ發起セシム

以上ノ諸方ヲ施シ効ナキハ角膜周圍ノ結膜ヲ幅ニ乃至四「ミルリメートル」切除シ再生セル血管ニ烙鉄燒灸法ヲ施スヘシ又單ニ結膜ヨリ角膜ニ進入スル血管ヲ結膜部ニテ燒燬スレハ大ニ効アリ

(第三) 適應症 蔓延性角膜潰瘍及深層角膜潰瘍

甲症ハ中央ニ淺キ潰瘍ヲ生シ速ニ蔓延シ表皮剝離シ其邊緣白色トナリ中央部ハ透明ニシテ角膜ノ實質ハ「シフーセ」曇暗ヲ起シ後「ヒポヨシ」ヲ生ス是レ多クハ淚管閉塞若クハ米麥穗等又ハ菱形ヲ有スル物質ノ尖端ニテ刺戟スルヨリ來ル

乙症ハ角膜膿瘍ヲ生シ漸々侵蝕シ表層或ハ内面ニ破開シ潰

瘍周圍溷濁(炎性ヨリ來ルモノ或ハ痲毒ニヨル者)或ハ全ク透明ナルアリ(炎性ノモノ)是レ多クハ眼淚器結膜諸病、梅毒、腺病、三叉神經麻痺等ヨリ來ル者ナリ

右ハ局處療法トシ「アトロピン」或ハ「エゼリン」溶液或ハ「コロール」水ヲ点眼シ壓定帶ヲ施シ防腐温菴法又ハ角膜穿孔術ヲ施シ其他全身滋養法ヲ命スヘシ是レ等全ク効ナク甲症漸々増進スルカ或ハ乙症治癒遲慢ナルキハ烙鉄ヲ以テ潰瘍ノ底面ヲ輕々底觸スベシ

(第四) 適應症 淚鼻管狹窄症

眼瞼淚囊部痲腫シ淚囊部ヲ壓スレハ分泌物小淚管若シクハ淚鼻孔ヨリ流出ス之レ多クハ鼻「カタル」及ヒ分泌液反流等ヨリ來ル者ナリ」局處療法トシ淚囊注射(皓礬、硝酸銀水等)又小淚管ヲ切開シ后「ブーシー」ヲ推入スル等ノ諸法ニテ治セサ

レハ則チ涙囊撲滅法余ハ烙鉄ヲ稱用ス其他硝酸銀、コロール
亞鉛等ヲ用ユル法アレド余ハ之ヲ稱用セス

○水泡性結膜炎ノ治驗

在東京 相良 精一

該症ヲ別テ二種ト成ス腺病性流行性是レナリ其レ此症ハ眼
球結膜ニノミ發スル所ノ小泡疹ニ「フリテーチ」ト通稱スル
者ニノ常ニ分畫狀ニ發スル者ナリ他ノ結膜炎ノ如ク驗結膜
ヨリ球結膜ニ及ホストナク球結膜ノ數層ニ發スル所ノ小泡
疹ニノ皮膚ニ發スル水泡疹ト其性異ナルトナシ其水泡疹ハ
或ハ一ノ流動液ヲ以テ充サレタル泡ナルアリ或ハ圓形ノ細
泡ヲ充タセル膠樣小結節ナルアリテ其面平滑ニシ其廣サ三
乃至四「ミルリメートル」ニ至ルトアリ

球部ハ所トシテ之ヲ發セサルナク蓋シ水泡部ニハ血管輻蟻
ス其血管ハ即チ前後結膜血管共ニ茲ニ束テ充血ヲ起ス甲ハ
角膜周圍充血ヲ起シ乙ハ結膜充血ヲ起ス其水泡疹ハ大抵角
膜炎ニ近ク生ヌ扁平水泡疹ハ殊ニ然リ又小泡疹ハ主ニ角膜
炎ニ在リテ恰モ砂粒ヲ散布スルカ如シ此症ハ結膜ノ分泌増
加セサルモ刺戟症狀アリテ涙液ノ過泄及羞明アリ

(原因) 諸般ノ刺戟ニ因テ發シ又惡液質殊ニ腺病質ノモノ
此症ニ罹ル加之ナラス總テ皮膚弛緩シ蒼白ナル人ハ屢々之
ヲ患ヒ又流行性トナリ屢々發スル者ナリ

(經過及ヒ轉期) 小ナル小泡疹ハ大約三日ニシテ治シ扁平米
粒狀ヲナシ角膜ヲ去ル者ハ漸々増大シテ一二週ノ后消散ス
レド再發シ易クシテ每常必ズ再ヒ水泡ヲ新生ス之ニ由テ病
氣持長ス而シ水泡ハ破潰ノ小ナル潰瘍ヲ形成ス殊ニ潰瘍ヲ

生スルハ扁平水泡疹ニ多シ又病勢角膜ヲ侵シ種々ノ角膜病即チ芒把狀角膜炎或ハ「ファンヌス」狀角膜炎等ヲ發起シ數年ニ亘ルヲアリ

(鑑別) 此症ハ剛膜炎ニ類似スト雖モ該症ハ指頭ヲ以テ結膜ヲ移動スルモ血管運動セス且ツ扁平ニシテ錯雜細狀ノ剛膜血管ヲ呈ス

(治方) 刺戟機ノ強劇ナル者寒菴法鉛糖水等ヲ撰用シ羞明甚タシクハ涙液過泄ノモノニハ「アトロヒ子」水ノ点眼甘汞散布資降汞軟膏按摩法又内服ニハ全身療法トシテ肝油沃鉄沃剝キニ一子鉄劑等ヲ與ヘ傍ヲ滋養法ヲ施シ又水銀軟膏ノ塗擦法或ハ誘導法トシテ下劑蟻針發胞等ヲ施ス等ハ一般ノ療法ニシテ硝酸銀ヲ忌ムハ各書中ニ見エタリ又實驗上之カ爲メニ劇炎ヲ發シ翌日ハ結膜注血スルカ如ク遂ニ患者不平ヲ訴フル

トアリ然ルニ余ハ「フリクリーチ」殊ニ流行性ノ初期ニ四「プロセント」ノ硝酸銀溶液ヲ一日一回點眼スルニ大ニ効ヲ奏シ大抵三四日ニシテ炎勢ヲ挫キ偉効ヲ得ル實ニ驚クニ堪タリ

○加答刺屈篤施術治驗 (有志共立東京病院實驗)

術者 高木兼寛 助手 千葉吾一併誌

患者 割烹渡世 宮本喜三郎

六十五年

(宗族履歴)及ヒ(既往履歴)ニハ本病ニ關シタル要件ナシ(當病ノ履歴并現症) 明治十二年春頃ヨリ視力減耗シ殊ニ遠視力ヲ失フテ甚シク漸ク進ンテ同年秋季ニ至リテハ該症大ニ増加シテ僅ニ一間餘外ヲ隔離スルキハ人アルヲ認ムルモ其何人ナルヲ判スルニ苦シムニ至ル然レモ病初ヨリ疼痛

及ヒ他ニ一モ異常ヲ覺ヘスシテ經過シ他覺症モ亦ナカリシト云フ醫治ヲ加フルモ奏効ナク荏苒月日ヲ閱シ翌明治十三年六月ニ至リ試ミニ一眼ヲ以テ物像ヲ看ルニ左眼ハ異常ナキモ右眼ノミヲ以テ之ヲ看ルハ暗黒ニシテ一ノ物像ノ觸ル、モノナシ茲ニ於テ初メテ右眼ノ既ニ失明シタルヲ知リ醫ニ就テ治ヲ乞フ醫曰ク右眼既ニ失明セリ再々ヒ古ニ復スヘカラス且ツ左眼ヲ診スルニ左眼モ亦々右眼ニ類スルノ病徴アリ早晚必ス失明スルニ至ラント爾后尙ホ點眼藥等ヲナスモ寸効ナク漸々病勢ヲ増シ遂ニ明治十五年八月ニ至リ左眼失明スルト右眼ニ異ナルトナシ即チ眞ノ盲人トナル然レモ左眼ハ右眼ニ比スレハ稍ヤ光暗ヲ辨スルモノ、如シ如此眞ノ盲人ノ群ニ入リシ后ハ白日世界ヲ觀ルノ念ヲ斷ツ敢テ醫治ヲ乞ハサリシニ明治十六年秋ニ至リ某醫診シテ内障眼

トナシ施術ヲ有志共立東京病院ニ乞フ之ヲ診スルニ一目シテ白内障眼タルヲ知ル他全身一ノ病徴ヲ呈セサルモ年齒已ニ耳順ニ五ヲ加フ從テ軀體衰弱セリ依テ之ヲ施術スルモ望ンテ美結果ヲ得難カルベキ旨ヲ説ク患者曰ク余ヤ既ニ盲人ノ數ニ入ル豈結果ノ善惡ヲ望ンヤ只術アラバ是ニ從ヒ萬一ノ僥倖ヲ欲スルノミト切ニ請フテ止マス依テ十一月十七日午后一時ヲ以テ施術ス

(手術時ノ零況) 術者手術場ニ臨ミ衆ニ述テ曰ク夫レ「カタラクト」ノ手術タル古來諸大家彼ノ三角刀ヲ以テ廣ク角膜ヲ切開スルノ式ヲ稱賛シタリシモ近世ニ至リ狹刀ヲ以テ角膜若クハ鞏膜ヲ少シク穿開スルノ式一タヒ出テ、ヨリ前三角刀ヲ用フルノ法ハ殆ント地ニ落チタルカ如シ而シテ近世行フ所ノ術ハ虹彩ノ一部ヲ切除スルカ故ニ術中之ヲ毀損スルノ患

ナク且ツ好結果ヲ望ムヘキモノトス依テ予カ茲ニ施サント
 欲スルモノモ即チ近世稱スル式ニ從ハントスト此時恰モ患
 者迷曠藥奏効ノ徵ヲ現ハス即チ患者ヲ仰臥セシメ術者其後
 方ニ立チ介者ハ眼瞼ヲ開テ之ヲ固持シ(眼小ニシテ開眼器ヲ
 用フル能ハス)術者左手ニ鑷子ヲ執リ角膜ノ下際ニ於テ結膜
 及結膜下組織ヲ撮持シ眼球ヲ下方ニ牽テ固定シ右手ニ狹刀
 ヲ輕持シ角膜外縁ノ上三分一ト中三分一ノ接合部ニ於テ之
 ヲ刺入シ除々ニ之ヲ進メテ角膜他側ノ同部ヲ穿破シ鑷樣運
 動ヲ以テ角膜ヲ上方ニ向ケテ瓣狀ニ截開シ左手ニ固持シタ
 ル鑷子ハ介者ヲシテ代テ保持セシメ術者ハ一手ニ彎曲剪刀
 ヲ把テ切孔ノ兩縁上ニ其兩枝ヲ開キ他手ニハ虹彩鑷子ヲ把
 テ切孔ヨリ之ヲ挿入シ瞳孔ノ上縁ニ於テ虹彩ヲ鉗撮シ抽出
 シテ曲剪同枝ノ間ニ引キ之レヲ剪斷セリ茲ニ於テ術者刺鍼

ヲ把リ鍼背ヲ下方ニ向ケテ切孔ヨリ挿入シ水晶嚢ヲ縱横ニ
 刺破シ更ニ半轉シテ鍼背ヲ上方ニ向ケテ鍼ヲ去リ術者自ラ
 左手ノ示指ヲ輕ク切孔ノ上際ニ貼シテ之ヲ壓定シ次ニ有滯
 匙ヲ眼球ノ下方ニ貼シ上方ニ向テ除々ニ壓迫セリ然ルニ不
 透明且ツ粗慥ナル灰白色ノ水晶體ノ一端切孔ヨリ現出シ有
 滯匙ヲシテ隨テ壓迫ヲ加フレハ水晶體從テ出テ終テ全ク脫
 出セリ

(術後ノ景況) 右ノ手術了リテ直チニ「アトロヒチ」水(二氏一
 号ノモノ)ヲ點眼シ法ノ如ク繃帶シテ暗室ニ安臥セシメ毎日
 二回眼瞼及ヒ周圍ヲ微温湯ヲ以テ洗淨セシメ毎回繃帶ス(但
 シ眼瞼洗淨ノ際注意シテ眼ヲ開カシメス)如此スル一週日
 其間絶テ病徵ヲ發ヒス全身無恙ナリ一週日ノ后チ初メテ暗
 室ヨリ出シ繃帶ヲ去リシニ患者忽チ再々ヒ物像ヲ見ルヲ得

テ其欣ヒ實ニ手ノ舞ヘ足ノ蹈ムヲ知ラサルカ如シ能ク眼中
ヲ窺フニ炎症ノ併發モナク種々ノ物像或ハ色等ヲ以テ試力
ヲ驗スルニ三間以内ニ於テスレハ細大疎密色樣等悉ク看別
スルヲ得タリ茲ニ於テ適當ノ眼鏡ヲ撰ンテ之ヲ與ヘ退院セ
シム

明治 病床實驗集

外科部

昨冬橋本君林華兒篤氏ノ外科書ヲ資テ少年ノ軍醫ニ講授
セリ夫レ林氏ハ君ノ日耳曼遊學中ニ親炙セル外科教師ナ
リト云フ門徒ニシテ其師ノ書ヲ講ス既ニ餘蘊ナシ況ンヤ又
タ自己ノ實驗ヲ以テ証據トナスヲヤ看官宜シク早々ニ看
過スルナカレ

明治十二年

田代 基 德 誌

○截斷術

橋本 綱 常 講述

アンピタチン
截斷術トハ肢體ノ一部ヲ截離スルノ義ナリ蓋シ專ラ連續部
ヨリ截離スルヲ云フ而ノ關節ヨリ截離スルモ亦タ此語ヲ例

用シテ關節截離術ト云フ

抑々截離術タル往古ヒボカラテスノ學流盛ンニ行ハル、
 腐敗部ノ脫離スルヲ見テ初メテ此術ノ至當ナルヲ發明セリ
 其後セルシス氏カレヲス氏等初メテ健康部ニ於テ此術ヲ施
 セリ爾後漸々精密ニ至ルト雖モ只軟部ノ截斷及ヒ止血ノ二
 法ニ出テス其止血法ノ如キハ甚々粗糲ニシテ或ハ烙鉄ヲ以テ
 創面ニ接シ或ハ燒刀アラヒア學流ヲ以テ切斷シ或ハ繩ヲ以
 テ結紮スル等ノ如シ然リ而シテ單ニ動脈ノミチ結紮スルニ至
 リシハ實ニ一千六百五十九年パレー氏及ヒタガウト氏ヲ嚆
 矢トス其後一千六百七十四年ニ至リテモーレル氏始メテ止
 血器ヲ發明セリ
 軟部ノ截斷法ニ數種アリト雖モ畢竟骨端ヲ包裹スルノ便ト
 不便トニ是レ因ルナリ其最モ緊要ナルモノニ三法アリ曰ク

輪狀曰ク橢圓狀曰ク瓣狀截斷是レナリ

截斷法ト關節截離法トノ利害ニ至リテハ諸説紛々トシ未タ
 詳明ヲ得ス然レモ概テ關節截離法ヲ以テ難シトスルモノ多
 キニ居ル蓋シ之ヲ施スニ三大難事アリ癒後骨端ノ形狀善良
 ナラス是レ軟肉少クシテ骨端廣大ナルニ由ル是レ其一ナリ
 膿潰シ易スクノ危險ニ陥ル丁少カラス是レ軟骨ハ癒合炎ヲ
 起スノ力少キニ由ル是レ其二ナリ總テ關節創ハ他部ニ比ス
 レハ甚々危險ナリト云フ是レ其三ナリ

輪狀截斷術ハ四肢ノ中軸ニ對シテ直角ニ軟肉部ヲ截斷スル
 ヲ云フ但シ一刀ニテ切斷スルハ直ニ骨部ヲ露出ス往古ヨ
 リ此露出ヲ忌ムセルシス氏亦タ頗ル茲ニ焦心セリ輒今ニ至
 リテ之ヲ大別シ單刀復刀ノ二法トス甲ハセルシス氏ノ古法
 ニシテ一刀ニテ軟肉部ヲ全斷シ筋肉ヲ舉上メ骨ヲ鋸斷スル

モノ之ナリ而シテ今尙ホ之ヲ稱用スルモノ多シト雖中古ハ却
 テ癩瘻セラレタリ乙ハ初メ先ツ刀ヲ取テ皮膚ヲ切り次テ之
 ヲ翻轉シ更ニ筋鞘及ヒ筋肉ヲ切テ骨面ニ達スルモノ之ナリ
 此法ヤ一千八百年代ベチツトセルデン氏ノ發明スル處ナリ
 氏ハ皮膚ヲ切ルノ后筋鞘ノ一部ヲ剝離翻轉シ其接際部ヨリ
 筋肉ヲ截斷ス蓋シ皮膚ノミヲ以テ創面ヲ包裹シ袖緣形ヲ造
 ルヲ主張スレハナリ腕今此説ヲ賞セス方今ニ至リテハ復刀方ニモ亦
 袖緣形ヲ作ルト作ヲサルトアリ又々漏斗狀層々切斷法等數
 種アリト雖モ皆ナ不用ニ屬ス
 瓣狀截斷ハ四肢ノ筋肉ヲ兩側或ハ片側ヨリ截リテ四角若シ
 クハ圓形ノ肉瓣ヲ作ル者ナリ此術ヤ千六百七十九年ロイド
 ハム氏ノ發明スル所ニ係ル氏嘗テ銃創患者ニ於テ片側ノ筋
 肉已ニ壞亂セシニ尙ホ對側ノ筋肉依然トシ存スルモノヲ實

驗シ遂ニ此ノ發明ニ及ヘリト云フ當時瓣狀切斷ハ純ラ下脚
 ニノミ施セシニ漸ク上肢ニモ之ヲ行フニ至ル而シテ兩側ノ肉
 瓣ヲ造ルハ主トシテ大腿ニノミ限リシニ後來上膊ニモ亦之ヲ
 施用セリ施術法ニ三種アリ第一ヲウットン氏ノ發明ニシテ二個
 ノ四角瓣ヲ作ル此法ヤ先ツ單狀ノ輪狀切斷ヲ施シ後チ更ニ
 兩側ヨリ直線ニ切テ二個ノ方形ヲ造ルモノ之レナリ第二ハ
 ウエルシウエン氏ノ法ニシテ中央ヨリ切テ斜ニ外方ニ及ホ
 ス者之ナリ第三ローデハム氏ノ法ニシテ外方ヨリ切テ斜ニ
 中央ニ入ルモノ是ナリ

楕圓狀切斷ハ輪狀切斷ト稱ヤ同一ナリ只其異ナル處ハ軸ヲ
 廻リテ斜線ニ切斷スルノ一事トス中古此法ヲ全ク廢棄セリ
 ト雖モ最近更ニ復々之ヲ施用スルニ至レリ殊ニ一ノ關節截
 離術ニ於テ最モ之ヲ賞用セリ某氏ハ關節截離術ニハ欠クハ

カラサルノ法ナリト云ヘリ然リト雖_レ余ハ之ニ左袒セス此
楕圓狀切斷術中長形楕圓瓣ヲ造リ其尖端ヲ拘引シ以テ其創
面ヲ被包スルノ法アリ

切斷三法ノ利害得失

往古ヨリ如是切斷術方法數種アレ_レ右三法ノ外ハ皆蛇足ニ
屬ス蓋_シ瓣狀法發明前ハ輪狀法ヲ以テ最上トナシタレ_レ瓣
狀法發明以後ハ輪狀法ト相比肩ス何トナレハ彼レニ在リテ
輪狀ヲ良トシ此ニアリテハ瓣狀ヲ優レリトスルモノアレハ
ナリ夫レ斯ノ如ク其向フ所各々異ナリト雖_レリンハルト氏
ハ斷然輪狀法ハ瓣狀法ヨリ優レリトス之レ其創面狹小ニシ
テ且ツ縫合シ易ク未熟ノ徒_ニモ容易ニ之ヲ行フヲ得ル殊ト
ニ第二期癒合ニアラサレハ癒エルノ目途ナキモノニハ他方
ヲ行フヘカラス且ツ輪狀法ニアリテハ其創面周圍ヨリ癒合

シ瓣狀法ニ於テハ皮膚收縮筋肉怒脹シテ創面惡形ヲナスノ
恐_レアレハナリ故ニ予ハ連續切斷ニハ輪狀法ヲ好ムト雖_モ
筋肉多キ部位例ハ大腿部ノ如キハ兩足瓣狀法ヲ良トス_時ト
輪狀法_モ亦大ニ蓋シ施術ノ時間短ク且ツ其癒合宜シキヲ得
ル_ルハ癒合等ノ極メテ美ナルヲ以テナリ而_{シテ}片側ノ肉部壞
亂スルモノニハ殊ニ此術ヲ良トス

切斷術標準

抑々切斷ノ術タルヤ止血法ヲ以テ極大最要トス而_{シテ}方今止
血法ノ具備セシ以來ハ危險ノ術ニ非ラスト雖_レ敢テ忽ニス
ヘカラス豫后ノ良否モ亦タ決セサルヘカラス大腿部ノ如キ
ハ殊ニ然リトス何トナレハ始メ良性タルモ後忽然變_シ惡性
トナルヲアレハナリ然_レモ治癒ノ目的ナキモノ或ハ命旦夕
ニ逼ルモノ等ニ於テハ斷然施_ス可ナリ

夫レ切斷術ハ如何ノ病ニ行フテ不可ナルヤ全身血液ノ病或ハ病ノ貴要部ニアルモノ是ナリ又々他ノ疾病ノ爲メ之ヲ延期スルモノアリ但シ之ヲ忌ムニアラス又々姑息法トシテ之ヲ施ストアリ例之ハ劇甚ノ疼痛或ハ治癒ノ目途ナキモ一時患者及ヒ看護者等ノ其臭氣ニ堪得サルカ如キ之ナリ今茲ニ切斷術ノ標準ヲ細論スルニ三様アリ第一。創傷第二。四肢ノ組織病及ヒ變形病第三。新生物是ナリ

(第一)創傷 (甲) 複雑骨折面ノ廣大ニ且ツ膿潰饒多ニシテ治癒ノ目途ナキ者或ハ骨折ヲ除去シ軟肉部癒合ノ目途アルモ己ニ其支柱ヲ失フ者

(乙) 軟肉部挫傷ノ爲ニ大血管及ヒ神經等ノ壞爛セシ者

(丙) 器械等ノ爲ニ一肢全ク碎破セシ者

(丁) 礮丸ノ爲メニ一肢ヲ碎斷ノ其創面壞亂スル者

(戊) 銳創ノ爲ニ出血甚シク危險ニ陥ル者 即結紮スル能ハサル者 或ハ

彈丸ノ爲ニ骨ノ大部挫折スルモノ殊ニ關節ノ近傍ニ於テ レヒツチヤン 截除術ヲ行フノ目途ナキ者トス

蓋シ銳創截斷法ニ附テハ千七百年ノ末ヨリ千八百年ノ始ノニ於テ紛議頗ル多ク著書亦々陸續汗牛ス其ノ本旨ハ第一期受傷後十八時乃至ニ術ヲ施スカ或ハ第二期 膿潰期ニ術ヲスルカノ二議アリ當今尙ホ未タ判然シ難シト雖余ハ危險症ヲ除クノ外ハ某々ノ實驗ニ任ス而シテ未熟ノ外科者流ハ創傷或ハ組織病等ノ標準ニ於テ必ス施術スヘキモノトス故ニ輕忽ニ施術ノ人名ヲ害スル丁屢々之アリ又々貴要肉部ノ捫挫裂傷等ニ於テ縱令ヒ截斷術ヲ施スモ損壞部全ク除去シ難キモノハ必ス之ヲ行フヘカラス

(第二)組織病及ヒ變形病 (甲) 下脚潰瘍ノ最モ慢性ニシテ

フツテ皮膚ヲ生スルモ軟弱ニシテ破裂シ易キ者

(乙) 蜂窩織ノ大部膿潰ノ患者衰脱ノ恐レアルモノ

(丙) 骨瘍骨疽等ノ爲メニ截除術或ハ「エキステーション」ヲ施シ難キモノ即チ其部廣大ニシテ饒多ニ膿潰シ甚タ危険ナル者

(丁) 壞疽已ニ分界線ヲ生シ周圍ノ焮衝甚シカラサル者

(戊) 短縮例之ハ足趾手指等ノ作用ヲ失フモノ 大關節ト雖モ極メテ頑固ナルモノニハ此術ヲ施スヘシ

(己) 不治ノ假性關節即チ骨ナクシテ筋肉ノミナル者

(庚) 關節鼠走 軟骨片ノ遊走スルモノ 許多ニシテ疼痛劇甚ナルモノ或ハ其作用ヲ失フモノ

(辛) 動脈瘤ノ爲メニ其部ヲ支フル所ノ骨陷沒スルモノ或ハ其部ニ壞疽ヲ發スル者

(壬) 靜脈瘤ノ爲ニ組織萎縮ノ屢々出血スル者

(癸) 蜂窩織ノ肥厚スル者 象脚或ハ發育變常シ其用ヲナサ、ルモノ等之ナリ

(第三) 新生物 (甲) 縱令ヒ新生物ハ良性タルモ其部廣大ニテ除去スルコト能ハサル者或ハ之カ爲ニ壓迫ヲ受ケテ支柱骨ノ陷沒スル者或ハ截除術ニ任シ難キ者

(乙) 癌腫大血管ニ根據シ除去シ難キ者或ハ其骨ニ根據シ截除術ヲ施ス能ハサル者之ナリ

兩肢ノ截斷ハ同時ニ施スヲ當レリトスルカ將々之ヲ不當トスルカ某氏曰創傷ハ恐ル、ナキモ術後ノ反應症ヲ恐ルト某氏曰予實驗ヲ以テ其說ノ非ナルヲ信スト斯ノ如ク諸說未タ一定セスト雖モ共ニ一理ナキニアラス故ニ一患者ニ兩肢切斷ヲ施サント欲セハ宜シク先ツ其預後ノ良否ヲ察シテ後之

ヲ行ハサルヘカラス若シ其預后ニ於テ恐ル、處ナキニ於テハ斷然之ヲ行フテ可ナリトス例之ハ車輪ニテ同時ニ兩脚挫傷スルモノ、如キ之ナリ

切斷術細論

其一 預備裝置

(第一器械) 此術ニ要スル器械ハ(イ)「ヤルベル」及ヒ「ピストリー」等ナリ大切斷ノ時ハ唯表皮ノミヲ切ルニ供ス然レモ小切斷ニ在リテハ終始之ヲ用ユルコトアリ(ロ)切斷刀ナリ當今其形種々アリト雖モ往古ノ幅廣キモノハ之ヲ要セス(ハ)骨鉸ナリ是レ骨端ヲ剪除スルモノニシテ外科醫某氏ハ骨鉸ヲ用ユル外更ニ鑷子ヲ以テ其骨端ヲ鈍圓ナラシムルヲ良シト云フ反對論者曰骨端ハ筋肉中ニ在リテ自ヲ鈍圓トナルヲ以テ無益ナリト或曰此鑷子ハ當ニ無益ノミナラス反テ骨端ヲ變

厚ナラシムルノ害アリト(ニ)止血器即チ動脈鑷子、糸、止血針(ホ)縫合針、帽針等ナリ

(第二繃帶) 切斷部軟肉ヲ舉上スル爲メ長サ十二「ツソール」乃至十八「ツソール」ノ一裂若シクハ二裂ノ布片ヲ用ユ然リト雖モ余ハ之ヲ欲セス而シテ木板、鉄葉板、及ヒ革皮等ヲ用ユルモノアリ其他豫メ適宜ノ布片ヲ備ヘスンハアルヘカラス

(第三患者位置) 上肢切斷ニ在テハ起坐スルヲ最良トス迷朦法ヲ行フキハ固ク椅子ニ縛セサルヲ得ス若シ時宜ニヨリ横臥セシメサルヲ得サルキハ可及的床邊ニ倚リ肩部ヲ床邊ト併行ナラシメ患手ハ外送シ水平ニ固持スヘシ若シ下肢ニ施術スルキハ患者ヲ仰臥セシメ上体ハ少シク高舉シ臀部ヲ床ノ邊緣ニ置クヘシ病院及ヒ手術院等ニ於テハ自ヲ手術臺ノ設ケアリト雖モ民間ニ於テハ然ラス故ニ床上ニ横臥セ

シメ或ハ食蠶ヲ用ユルコアリ是レ尋常臥床ヨリ高キヲ以テ殊ニ良トス又手術ヲ要スル部ハ精細ニ毛髪ヲ剃除スヘシ

(第四術者ノ位置)

上肢或ハ下肢ノ切斷術ニテハ術者患肢

ノ外側ニ立チ手術部ノ位置ヲ定ムヘシ大腿切斷等ノ如キ大部分ニ至テハ其位置ニ於テ種々ノ異論アリト雖モ己ニ右手ハ手術スルニ慣習セルカ故ニ左ノ定則ヲ以テス第一右ノ上肢ニ手術スルモハ術者患者ノ上肢ヲ水平ニ外送シテ其背後ニ起立シ右ノ下肢ニ於テスルトモハ其肢ノ外側ニ起立ス第二左ノ上肢ニ於テスルモハ其肢ノ前且内面ニ起立スヘシ此ノ定規ノ外ニ左ノ大腿ニ在テハ内側ノ狹隘ナルヲ以テ手術自由ナラス故ニ外側ニ起立スルヲ良トス殊ニ複刀法ニ當テ袖縁形ヲ造クルニ最モ肝要ナリトス然リト雖モ其他ノ手術ニハ斯ノ如ク緊要ナラス或人ハ此定則ニ反位セリ然レモ術

者ノ位置ヲ定ムルハ固ヨリ身體ノ運轉自在ヲ得ルニ外ナラサルカ故ニ臨機ノ位置ヲ撰フモ可ナリ余ハ上肢ノ位置ハ前ノ定則ニ賴ル何トナレハ四方ヨリ手術スルヲ得レハナリ然レモ或人ハ此位置ハ筋肉ノ緊張同シカラサルヲ以テ術后動モスレハ創面ノ不同ヲ來スト云ヘリ余モ亦疑ヲ置キ屢々實驗スルニ斯ノ如キ障害ハ決シテ遺殘スルコトナシ

(第五介者)

少クモ三名ヲ要セサルヘカラス其一人ハ患肢

ノ下端ヲ固持シ其部膿若クハ血液ノ爲ニ汚穢セルモハ其一人ハ兩手ヲ以テ切斷部ノ上部ノ皮膚ヲ上方ニ牽引シ且ツ其部ノ關節ヲ固定スヘシ其一人ハ止血器或ハ動脈壓定法ニ注意スヘシ其他常ニ鍛煉ノ介者アルアラハ迷障法委任スヘシ器械ヲ主トルモノハ止ヲ得サレハ欠クモ可ナリ

(第六手術間ノ止血)

此法ハ動脈幹ヲ壓迫スルニ因テ止血

スルヲ得ルナリ其法二種アリ止血器ヲ以テスル者或ハ介者ノ指頭ヲ以テスル者はナリ

(第七截斷部ノ詳論) 此論中ノ本旨トスル處ハ患部ハ全ク除去シ可及的の大部分ヲ保存スルヲ緊要トス然レモ下脚截斷等ニ在テハ患部外ノ切除ヲ要ス何トナレハ所謂ル人二足ヲ以テ容易ク歩行ヲ得ルヲアレハナリ例之ハ膝關節屈曲スルモノニアリテハ斷痕長キニ過クルキハ不用ニ屬スルノミナラス却テ害ヲ起スニ至ル故ニ截斷ノ部ヲ撰定スルノ目的ニニアリーハ要用ヲ以テ目的トシ一ハ適宜ヲ目的トスルニ在リ

施術法則

切斷術ヲ分テ三期トス第一期ハ軟部ヲ切り第二期ハ骨ヲ切り第三期ハ出血ヲ止ムル是ナリ

第一期

輪狀切斷

(甲)單純輪狀切斷ハ己ニ論セシ如ク先ツ其豫備裝置ヲ缺クル所ナカラシメ次テ術者ハ身体ニ滯滞ナキノ位置ヲ占メ又介者ヲ切斷セントスル所ノ上部ニ於テ皮膚ヲ緊張セシム茲ニ於テ術者ハ刀ヲ取り目途トスル所ノ骨ノ下端ニ於テ大約其部ノ周圍三分ノ二許ヲ隔テ、刀ヲ下ス例トス而シテ其執刀法ハ猶ホ複刀法ニ於ケルカ如ク種々アリ然レモ之ヲ約スルニ三種トス(其一)ハ只刀ヲ一回ノ以テ軟部ヲ截斷スル者或ハ左手ヲ刀背ニ副ヘテ送り以テ刀ノ回轉ノ已ニ左手ニテ其刀柄ヲ持チ得ヘキニ至ルキ左手ニテ其刀柄ヲ握リ而シテ十分ニ軟部ヲ截斷スルナリ蓋シ此法ハ古法ニシテ鎌狀刀ヲ用ルヲ便トス(其二)ハ二個ノ半月狀形ヲ作ル者ニ先ツ一

刀ニテ周圍ノ半ヲ切り直ニ其刀ヲ送りテ其半ハチ切ルルハ
 則チ其切端ニ二箇ノ半月狀形ヲ見ル此法ハ手術中ノ單且ツ
 便ナルモノナリ(其二)多角ノ切斷術ニシテ刀ノ方向ヲ變スル
 一三四回而シテ若シ始メヨリ小刀ヲ用ルルハ皮膚ヲ剝離スル
 ニモ又更ニ刀ヲ換フルトテ要スナシ
 其皮膚ヲ剝離スルヤ大抵其創部半面ヲ覆フヲ以テ足レリト
 ス即チ周圍ノ長サ三分一ナリ往古ハ其之ヲ誤ラサルカ爲メ
 ニ或ハ墨線ヲ畫キ或ハ糸繩ヲ結ンテ其位置ヲ定メタリト云
 フ而シテ其翻轉セシ袖緣邊ハ骨軸ト相平行スルヲ良シトス多
 クハ下邊ニ遺殘ノ凸隆シ易キ者ナリ宜ク注意セサルヘカ
 ラス又筋肉ヲ截ルノ際其袖緣形ノ皮膚ニ穿孔スルト屢々是
 アリ若シ之ヲ穿タハ直ニ其部ヨリ截離スベシ蓋シテ容易ク癒
 合スレハナリ其他皮下組織ニ血液滲漏アルカ或ハ周圍肥

滿シテ翻轉シ難キ者ハ其兩側ヲ直線ニ縱斷ス可シ但シ其之
 ヲ縱斷スルノ長サハ其景況ニ從テ差アリ而シテ袖緣形ノ翻轉
 部ヨリ下二三分ノ處ニ於テ筋肉ヲ截リ骨ニ達セシメ其肉ヲ
 擧上シ更ニ一箇若シクハ二箇氷柱狀ノ肉片ヲ殘ス可シ
 以上述ル所ノ法ニ賴テ截離シ了ルノ后其上部ノ軟肉ヲ擧ケ
 其接際ニ於テ更ニ之ヲ輪斷スレバ中間ニ氷柱狀ノ肉狀ヲ殘
 ス但シ其基礎ハ上部ニアリ次テ筋肉ヲ骨ヨリ剝離シ可及的
 之ヲ擧上スヘシ其法種々アリペールス氏ハ骨ト肉トノ間ニ
 刀尖ヲ挿入スルト八分而シテ骨ニ添テ輪狀ニ回轉シテ之ヲ切
 ルナリ

(乙)無袖緣複輪狀切斷ハ先ツ刀ヲ以テ皮膚及ヒ結組織ノミ
 ナリ截離シ筋鞘ハ皮膚ト共ニ切離スルト否ヤトハ大ニ議論ノ
 點ナルヲ甚ク難シ何トナレバ筋鞘ハ筋肉間ニ於テハ共ニ筋鞘ヲ
 離スルト難クレバナリ而シテ袖緣ヲ作ル切斷ナラザルヨリ

ハ強テ之ヲ剝離スルヲ要セス蓋シ筋而シ之ヲ舉上シ次テ其
鞘ハ皮膚ノ如ク收縮セサレバナリ
接際部ヨリ筋肉ト筋鞘トヲ截リ更ニ之ヲ零ケ氷柱狀ノ肉片
ヲ殘スナリ

(丙) 有袖縁複輪狀切斷法モ亦前條ノ如ク輪狀ニ皮膚ヲ切リ
次テ拇指及ヒ示指ヲ皮膚ト筋肉トノ間ニ挿入シ而シ其皮膚
ヲ牽引シ刀腹ヲ以テ徐々ニ之ヲ剝離ス可シ此際動モスレバ
袖縁ニ穿孔スルノ恐アレハ宜シク注意ヲ加ヘサルヲ得ス

瓣狀切斷

(甲) 中央ヨリ切テ斜メニ外方ニ及ホス者ニシテ己ニ豫メ裝置
ヲ備ルノ后右手ニ兩刃刀若クハ刀ノ銳尖ナル者ヲ取り其骨
軸ノ鋸斷ス可キ處ヨリ稍々下部ニ於テ左手ノ拇指ト示指ト
ヲ以テ筋肉ノ半ハヲ握擧シ且ツ之ヲ壓レ而シ其壓セシ處ノ
上部ヨリ力ヲ入ル可シ但シ刀柄ニ達スルヲ度トス乃チ斜メ

ニ外方ニ向ヒ弓狀ニ之ヲ切ルキハ稍圓形ノ瓣トナル某氏ハ
古法ニ從ヒ暫ラク刀ヲ骨ニ沿ヘテ切リ將ニ瓣ヲ作ラントス
ルキ直線ニ之ヲ切ル者アリ此法ハ其瓣方形ヲナスカ爲ニ肉
縁甚々厚シ腓腸部或ハ上膊ノ下端ニ於テハ殊ニ然リトス故
ニ甚々縫合ニ不便ナリ

法ノ如ク瓣己ニ成ルノ后ハ其瓣ヲ上方ニ翻轉シ若シ片瓣ナ
ルキハ其反對側ノ肉部ヲ半月狀ニ截テ骨ニ達セシトテ要ス
兩側瓣ハ更ニ片側瓣ヲ作り而シ其餘肉ヲ輪狀ニ切斷ス可シ
(乙) 外方ヨリ斜メニ切テ中央ニ入ル者ニシテ前ノ位置ニ從フ
モ可ナリトス然レモ其將ニ作ントスル所ノ瓣ニ對スルヲ長
トス其瓣ヲ造ルヤ基礎トナル處ノ部ヲ厭ヒ且ツ皮膚及ヒ軟
肉ヲ舉上シ彎刃刀ヲ以テ斜メニ截テ神速ニ基礎ニ達ス可シ
未熟ノ徒ハ瓣ノ形狀大小等ヲ畫テ皮膚ノミヲ切リ而シ之ヲ

學上シ後斜メニ筋肉ヲ截ル可シ此法ヲ以テスルハ截口甚
 タ正シク縫合其宜シキヲ得ル蓋シ此法ニ賴テ其結果ヲ得ル
 ハ實ニ難シトスル所唯其瓣厚キニ過キサルノ幸ヲ得ル者ナ
 リ以上論スル所ノ軟部切斷ハ四肢共ニ施用スト雖正ニ骨併
 列スル部ニ有テハ骨間韌帶ヲ切ラザルヲ得ス故ニ今茲ニ骨
 間韌帶ヲ切ルノ法ヲ略論セン骨間韌帶ヲ切ルノ方法ニ三種
 アリ(甲)方形ノ瓣ヲ造ル而シテ之ヲ上方ニ翻轉ス其接際部ヨ
 リ骨ヲ切ル乃チ其瓣ヲ以テ創面ヲ被覆スル者(乙)同シク方
 形ノ瓣ヲ造ル然レ正之ヲ下方ニ翻轉シ而シテ其上方ニ於テ韌
 帶ヲ斷チシ處ヨリ骨ヲ鋸斷スル者(丙)韌帶ヲ橫斷シ直チニ其
 部ヨリ骨ヲ鋸斷スル者ナリ是レ三法中最モ單且ツ良ナル者
 ナリ何レモ刀ハ(シカルベル)或ハ骨間韌帶刀兩刀ニシテ稍々
 ヲ用ユ

第二期

骨ヲ鋸斷セント欲セハ先ツ骨膜ヲ輪狀ニ切ル可シ或ル外科
 者流ハ骨膜ヲ剝離シ而シテ後之ヲ翻轉シ其接際部ニ於テ骨ヲ
 鋸斷シ以テ其骨面ヲ被ラシテ貴フ蓋シ骨ノ滋養ハ骨膜ニ基
 ヲクノ説ヲ目的トスルニ有リ予ハ思フク寧ロ骨膜ヲ輪狀ニ
 切り直ニ其部ヨリ骨ヲ鋸斷スルニ如カストス何トナレハ骨
 膜ハ或ル部ニ在テ容易ニ剝離シ得ヘシト雖正或ル部ニ於テ
 ハ剝離シ難ク遂ニ之ヲ寸断シ却テ化膿ヲ促スアレハナリ
 佛國ノオリエール氏ハ骨膜ヲ剝離シ骨ヲ鋸斷スルノ后二箇
 ノ方形瓣ヲ造リ其骨ノ面ヲ被覆シ骨髓炎ヲ防クト云フ然レ
 正予ハ之ヲ信セス蓋シ大腿部等ニ在テハ之ヲ施シ得ヘシト
 雖正他部ニ於テハ之ヲ行フ不能ハサルヲ以テナリ骨ヲ切ラ
 シトスルハ筋肉ヲ舉ヒスルカ爲ニ壓定巾鉄葉或ハ革皮ヲ用

ル者アリ然レ用予ハ介者ノ手ヲ借り之ヲ壓セシメ自ラ左手ノ拇指ヲ骨面ニアテ、之ヲ鋸断スルナリ鋸子使用ハ可及的進退頻數ナルヘカラス又介者ノ骨ヲ維持スルヤ必ス下方ニ壓スルヲ勿レ但シ折裂等ノ恐アレハナリ若シ誤テ折裂スルヲアラハ其骨片ノ大小ニ從テ鋸或ハ骨箝子ヲ以テ之ヲ除去ス可シ

第三期

止血法 之ナリ

切斷後治法

術後二三分時間ハ冷水ヲ濯キ全ク止血スルヲ待テ縫合ス輪狀切斷術后ニ在テハ斷頭ノ中央ニ絆創膏ヲ貼シ強ク骨端ヲ壓迫セサルヲ要ス瓣狀切斷ニ在テハ關節縫合ヲ施スヲ常トス而シテ中央ニ絆創膏ヲ貼スルモ亦可ナリ某氏ハ更ニ丁字帶

ヲ施セモ冷電法等ノ施用ニ却テ妨ケアリトス抑モ瓣狀切斷ノ發明以來術后直ニ縫合シ可ナルヤ或ハ稍々化膿スルヲ待テ縫合スルカ未タ一定ノ說ナシ蓋シ一得アレバ必ス一失アリ乙ハ外患ノ慮アレモ甲ハ此患ナク且ツ創面ノ腐敗ヲ防キ爲ニ創漿ヲ漏スト亦隨テ少シトス然リ而シテ其患トスル所ハ第二期ノ出血及ビ凝血ヨリスル膿膿等是レナリ化膿后ノ縫合ハ再出血ノキニ當テ利アルハ言ヲ埃タス往昔ハ創面ヨリ膿液ノ溢出スルヲ見テ以テ佳徵トナセリ是レ固ヨリ無稽ノ說ニ其失ニ至テハ先ツ外患多ク加之幾分ノ創漿ヲ失フ蓋シ化膿后ニ縫合スレハ癒合ノ期早シト雖モ多少排膿管ヲ殘サ、ルヲ得スケルン氏ランゲンベッキ氏ハ其中間ヲ取テ三時乃至十二時ニ縫合ス是レ滲出液ヲ漏ストヲ待テ縫合スル者ナリ尤モ適當ノ時期ナレモ瘡縫合后出血ノ患ナキ

ヲ豫決シ且ツ滲出液過多ニシテ遂ニ縫合ス可カラサル目的ノ者ハ速ニ縫合スルヲ要ス但シ盡ク全創ヲ密着セシム可カラズ必ス其一部ヲ開放ノ排膿ノ用ニ供スヘレ否ヲサレハタトヒ一部ニ滯溜セサルニ全創壓迫セラレテ化膿シ易キ者ナリ佛國ニ於テ外科醫某氏ハ今ニ於テ介達縫合ヲ稱用ス其法ハ布片或ハ綿撒糸ニ軟膏ヲ塗布セル者ヲ取り之ヲ創面ニ置キ以テ縫合ス故ニ其兩端ハ創ノ両口ニ剩餘ス創口已ニ癒ユルノ後此布片ヲ去ルヘシ

縫合終ラハ直ニ臥床セシメ稍患肢ヲ屈セシメ枕ヲ以テ切断頭ヲ高クシ之ヲ蠟布上ニ安置セシム可シ但シ斷口木綿ヲ以テ包裹シ自他ハ普通創傷ノ治後ニ從フヘシ

予切断術ノ書ヲ讀ム毎ニ必ス術後ノ治法宜シキヲ得ルト得サルトニ因テ大ニ預后ノ良否ニ關係アルヲ論セサルヲナ

シ夫レ各醫ノ説ク所皆一利アレバ一害アリ一定ノ説ヲ墨守シ難シ故ニ要スル所向レノ法ニ從フモ不可アルヲナシ然ルト雖モ衆醫ノ考按ニ出ル者ハ一般試験ヲ經サル者ナシ先ツ其主ナル法ハ(第一)自然良法即チ縫合セズ洗滌セズ且ツ繃帶ヲモ用ズ全ク自然ニ任スル者(第二)乾燥纏絡療法(第三)氷褻療法(第四)温濕療法

巴布微温ランゲンベッキ氏及ヒポック氏ノ連續微温浴法ニ浸漬ス 等ナリ第千八百五年ケルン氏ノ説ニ因レハ凡ソ創傷化膿スル迄ハ寒褻法ヲ施シ化膿後ハ巴布或ハ微温浴ニ如ク者ナシト予ハ常ニ氏ノ説ヲ稱用セリ抑モ新創ニハ充血ト出血ヲ防クヲ以テ專務トス而シテ防クニハ安置法ト創部ヲ高舉スルト寒褻法ノ三法ニ勝ル者ナシ已ニ成形性炎ヲ發シ患者其寒ニ堪ヘ得サルハ乃チ温濕法ヲ最トス是レ患者快心ヲ覺ヘルノモナラス成形機能亦催

進ス蓋シ此機能催進シ新織發生ノ期ニ至レハ即チ清潔掃除
法ヲ十分セサル可カラズ是レ新織發生腐織排除セラル、カ
故ニ此法ヲ以テ缺クベカラサル者トナセリ

手術后繼發症

(第一 繼痕^{ストレン}ノ痙攣) 大概此症ヲ分テ二種トス甲ハ強曲彎縮ヲ
起ス者ニノ常ニ關節近部ヲ切斷スルノ后ニ發シ易シ是レ或
ハ創痕牽引セラル、ニ源スル者アリ或ハ床面其宜シキヲ得
サルカ爲ニ其部壓迫ヲ受ルニ因ル者アリ斯ノ如ク強劇ナル
痙攣ヲ起スモ多クハ創傷ノ癒ニルニ從ヒ自ラ輕快ヲ得ル者
ナリ更ニ治療ヲ加ヘサルモ可ナリトス但シ下脚ノ如キハ術
後尋常ノ位置ヨリ少シク之ヲ内方ニ傾ケ可及的近傍ノ懸ヲ
除クヲ良トス乙ハ橋擲ノ爲ニ斷痕戰震シ以テ非常ノ劇痛若
クハ出血ヲ發スルト屢々是レアリ然ルモハ數個ノ布片ヲ以

テ斷痕ヲ枕上ニ固定セントヲ要ス其他阿片或ハ「モルヒチ」
等ヲ服用セシムヘシ但シ卷軸帶等ヲ以テ斷痕ノ上部ヲ綑帶
スレハ靜脈血行ヲ妨ケ却テ治療機能ヲ障碍スルノ恐アレバ
宜シク注意セザル可カラズ

(第二術后ノ出血) 此症亦種々アリ術後直ニ發スル者アリ或
ハ膿潰期ニ至テ初テ發スル者アリ其直發スル者ニ在テハ未
タ結締セサル動脈ヨリスル者或ハ已ニ結締スルモ其上部ニ
アル創傷ニ因ル者或ハ細少ノ動靜二脈若クハ毛細管ヨリ纖
肉性ノ出血アルハ何ヲ以テ之ヲ知ルヤ曰ク其斷痕ニ於テ急
性腫脹ヲ來タシ加之緊張ノ創ノ一部ヨリ已ニ血液ヲ洩ス
アリ又其腫脹尤モ急ニ其色鮮紅ナルモハ動脈出血タルヲ
察スヘシ此時ニ當テハ先ツ氷罨法ヲ施ス可シ若奏功ナキモ
ハ直ニ創面ヲ開キ血塊ヲ去リ而シテ已ニ前述アル所ノ止血法

ヲ撰用ス可シ

膿潰期ニ至テ出血スル者ハ甚ク危篤ノ症ニシテ醫ノ頗ル苦慮
スル所ナリ何トナレハ己ニ結締セル尿管中ノ血柱溶崩スル
カ或ハ尿管壁ノ壞亂スル等ヨリシテ發スルモノナレバナリ若
シ其出血大動脈ニ在ラバ適宜ノ部分ニ於テ結締法ヲ施シ其
小動脈ヨリスル者ハ燒烙法ヲ行フコト良トス

(第三斷痕炎) 創面癒合ノ爲ニ斷痕ニ適度ノ炎ヲ發スルハ常
態ナリト雖モ若シ其度ヲ過キルハ壞疽トナリ或ハ饒多ノ
膿潰ヲ來タシ遂ニ危篤症ニ陥ルコト亦少カラス是レ則チ術后
綳帶ノ緊縛ニ過キ或ハ創傷熱後四日乃至五日ヲ經テ發スル
者ニシテ多クハ膿ノ滯溜或ハ鋸斷セシ骨端ノ腐敗スルニヨル
凡ソ此斷痕炎ハ常ニ皮膚腫脹シ赤色ヲ呈ス滑澤トナリ恰モ
羅斯ニ類ス故ニ若シ術后日ヲ經ヌソ腫脹スルヲ見テ忽チ綳

帶ヲ緩クシ絆創膏及ビ縫合絲ヲ除去セサルヲ得ス而シテ腐骨
或ハ膿ノ滯溜ニ起因スル者ハ早晚膿腫ヲ發スル者ナリ若シ
遠隔部ニ於テ之ヲ發スルハ必ス破開スルコトヲ要ス又鋸斷
セシ骨ノ壞疽ハ其骨緣常ニ半輪狀トナリテ現出シ其凹面ハ
齒狀ニシテ粗糙トナル時トシテハ小骨片トナリテ現出スルモ
ノ是アリ

此斷痕壞疽ハ極メテ劇甚ナル炎症及ヒ腐敗物ノ創面ヲ毒傷
スルニ因テ起ル者ナリ或ハ病院壞疽トナリテ發スルコトアリ
此時ニ當テハ消毒藥燒煤藥或ハ烙鉄ヲ以テ之ヲ燒滅スルノ
外策アルコトナシ然レモ此烙鉄法ハ其壞疽面廣大ナルカ或ハ
關節近部ニアルハ却テ害ヲ起ス故ニ斯ノ如キ者ニ於テハ
唯自然ノ分界ヲ待ツコト最良トス

(第四銳尖斷痕) 此症ハ手術ノ際軟部ヲ吝ミ刀力豁然ナラス

或ハ施術全ク整理スルモ爾後膿潰若クハ壞疽等ノ爲ニ軟部不足ヲ生スルヨリ發スル者ナリ此症ニハ壞疽ナキ者ニハ輕々硝酸銀塗擦法ヲ行ヒ癩痕ノ發生ヲ促スヲ良トス而シテ其之ヲ促スノ法種々アリ例之ハ上部ヨリ綳帶シテ軟部ヲ壓下スル是レ其一ナリ「ドシメライペル」氏ハ治癒ノ末期ニ至テ斯ノ如キ法ヲ施シ大ニ功ヲ得タリト其法創縁ノ皮膚ヲ下方ニ牽引レ再ヒ収縮セサラシメ且ツ輕ク綳帶ヲ施ス可シ必ス強ク筋肉部ヲ壓シ以テ血行障得ヲ起サシメサルヲ要ス然レモコノ綳帶ハ極メテ弛緩シ易キカ故ニ屢々交換セサルヲ得ス又一法アリ絆創膏ノ一端ヲ創口ノ一方ニ貼シ斷痕ヲ一廻シ他端ヲ其他方ニ固着セシメ更ニ他品ヲ以テ之ヲ牽引スル者アリ此銳尖斷痕症已ニ成ルキハ斷然截除術ヲ施ス可シ又銳尖部軟部ト甚々相離ル、キハ再ヒ切斷術ヲ施サ、ルヘカラ

ス余ハ屢々之ヲ行テ功ヲ得シテアリ

(第五神經痛) 切斷創已ニ癒ユルノ後時トシテハ之ヲ發スルテアリ是レ或ハ神經ノ骨部若クハ肉部ニ癒着スルニ基ク者アリ或ハ疼痛性神經腫ノ發生スルニ因ル者アリ而シテ其神經端硬化シ外部ヨリ稍ヤ其動搖スルヲ觸知スルテアラハ速ニ之ヲ除去ス可シ其之ヲ除去スルヤ或ハ共ニ神經ノ一片ヲ除去シ或ハ止ヲ得サルキハ遠隔部ニ於テ其神經ヲ除去スルモ亦可ナリ此症ニ於テ蟻針、寒巴布若クハ温巴布、沃度叻、モルヒ子ノ皮下注入等ヲ用フルモ更ニ功ヲ奏スルコトナシ又其劇性ノ者ニ在テハ再ヒ切斷術ヲ施ス、テアリ然レモ可及的の神經切除法ヲ行フヲ良トス

(第六貧血及ヒ膿毒症) 此症ハ切斷後ノ繼發症中最モ惡性ナル者ニシテ往々危險症ヲ來タス、テアリ左ニ其膿毒症ノ解剖的

發現症ヲ掲ケン

(甲) 創面軟肉部ノ壞疽 若シ此症ヲ發スルハ極テ之ヲ清潔ニセント要ス故ニ浴湯法ヲ最良トス或ハ時トシテ烙鉄硝石精等ヲ以テ之ヲ燒燂スルコトアリ或ハ沃陣丁機木醋酸等ヲ塗布シテ屢々功ヲ得ルコトアリ

(乙) 切斷創面或ハ筋鞘中ノ皮下結締織及ヒ筋腹ニ於テ醋勵ナル膿液滯溜シ其筋腹ニアル者ハ微細ニシテ見ヘ難シ然レモ若シ之ヲ見ルコト得ハ大ニ之ヲ切開シ可ナリ

(丙) 骨髓炎 此症錐斷セシ創口ヨリ一ツオル半乃至二ツオルノ處ニ於テ判然炎症ノ分界スル者ハ其骨端ヲ截除シ可ナリ然レモ概シテ此法ヲ賞賛ス可ラス何トナレハ此症ハ創面ノ腐敗症ト兼發スルコトアレハナリ若シ然ルモハ一回之ヲ施スモ亦再ヒ發シ易ク加之骨髓炎ノ分界ヲ診

定スルコト甚々難ク且只腐骨内ニ腐敗シタル骨髓經ノ包裹サルコトヲ見ルノミ

○ 睽障藥使用法注意并中毒療法(人工呼吸)

手塚義三郎

谷口 廣

夫レ睽障法ノ用タル日常醫家ノ最モ喫緊トナスヘキモノニシテ百般ノ手術殊ニ脱臼手術及他ノ大手術ヲ施スニ方テハ至毫モ缺クヘカラサルモノタリ一朝此法ヲ誤リ施スカ或ハ其方法ヲ熟知セスノ之ヲ行フハ徒ニ患者ヲ死ニ陥ラシムルノ不覺ヲ取ルコトアリ苟モ醫タルモノハ宜シク此ノ點ニ睽障セスンハアルヘカラス

今睽障法ヲ施スニ方リテ其麻醉藥中數種アレモ目今歐米諸

國ニ最モ多ク賞用セラル、モノハ嘔吐兒母及依的兒ノ二ト
ナス就中嘔吐兒母ヲ以テ勝レリトス故ニ今茲ニ嘔吐兒母ノ
發明及性質ノ概畧ヲ述ヘントス

嘔吐兒ハ西曆一千八百卅一年(今チ去ル西曆三十八年前)リ
ビツヒ氏ノ創メテ製造セシモノニシテ其之ヲ最良ノ睽朦藥トシ
外科手術上ニ稱用セシハ「シンプソン」氏ニ在リトス蓋シ各國
ノ外科醫今日ニ至ル迄大凡三十八年間數千萬ノ患者ニ嘔吐
兒ヲ施用セシモ其中毒病ヲ發シ死ニ陥リシモノ僅カニ一二
ニ過キヌ今其表ヲ左ニ掲ク

驗者	場所	睽朦	死亡
「ケル」氏	エヂンボルト	三六五〇〇	一
「ヒルロート」氏	ウヰリン	一二五〇〇	一
「カペレル」氏	シユンステルリゲン	五〇〇〇	一

「リチャルドソン」氏 エングラント 三、一九六
「コーレス」氏 ウヰルギニア 二、八七三
「アンデレウス」氏 アメリカ 二、七二三
「レントル」氏 ロンドン 二、六六六

嘔吐兒(即チ第三格魯兒化メチール水素)ノ純良ナル品ハ無
色透明ノ液ニシテ異重ハ一四九ナリ氣中ニ放置スレハ盡ク揮
發飛散シ毫モ沈淀ヲ殘サス其反應中性ニシテ攝氏六十度ノ
温ニ遇テ沸騰水中ニ沈没シ濁濁セス水ニ混和スルコトナク酒
精脂肪油及依的兒ニ同般ノ比例ヲ以テ能ク混淆ス而シテ其純
良ナラサルモノヲ吸入スレハ恐ルヘキ危險症ヲ發ス故ニ醫
用ニ供スルモノハ須ク純良ノ品ヲ撰ブヘシ今其單簡ナル鑑
識法ヲ左ニ掲ク

(第一) 之ニ蒸餾水ヲ加ヘ振盪スルニ其水ニ酸性ヲ附與ス

ルナク又硝酸銀液ニ逢フテ溷濁或ハ沉澱ヲ生ス可カ
ラス

(第二) 之ニ沃土加留母液ヲ注加スルニ紫色ヲ呈スヘカラ
ズ

(第四) 硫酸及ヒ加里滷汁ノ混液ニ和スルモ褐色ニ變スル
ナシ

(第五) 硫酸ヲ注クニ混濁褐色ヲ呈セス(之ヲ呈スレハ酒精
ヲ含ム証ナリ)

(第六) 植物性色素ニ逢テ變化ナシ

(第七) 白色紙上ニ点滴シテ其飛散スル后毫モ痕跡ヲ認ム
ヘカラス

前上述ルカ如ク隠蔽法ヲ施スニ方リテ嘔囉吩ハ極メテ純良
ノ品ヲ撰用シ加之其使用法注意及ヒ人工呼吸法等充分ニ熟

知スルニ於テハ蓋シ之カ爲メ死ニ陥ラシムル等ノ恐レ勿カ
ル可シ歐洲ノ大家「マスバウム」氏曰ク至極純良ノ嘔囉吩ハ
眞性ノ毒物ニ非ラサルヲ試驗的ニ証セリト夫然リ唯其嘔
囉吩ノ爲ニ中毒症ヲ發シ患者ヲ死ニ至ラシムルモノハ全
ク是等ノ方法ヲ忽ニスルニ據ルト謂フモ亦タ過言ニアラサ
ルヘシ

使用法

先ツ嘔囉吩ノ蒸氣ハ十分ニ空氣ト混和ノ嗅入セシムルヲ要
ス普ハ海綿布片等ニ藥液ヲ注キ鼻口ヲ壓塞セシメタルモ然
ルモ空氣ヲ輸送スルノ道路ヲ絶ツカ故ニ甚タ危險ナリ現
今ハ「スキャンテル」氏ノ裝置(即チ鉄線ニテ骨ヲ製作シ布片
ヲ以テ之ヲ被ヒ而シ其上ニ藥液ヲ灌ク)或ハ「エスマルク」氏
ノ發明セル隠蔽器即チ嘴嚙ヲ用ユ而シ乙ハ用法復雜ナラス

助者僅少ノ際ニハ最モ便ナリ加之每呼吸十分ニ空氣ト共ニ
 竄入ス甲ハ通常人ノ能ク用ユル處タリ用法頗ル單簡ニシ好
 シト雖動モスレハ嘔囉^{オロ}ヲ多量ニ灌溉シ布片ノ内面ヨリ顔
 面或ハ眼中ニ點滴シ是レカ爲メ劇シキ痲衝ヲ惹起セシムル
 一アルヲ以テ小心注意ノ施ス可シ其他「エンケル」氏ノ瞼障器
 及ヒ英式ノ嘴壘^{ノズル}瞼障器ナルモノアリ
 又々麻酔法ヲ施スニ方リテ豫メ備置スヘキ要器ハ「エスマル
 ク」氏ノ牽舌^{トング}拮子「ハイセル」氏ノ開嚥器等欠クヘカラサルモ
 ノナリ

嘔囉^{オロ}ヲ嗅入^ニ發スル處ノ病狀左ノ如シ

(第一期) 即チ興奮期 全身温暖ヲ覺ヘ神氣發揚快樂輕爽トナ

リ四肢^{キルミカキチ}蟻走趾指ノ知覺鈍麻シ次テ精力減退言語不明トナリ
 且ツ聽ク所ノ聲音恰モ遠地ヨリ來ルカ如ク或ハ眠ルカ如ク

五官及ヒ精神錯誤シ謔語ヲ發シ或ハ喋々多言ス而シテ脈拍呼
 吸頻數瞳孔多クハ縮小ス其他嘔吐ヲ發スル一アリ(嘔吐ハ多
 シハ醒覺期ニ來ル)此期ニアリテモ舌根^{ツバ}攣縮^シ爲メニ呼吸ヲ
 歇止スル一アリ

(第二期) 麻酔期又堪耐期 即チ興奮期ヨリ移リ來ルモノニ

シテ凡テ麻痺症狀(麻痺症狀ヲ呈スル藥量ハ一瓦ヨリ五十瓦
 ノ差等アレ^レモ多クハ五瓦乃至十瓦ニテ足レリトス)ヲ呈ス即
 チ精神身體靜止シ筋肉韌帶等尽ク弛緩シ高ク尉聲ヲ發シ(軟
 口蓋麻痺スルニ由ル)眼瞼閉合シ知覺全ク消失シ此際至酷ノ
 手術ヲ施スモ更ニ感覺ナシ而シテ脈拍細微且緩徐ニシテ弱シ
 呼吸モ深大ニシテ緩慢トナル此期ニ於テハ氷片ヲ以テ顔面及
 胸廓ヲ摩擦スルカ濕布ヲ以テ胸ヲ打ツキハ醒覺ス或ハ然ラ
 サルモ五分時乃至三四十分時嗅入ヲ罷ムルニ於テハ漸次醒

覺スルモノナリ

(第三期) 諸部ノ麻痺愈々増進シ何等ノ刺戟モ決シテ應スルヲナシ試ミニ指ヲ角膜ニ觸接スルモ眼瞼閉鎖スルヲナシ呼吸及ヒ心動僅カニ存スルノミ脈拍ハ恰モ糸ヲ牽引スルカ如シ遂ニ顔面「チアノーゼ」皮膚凝冷、眼球突出、瞳孔散大スル等所謂ル炭酸中毒ノ症狀ヲ呈スルニ至ル故ニ可及的此期ニ陥ラサル機注意スヘシ然レモ大手術ニテ止ヲ得ス此期ニ移リ心動呼吸共ニ遏止スルニ至ラハ速ニ人工呼吸ヲ施スベシ

注意

(第一) 嘔囉嘔噎法ヲ施サント欲セハ術前三四時間食物ヲ與ヘサルヘシ

(第二) 患者ノ位置ハ仰臥又ハ横臥セシムルヲ法トス何トナレハ伏臥セシムルハ呼吸息迫酸素缺乏症等ヲ發シ坐

セシムルハ眩暈ヲ起シ危險ナレハナリ

(第三) 頸部、胸部、及腹部等渾テ吸氣筋殊ニ横隔膜ノ運營ヲ妨シヘキ一切ノ衣服ヲ脱セシムヘシ

(第四) 嚙嚙法ヲ施ス前ニハ必スシモ心臓ノ如何ヲ検査スヘシ即チ心臓筋質ノ脂肪變性、大動脈系統ノアテローム變質、瓣膜疾患等或ハ又々慢性酒精中毒、慢性貧血、血液變調癩癩等ニ罹レル患者ニ用ユルニ方リテハ能ク之ニ耐ヘ得ルヤ否宜シク注意スヘシ何トナレハ渾テ心臓病ヲ患テ心臓機能ノ停止シ易キ症ニアリテハ俄然心機動遏止シ恐ルヘキ危險症即チ炭酸中毒ノ症狀ヲ呈シ呼吸麻痺、心臓麻痺等ヲ惹起シ斃ル、モノナレハナリ

(第五) 嚙嚙藥囊キニ述ル如ク純良ノ藥劑ヲ試驗シ用ニ供スヘシ若シ不良ノ品ヲ吸入セシムルハ俄然第一期ノ末

ニ痙攣ヲ發スルヲ以テナリ是レ靜止ノ中樞十分麻醉ノ鼓
舞神經ノミ作用スルニ據ル

(第六) 渾テ病体ニ在リテ中毒ノ症狀ヲ呈スルハ第二期中
ニアリ即チ惡液家ノ如キハ第三期ニ移ル丁甚々速ナリ又
其人ノ性質ニヨリ二瓦ヲ嗅入ノ已ニ第三期ニ陷ルモノア
リ或ハ又八十瓦乃至百瓦ヲ用ユルモ第二期ニ止マルモノ
アリ如此感シ難キ人ニハ始メ莫爾比涅八分ハノ一乃至六
分ハノ一ヲ胃部ニ注入シ后嗅入法ヲ施スキハ第二期即チ
外科手術ヲ施シ得ヘキ時期ニ移ル丁速カナリ且ツ嗅入ヲ
止ムルモ尙ホ第二期症ヲ持續スル丁長シトス

(第七) 平素酒精ヲ嗜ムカ或ハコロールホルムニ習慣セル
人ニアリテハ三十瓦以上ヲ用ヒサレハ第二期症(所謂ル麻
醉症)ヲ呈セサル丁アリ

(第八) 小兒ニ於テ嘔囉啞ヲ用ユルハ書籍上ノ論說ニ在テ
ハ必ス二歳以上ノモノニアラサレハ之ヲ禁スルモノナレ
田佐藤進氏ノ實驗ニ由レハ生后十日乃至十五日ヲ經過セ
シ小兒ニアリテハ決シテ其害ヲ蒙ラサル丁ヲ証セリ

(第九) 心機動微弱ニ殊ニ衰弱虛脱ノ狀ヲ呈スルモノニ
此法ヲ施サント欲セハ嘔囉啞嗅入前平素ノ酒量ヲ訊問シ
強酒ヲ投與スルヲ良トス

(第十) 嘔囉啞ヲ用ユル間ハ脈拍呼吸ニ注意シ瞬間モ忽ニ
スヘカラス

(第十一) 第一期即チ興奮期ニ方リ患者暴戻甚シキモ抑制
スルニ漫リニ暴力ヲ用ユル丁勿レ又麻醉中嘔吐ヲ來サハ
頭ヲ側方ニ向ケ吐物ヲ氣管中ニ竄入セシメサル様注意ス
ヘシ